

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野
東京大学医学部健康総合科学科家族看護学教室

年報（第13号）

2017年4月～2019年3月

家族看護学

上別府研究室

2018年度 卒業生寄贈

2019年3月16日



2017年度 教室員の集合写真
2017年4月4日



2018年度 教室員の集合写真
2018年4月3日



第8回 東京大学家族看護学教室同窓会
2019年3月16日

ご挨拶

隔年で発行して参りました家族看護学教室年報も、第13号を数える運びとなりました。平素よりご支援をいただいております医学系研究科内外の先生方に、心よりお礼申し上げます。

2017年4月からの2年間は、佐藤伊織講師を筆頭に、キタ幸子助教、副島堯史助教、事務方、大学院生諸君の素晴らしいサポートを得て、上別府が2期目の健康科学・看護学専攻長としての任務を全うさせていただきました。専攻長の仕事は大学院の運営の根幹にかかわるもので、大学院係との二人三脚で進めていきます。進学式のあと専攻オリエンテーションを行い、5月初頭に院試説明会を終えると、8月の院試に向けて入念に準備を進め、厳正な院試を敢行します。秋になると1月の修士論文発表会や2月初めの博士後期課程院試に向けた準備を進めつつ、11月に課程博士の学位申請時期を迎えますので、審査委員会委員を編成します。年が明けると、修士論文の提出を監督し、発表会と博士後期課程の入試を敢行します。学位審査が終了した院生の名簿を確認し、所定の手続きを経た後、学位記伝達式を挙行し、修了生の門出を祝福して一年度が巡ります。今期のトピックスとしては、博士後期課程の秋入学制度を創設したことでしょうか（2020年度入試から開始）。これに伴い夏季に開いてきた「社会人枠」を廃止しました。秋入学制度は、海外の大学等で学んでいる修士の院生に利用しやすい制度になっていますので、優秀な留学生等からの応募を心待ちにしているところです。もう一つのビッグニュースとして、2019年3月の学位記伝達式に、Global Nursing Research Center (GNRC) が招聘した元NINRのディレクターのPatricia Grady先生のご出席を賜り、修了生に向けての祝辞をいただくことが叶いました！ Making a Difference と題した激励の辞でした。Grady先生の温かく力強い言葉は修了生の心に響き、これまで東大大学院で学び、蓄積した知をさらに追及し、広く日本、世界に貢献していきたいという思いを強くしたことと思います。

2017年4月に若手研究者養成を目的とする日本初の看護学研究所GNRCが、東京大学大学院医学系研究科附属の3つめのセンターとして開設されたことは、おそらく日本の看護学史に刻まれるエポックメイキングな出来事だと言っても過言ではないと思います。上別府もその副センター長として多くの経験をさせていただきました。センターのポストク第1期生として教室修了生の目麻里子君が、第2期生戸部浩美君が採用されました。またセンターのおかげでグローバル化にいつそう拍車がかかり、香港理工大学からEdward Chan Ko Ling先生、Children's National Medical CenterからPamela Hinds先生を招聘し、ポストクセミナーや研究指導をしていただきました。（さらに学部教育改革事業の一環として、香港中文大学のSek-Ying Chair先生やアムステルダム大学のSusan Bogels先生を招聘し、ホスト教室を務めさせていただきました。）院生にとっても国際的な環境が日常的になり、多くの刺激や学びを得ることができたことと思います。

2年間に博士の学位を修得されたのは、戸部浩美君、江本駿君、鈴木征吾君、中嶋祥平君、中村真由美君の5名、修士は、吉備智史君、小林明日香君、林真由君、村田翔君、松永百恵君、上原奈々君の6名、学士は高橋梨沙君になります。それぞれ、家族の重要なテーマを扱い力のこもった研究でした。修了おめでとうございます。この間、教室を修了しポストクを経て、目君が高齢者在宅長期ケア看護学分野の助教に、戸部君がGNRCの特任助教に採用されたことは、教室としても専攻看護系としても、新しいキャリアパスを創ったことの結果のひとつとして嬉しい出来事でした。

次の2年間も、思いがけず専攻長を拝命いたしました。私の最後の東京大学人人生をかけて、若手研究者育成と、そのための環境整備に注力したいと考えていますので、先生がたのかわらぬご支援ご鞭撻をどうぞ宜しくお願いいたします。

2019年4月

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻

家族看護学分野 教授

上別府 圭子

目 次

御挨拶

1. 研究活動	
1-1. 学術研究業績	5
1-2. 研究活動費	30
1-3. 学内外の公的活動	33
1-4. 国際活動	35
2. 学位論文（卒業論文・修士論文・博士論文）	47
3. 教室カンファレンス	49
4. 家族看護学教室研究会	
4-1. 家族看護学研究会	73
4-2. 家族ケア症例研究会	75
5. 院生自主勉強会	77
6. 教育活動（担当講義・実習）	84
7. 教室の沿革	86
資料（卒業論文・修士論文・博士論文）	89
家族看護学教室 教室員（平成 29 年度～平成 30 年度）	

1. 研究活動

1-1. 学術研究業績

論文（原著論文・総説）

Shimada H, Kada A, Shima H, Tono C, Yuza Y, Kurosawa H, Watanabe A, Ito M, Uryu M, Kamibeppu K, Kiyokawa N, Adachi S, Saito AM, Tanizawa A. Rationale and design of a prospective, multicentre, stop tyrosine kinase inhibitor trial of paediatric patients with chronic myeloid leukaemia with sustained complete molecular response (STKI-14). *Hiroshima Journal of Medical Sciences*. 2018 Mar; 67(1): 7-13.

Niiyama H, Kontkanen I, Paarvilainen E, Kamibeppu K. A comparison of personality maturity among Japanese youth and Finnish young adult students: a cross-sectional study using Erikson psychosocial stage inventory and sense of coherence scale. *International Journal of Adolescence and Youth*. 2018 Feb; 23(4): 482-495.

Sato I, Higuchi A, Yanagisawa T, Murayama S, Kumabe K, Sugiyama K, Mukasa A, Saito N, Sawamura Y, Terasaki M, Shibui S, Takahashi J, Nishikawa R, Ishida Y, Kamibeppu K. Employment status and termination among survivors of pediatric brain tumors: a cross-sectional survey. *International Journal of Clinical Oncology*. 2018 Apr; 23(5): 801-811.

Kita S, Chan KL, Tobe H, Hayashi M, Umeshita K, Matsunaga M, Uehara N, Kamibeppu K. A follow-up study on the continuity and spillover effects of intimate partner violence during pregnancy on postnatal child abuse. *Journal of Interpersonal Violence*. 2019 Jan; (In press)

Kita S, Umeshita K, Tobe H, Hayashi M, Kamibeppu K. Intimate partner violence, negative attitudes towards pregnancy, and mother-to-fetus bonding failure among Japanese pregnant woman. *Violence and Victims*. 2018 Aug; (in press)

Kita S, Haruna M, Matsuzaki M, Kamibeppu K. Does antenatal social support affect the relationships between intimate partner violence during pregnancy and perinatal mental health? *Violence Against Women*. 2017 Oct; (in press)

Sakka M, Goto J, Kita S, Sato I, Soejima T, Kamibeppu K. Associations among behavioral and psychological symptoms of dementia, care burden, and family-to-work conflict of employed family caregivers. *Geriatrics & Gerontology International*. 2019 Jan; 19(1): 51-55.

Suzuki S, Sato I, Emoto S, Kamibeppu K. Physio-psychological burdens and social restrictions on parents of children with technology dependency are associated with care coordination by nurses. *Journal of Pediatric Nursing.* 2017 Sep-Oct; 36: 124-131.

Nakamura M, Kita S, Kikuchi R, Hirata Y, Shindo T, Shimizu N, Inuzuka R, Oka A, Kamibeppu K. A qualitative assessment of adolescent girls' perception of living with congenital heart disease: Focusing on future pregnancies and childbirth. *Journal of Pediatric Nursing.* 2018 Jan-Feb; 38: e12-e18.

Fukui C, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Yokouchi N, Sumikawa Y, Horinuki F, Baba A, Suto M, Okada H, Ogino R, Park H, Okata J. Needs of persons with dementia and their family caregivers in dementia cafés. *Aging Clinical and Experimental Research.* 2019 Jan; (In press)

Fukui C, Sakka M, Amiya RM, Sato I, Kamibeppu K. Validation of family conflict scales for family caregivers of persons with dementia in long-term care facilities and exploration of family conflicts and support. *International Psychogeriatrics.* 2018 May; 30(5): 749-759.

Oshiro R, Kopitz J, Soejima T, Kibi S, Kamibeppu K, Sakamoto S, Taku K. Perceptions of positive and negative changes for posttraumatic growth and depreciation: Judgments from Japanese undergraduates. *Personality and Individual Differences.* 2019 Jan; 137: 17-21.

Imai S, Kita S, Tobe H, Watanabe M, Nishizono-Maher A, Kamibeppu K. Postpartum depressive symptoms and their association with social support among foreign mothers in Japan at 3 to 4 months postpartum. *International Journal of Nursing Practice.* 2017 Oct; 23(5).

Komachi M, Kamibeppu K. Association between resilience and acute stress symptoms at early admission to the intensive care unit. *Mental Health & Prevention.* 2018 Mar; 9: 34-41.

Toyama N, Kurihara K, Muranaka M, Shirai K, Kamibeppu K. Designing a scale to assess family nursing practice among public health nurses in Japan. *Health.* 2017 Jul; 9(7): 1019-1028.

Toyama N, Kurihara K, Muranaka M, Shirai K, Kamibeppu K. Designing a scale to assess breastfeeding support among public health nurses in Japan. *Health.* 2017 Jun; 9(6): 964-974.

Toyama N, Muranaka M, Kurihara K, Kamibeppu K. Qualitative study of breastfeeding support by public health nurses in Japan. *Health.* 2017 Mar; 9(3): 451-458.

Sanjo M, Morita T, Miyashita M, Sato K, Kamibeppu K, Tsuneto S, Shima Y. Are bereaved family members satisfied with information provision about palliative care units in Japan? *American Journal of Hospice and Palliative Medicine*. 2018 Feb; 35(2): 275-283.

Kasahara-Kiritani M, Matoba T, Kikuzawa S, Sakano J, Sugiyama K, Yamaki C, Mochizuki M, Yamazaki Y. Public perceptions toward mental illness in Japan. *Asian Journal of Psychiatry*. 2018 Jun; 35: 55-60.

Kasahara-Kiritani M, Kikuchi R, Ikeda M, Kamibeppu K. Relationships in families after a member's death: a qualitative metasynthesis. *Journal of Loss & Trauma*. 2017 Apr; 22(5): 396-411.

Kikuchi R, Mizuta K, Urahashi T, Sanada Y, Yamada N, Onuma E, Sato I, Kamibeppu K. Quality of life of biliary atresia after living donor liver transplant in Japan. *Pediatrics International*. 2018 Feb; 60(2): 183-190.

武者貴美子, 上別府圭子. 「産後 1 ヶ月の日常ストレス調査票」の開発と産後 1 ヶ月健診での有用性に関する一考察. *母性衛生*. 2017 May; 58(1): 83-90.

池田こころ, 佐藤伊織, 上別府圭子. 小児がんで入院している子どものきょうだいに対する介入—情報共有の内容とその効果に関する文献検討—. *小児がん看護*. 2018 Sep; 13(1): 61-73.

石田也寸志, 佐藤伊織, 井上雅美, 早川晶, 塩原正明, 佐藤篤, 上別府圭子, 熱田由子, 山下卓也, 谷口修一. 本邦の自家/同種造血幹細胞移植後長期生存小児患者における Quality of Life に関する横断研究. *日本造血細胞移植学会雑誌*. 2018 Jul; 7(3): 107-112.

岩崎美和, 佐藤敦志, 中村真由美, 鈴木征吾, 小林明日香, キタ幸子, 佐藤伊織, 上別府圭子, 平田陽一郎. 当院における移行期支援外来の取り組みと課題～他疾患と比較した循環器疾患患者の特徴に焦点を当てて～. *日本成人先天性心疾患学会雑誌*. 2019 Feb; (In press)

丸山暁子, 福澤利江子, 大友英子, 上別府圭子. 出生前に先天性心疾患の診断を受けた子どもに関する母親の時間的展望—「普通」という意味の継時的な変容とその契機—. *家族看護学研究*. 2018 Sep; 24(1): 62-73.

論文（依頼原稿など）

上別府圭子, 真田弘美, 山本則子. アジアの大学視察で得たもの. 看護研究. 2018 Nov-Dec; 51(7): 658-662.

上別府圭子, 福澤利江子. 複線経路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA). 家族看護学研究. 2018 Sep; 24(1): 123-125.

上別府圭子. 構造化面接は正しい考えを拾えているのか?. 精神科. 2018 Aug; 33(2): 167-172.

上別府圭子. 書評. メディカルファミリーセラピー —患者・家族・医療チームをつなぐ統合的ケア—. スーザン・H・マクダニエルほか著/渡辺俊之監訳、小笠原知子、辻井弘美、永嶋有希子訳. 家族療法研究. 2017 Nov; 34(3): 92-93.

上別府圭子. 看護・介護領域におけるロボットとの協働—ロボットに期待することと看護師や介護者の領分—. 保健の科学, 2017 Aug; 59(8): 508-509.

大江真琴, 真田弘美, 上別府圭子, 山本則子. 大学視察の目的と概要. 看護研究. 2018 Nov-Dec; 51(7): 620-627.

春名めぐみ, 成瀬昂, 上別府圭子. 各大学の視察報告 4 香港中文大学. 看護研究. 2018 Nov-Dec; 51(7): 651-657.

真田弘美, 上別府圭子, 山本則子, 大江真琴, 高橋真美. 東京大学医学部附属 Global Nursing Research Center 構想—イノベティブ看護学研究の推進に向けて—. 看護研究. 2017 Apr; 50(2): 102-106.

キタ幸子. 暴力被害を受けた妊婦と子どもを守る—助産師は今、何ができるか—. 助産雑誌. 2018 May; 72(5): 324-330.

キタ幸子. 連載 ドメスティック・バイオレンス (DV) のない社会をめざして—在日外国人女性におけるパートナーからの暴力 (IPV) 被害の理解と支援. 保健の科学. 2017 Oct; 59(19): 697-703.

副島堯史, 星順隆, 吉備智史, 上別府圭子. 児童生徒への「小児がん教育」における現状と課題. 保健の科学. 2018 Feb; 60(2): 105-110.

真田弘美, 仲上豪二郎, 山本則子, 野口麻衣子, 副島堯史. 視察報告－若手研究者育成の視点 NIH による若手研究者育成支援－NINR を中心に. 看護研究. 2017 Apr; 50(2): 107-113.

山本則子, 仲上豪二郎, 真田弘美, 野口麻衣子, 副島堯史. 視察報告－若手研究者育成の視点 University of Pennsylvania. 看護研究. 2017 Apr; 50(2): 114-119.

副島堯史, 山本則子, 真田弘美, 仲上豪二郎, 野口麻衣子. 視察報告－若手研究者育成の視点 Johns Hopkins University. 看護研究. 2017 Apr; 50(2): 120-126.

野口麻衣子, 山本則子, 真田弘美, 仲上豪二郎, 副島堯史. 視察報告－若手研究者育成の視点 University of California, San Francisco. 看護研究. 2017 Apr; 50(2): 127-132.

仲上豪二郎, 真田弘美, 山本則子, 野口麻衣子, 副島堯史. 視察報告－看理連携の視点 NINR における所内研究. 看護研究. 2017 Apr; 50(2): 133-138.

戸部浩美, 井上裕美, キタ幸子. 周産期におけるマインドフルネスの活用 (特集 産後うつ病・精神疾患のケアと薬: 助産師がすぐに始められる周産期メンタルヘルスケア). ペリネイタルケア. 2017 Dec; 36(12): 1191-1194.

学会二次抄録など

Kamibepu K, Kurihara K, Ikeda M, Sato I, Soejima T, Kikuchi R, Suzuki S, Nagoya Y, Yamane Y, Takahashi M, Hayasaka H, Tsuda R, Imaizumi M, Sato A, Shiwaku H, Suzuki Y, Inoue Y, Sasahara Y, Rikiishi T. The struggle of families who experienced childhood cancer and great east Japan earthquake disaster. Pediatric Blood & Cancer. 2017 Nov; 64 Supplement S3: S486.

Janice M Bell, 上別府圭子 (訳). Japanese Journal of Research in Family Nursing and Journal of Family Nursing Collaboration 2017. 家族看護学研究, 2017 Sep; 23(1): 102.

Janice M Bell, 上別府圭子 (訳). Japanese Journal of Research in Family Nursing and Journal of Family Nursing Collaboration 2018. 家族看護学研究, 2018 Sep; 24(1): 126.

Ishibashi A, Kamibepu K. Developing resources on positive attitudes and a sense of purpose to gain resilience in adolescents with cancer. Pediatric Blood & Cancer. 2017 Nov; 64 Supplement S3: S392.

Ishida Y, Kamibeppu K, Inoue M, Hayakawa A, Shiobara M, Sato A, Yamashita T, Atsuta Y. Quality of life in long-term childhood survivors after autologous or allogeneic stem cell transplantation in Japan. *Pediatric Blood & Cancer*. 2017 Nov; 64 Supplement S4: S78.

上別府圭子. 第 31 回メンタルヘルスの集い「子どもをめぐるみんなの課題～虐待の連鎖を断ち切る～」を企画して. *心と社会*. 2017 Jun; 168: 11-14.

上別府圭子, 池田真理. 第 24 回学術集会シンポジウム「事例研究とナラティブ」. *家族看護学研究*, 2018 March; 23(2): 188.

上別府圭子 (提言). 目をそらすことの功罪. *小児保健研究*, 2018 Oct; 77(6): 487.

上別府圭子 (巻頭のことば). 医療の進歩と家族看護. *保健の科学*, 2018 Oct; 60(10): 649.

上別府圭子 (巻頭言). *小児がん看護*, 2018 Sep; 13(1): 1.

上別府圭子 (巻頭のことば). 第 3 期がん対策推進基本計画の閣議決定と小児・AYA 世代のがんの長期フォローアップ体制整備事業の指導. *保健の科学*, 2017 Dec; 59(12): 793.

Anderson, JG. ほか, キタ幸子 (訳). “オンライン教会の支援 (The church of online support)” : 認知症をもつ人の家族介護者におけるブログ活用の効果. *家族看護学研究*. 2017 Sep; 23(1): 107.

Soejima T, Hoshi Y, Kibi S, Emoto S, Sato I, Kamibeppu K. Effects of a lecture on childhood cancer on students' knowledge about and interest in interacting with children with cancer. *Pediatric Blood & Cancer*. 2017 Nov; 64 Supplement S4: S80.

Duhamel, F. ほか, 澤柳匠, キタ幸子 (訳). 家族システムアプローチの臨床実践への応用 : 知識の臨床応用に関する研究経験. *家族看護学研究*. 2018 Sep; 24(1): 130.

著書・編著・教科書など

上別府圭子（編集，代表著者），井上玲子，新井陽子，浅野みどり，佐藤伊織，小林京子，副島堯史，池田真理，キタ幸子，渡辺俊之，藤井淳子，高見紀子，児玉久仁子，関根光枝，櫻井大輔，田村恵美，高木明子，新村直子（著）．系統看護学講座 別巻 家族看護学．医学書院，2018 Jan.

渡辺雅子（著）．上別府圭子，飛鳥田まり（監修）．虐待を防ぐ保健師訪問 介入困難な家族とかかわるコツ．杏林書院，2017 Dec.

上別府圭子（編集）．特集 きょうだいをめぐる心理社会的課題．保健の科学，杏林書院，2019 Feb; 61(2).

上別府圭子（編集）．特集 看護・介護領域におけるロボットとの協働．保健の科学，杏林書院，2017 Aug; 59(8).

上別府圭子（編集）．特集 子どもを育む遊びとおもちゃ．保健の科学，杏林書院，2018 May; 60(5).

上別府圭子，中村真由美，小林明日香（執筆）．質的心理学辞典，新曜社，2018 Dec.

キタ幸子，戸部浩美，梅下かおり，今井紗緒，上別府圭子（著）．第2部 発達に影響を及ぼす危険因子と保護因子 第6章 うつ病の母親．青木豊，松本英夫編著．乳幼児精神保健の基礎と実践．アセスメントと支援のためのガイドブック，岩崎学術出版社，2017 Jun; 85-95.

研究会議・報告書など

上別府圭子，佐藤伊織，副島堯史，中嶋祥平，小林明日香，村田翔．QOL 研究センターからの報告．平成 30 年第 9 回 JCCG 長期フォローアップ委員会，2018 年 5 月 27 日，東京都文京区．

上別府圭子，佐藤伊織，副島堯史，中嶋祥平，小林明日香，村田翔．QOL 研究センターからの報告．平成 29 年第 8 回 JCCG 長期フォローアップ委員会，2018 年 1 月 28 日，東京都新宿区．

上別府圭子，佐藤伊織，副島堯史，中嶋祥平，小林明日香，村田翔．全体会議「QOL 研究の進捗状況」第 2 回 JCCG 血液腫瘍分科会（JPLSG）全体会議，2017 年 11 月 24-25 日，愛知県名古屋市．

上別府圭子, 佐藤伊織, 副島堯史, 中嶋祥平, 小林明日香, 村田翔. 分科会Ⅱ「QOL 研究セミナー報告」「看護師セミナー」. 第2回 JCCG 血液腫瘍分科会 (JPLSG) 全体会議, 2017年11月24-25日, 愛知県名古屋市.

上別府圭子, 佐藤伊織, 副島堯史, 中嶋祥平, 小林明日香, 村田翔. QOL アンケート配布・回収状況の詳細報告 (ALL-B12). 平成29年度 第1回 JCCG 血液腫瘍分科会 (JPLSG) 全体会議分科会Ⅱ, 2017年6月16-17日, 東京都中央区.

上別府圭子, 佐藤伊織, 副島堯史, 中嶋祥平, 小林明日香, 村田翔. QOL 研究センターからの報告. 平成29年第5回 JCCG 長期フォローアップ委員会, 2017年5月14日, 東京都文京区.

上別府圭子. 被災地の小児がん患者と家族が経験する重層的なトランジションを支える看護のあり方. 平成26年度～平成28年度科学研究費補助金 (基盤研究 B) 研究成果報告書, 2017. (研究代表者: 上別府圭子)

佐藤伊織, 目麻里子, 副島堯史, キタ幸子, 上別府圭子. 電子版 QOL 質問票の開発—2種類の形式による回答システムの作成—. 平成30年度第1回 JCCG 血液腫瘍分科会 (JPLSG) 全体会議・合同班会議, 2018年6月15-16日, 愛知県名古屋市.

キタ幸子. 周産期のパートナーからの暴力と虐待的育児・育児困難感との関連及び心理要因の検証. 平成27年度～平成28年度科学研究費補助金 (研究活動スタート支援) 研究成果報告書, 2018. (研究代表者: キタ幸子)

井上雅美, 中嶋祥平, 石田也寸志. 小児同種骨髄移植後長期生存者の QOL に影響を及ぼす要因. 平成30年度第1回造血細胞移植合同班会議, 2018年7月14日, 愛知県名古屋市.

今井紗緒, 上別府圭子, キタ幸子, 西園マーハ文. 産後早期の在日外国人女性における地域での保健医療サービスの利用と、精神的健康度との関連. 公益財団法人ユニバーサル財団研究助成 平成27年度研究助成報告書, 2017. (研究代表者: 今井紗緒)

村田翔, 鈴木征吾, 副島堯史, 上別府圭子. 医療の広場 平成30年10月号政策医療振興財団の助成による研究報告「入院中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連についての研究」. 公益財団法人医療振興財団, 2018. (研究代表者: 村田翔)

Kamibeppu K, Kurihara K, Ikeda M, Sato I, Soejima T, Kikuchi R, Suzuki S, Nagoya Y, Yamane Y, Takahashi M, Hayasaka H, Tsuda R, Imaizumi M, Sato A, Shiwaku H, Suzuki Y, Inoue Y, Sasahara Y, Rikiishi T. The struggle of families who experienced childhood cancer and great east Japan earthquake disaster. 49th Congress of the International Society of Pediatric Oncology, 12-15 October 2017, Washington DC, USA.

Ishida Y, Kamibeppu K, Inoue M, Hayakawa A, Shiobara M, Sato A, Yamashita T, Atsuta Y. Quality of life in long-term childhood survivors after autologous or allogeneic stem cell transplantation in Japan. 第 59 回日本小児血液・がん学会学術集会, 2017 年 11 月 9-11 日, 愛媛県松山市.

Ishibashi A, Kamibeppu K. Developing resources on positive attitudes and a sense of purpose to gain resilience in adolescents with cancer. 49th Congress of the International Society of Paediatric Oncology, 12-15 October 2017, Washington DC, USA.

Sato I, Higuchi A, Yanagisawa T, Murayama S, Kumabe T, Sugiyama K, Mukasa A, Saio N, Sawamura Y, Terasaki M, Shibui S, Takahashi J, Nishikawa R, Ishida Y, Kamibeppu K. Employment Status and termination among survivors of pediatric brain Tumors: a cross-sectional survey. The 50th Congress of the International Society of Paediatric Oncology (SIOP), 16-19 November 2018, Kyoto, Japan.

Kita S, Umeshita U, Tobe H, Hayashi M, Sato I, Soejima T, Sakka M, Kamibeppu K. Associations between intimate partner violence before and during pregnancy, negative attitudes towards pregnancy and mother-to-fetus bonding failure. 21st East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) & 11th International Nursing Conferences (INC), 11-12 January 2018, Seoul, Korea.

Soejima T, Hoshi Y, Kibi S, Emoto S, Sato I, Kamibeppu K. Effects of a lecture on childhood cancer on students' knowledge about and interest in interacting with children with cancer. 第 59 回日本小児血液・がん学会学術集会, 2017 年 11 月 9-11 日, 愛媛県松山市.

Tobe H, Kita S, Kamibeppu K. Anger and Depression in the Perinatal Period in Japan: Longitudinal Study. 第 33 回日本助産学会学術集会, 2019 年 3 月 2-3 日, 福岡県福岡市.

Sakka M, Goto J, Kita S, Sato I, Soejima T, Kamibeppu K. Associations among behavioral and psychological symptoms of dementia, care burden, and family-to-work conflict of employed family caregivers. 21st East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) & 11th International Nursing Conferences (INC), 11-12 January 2018, Seoul, Korea.

Sakka M, Goto J, Ito S, Kita S, Sato I, Soejima T, Kamibeppu K. The relationship between the use of long-term care insurance services (LTCI) and family-to-work conflict (FWC) among employed family caregivers of persons with dementia (PWD). 7th Hong Kong International Nursing Forum, 18-19 December 2017, Pokfulam, Hong Kong.

Suzawa S, Yamaguchi G, Fujita A, Kim K, Baba A, Wang T, Haseda M, Mugiyama R, Ando E, Sakka M, Fukui Y, Kimata M, Sugawara I. Factors influencing a process for building intentions about a life of elderly people using home nursing care. APRU Aging in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists Action Research for Age-Friendly Community, 9-11 November 2017, Bunkyo-ku, Japan.

Nakajima S, Setoyama A, Sato I, Fukuchi T, Tanaka H, Inoue M, Watanabe K, Koh K, Takita J, Tokuyama M, Watanabe K, Kamibeppu K. Predictors of parental psychological distress during the acute phase of pediatric hematopoietic stem cell transplantation in Japan: A multicenter prospective longitudinal study. 44th Annual Meeting of the European Society for Blood and Marrow Transplantation, 18-21 March 2018, Lisbon, Portugal.

Inoue M, Nakajima S, Hayakawa A, Sato A, Shiohara M, Kamibeppu K, Atsuta Y, Yamashita T, Okamoto S, Ishida Y. Identifying important factors that influence the quality of life in survivors after allogeneic bone marrow transplantation in childhood. The 23rd Annual Congress of Asia-Pacific Blood and Marrow Transplantation Group (APBMT). 2-4 November 2018, Taipei, Taiwan.

Fukui C, Yokouchi N, Kim T, Nakano K, Kim K, Yamaguchi G, Fujita A, Suzawa S, Baba A, Sumikawa Y, Hyosook P, Kimata M, Murayama H, Sugawara I. Obstacles of aging in place in Japan: A preliminary Study. APRU Aging in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists Action Research for Age-Friendly Community, 9-11 November 2017, Bunkyo-ku, Japan.

Fukui C, Sakka M, Amiya RM, Sato I, Kamibeppu K. Family caregiver conflicts and support of people with dementia in long-term facilities. The 21st IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, 23-27 July 2017, San Francisco, USA.

Yuka S, Baba A, Fukui C, Kimata M, Murayama H, Sugawara I. Decision-making process regarding relocation to a group home for persons with dementia. GSA 2018 Annual Scientific Meeting, 14-18 November 2018, Boston, USA.

Kaneko K, Komazawa Y, Sakai E, Terazawa S, Yoshida S, Suto M, Matsuda Y, Doke M, Hamada T, Unyaporn S, Carandang RR, Miyabe T, Fujiwara A, Fukui C, Jin GU, Masuda M, Sandhu H, Ogawa

K, Kim H, Ogino R, Goto J. Development of methodology for creating social activities run by the elderly themselves. APRU Aging in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists Action Research for Age-Friendly Community, 9-11 November 2017, Bunkyo-ku, Japan.

Kim H, Ogawa K, Sandhu H, Masuda M, Hamada T, Jin GU, Yoshida S, Kaneko K, Komazawa Y, Suto M, Matsuda Y, Doke M, Unyaporn S, Carandang RR, Miyabe T, Fujiwara A, Fukui C, Sakai E, Terazawa S, Ogino R, Goto J. A process of neighborhood planning to create purpose in life for a longevity society: Formation of collective intention through workshops in Ohirayama, Kamakura city. APRU Aging in the Asia-Pacific Workshop 2017 for Junior Gerontologists Action Research for Age-Friendly Community, 9-11 November 2017, Bunkyo-ku, Japan.

Oshiro R, Soejima T, Tada K, Suzuki M, Ohno S, Nakamura S, Takei J, Kamibeppu K. Relationships between anxiety, social support, and medical care needs in parents of postoperative patients with breast cancer. The 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS). 17-18 January 2019, Singapore.

Kobayashi A, Sato I, Nakajima S, Hiwatari M, Seki M, Mitani Y, Hidaka M, Satake K, Shimosakon S, Yanagi M, Yuza Y, Koh K, Takita J, Kamibeppu K. Health-related quality of life in parents of hospitalized children with cancer focusing on changes in working conditions and parental beliefs: a cross-sectional study. The 50th Congress of the International Society of Paediatric Oncology (SIOP), 16-19 November 2018, Kyoto, Japan.

Murata S, Suzuki S, Soejima T, Hiwatari M, Seki M, Mitani Y, Hidaka M, Satake K, Shimosakon S, Noguchi J, Yuza Y, Takita J, Koh K, Kamibeppu K. Relationship between fatigue and family functioning in children with cancer undergoing treatment in the hospital: a cross-sectional study. The 50th Congress of the International Society of Paediatric Oncology (SIOP), 16-19 November 2018, Kyoto, Japan.

佐藤伊織, 目麻里子, 副島堯史, キタ幸子, 上別府圭子. 電子版 QOL 質問票の表示形式が測定に及ぼす影響：子どもとその養育者を対象とする無作為化比較試験. 第 6 回 QOL/PRO 研究会学術集会, 2018 年 12 月 1 日, 東京都中央区.

佐藤伊織, 目麻里子, 副島堯史, キタ幸子, 上別府圭子. QOL 調査に適した Web アンケートシステム: 「電子版 QOL 質問票の回答しやすさに関する無作為化比較 研究 (UMIN000031311)」から. 第 6 回看護理工学会学術集会, 2018 年 10 月 13-14 日, 東京都文京区.

佐藤伊織, 目麻里子, 副島堯史, キタ幸子, 上別府圭子. 複数の家族員を対象とする調査における Web 登録モニターの利用可能性:「電子版 QOL 質問票の開発」から. 第 25 回日本家族看護学会学術集会, 2018 年 9 月 1-2 日, 高知県高知市.

佐藤伊織, 目麻里子, 副島堯史, キタ幸子, 上別府圭子. 児童福祉から障害福祉への移行にあたり家族がサービスの調整に難航しつつも希望に近いプランを実現した一例. 第 24 回日本家族看護学会学術集会, 2017 年 9 月 2-3 日, 千葉県千葉市.

石田也寸志, 佐藤伊織, 井上雅美, 早川晶, 塩原正明, 佐藤篤, 上別府圭子, 熱田由子, 山下卓也, 谷口修一. 本邦の自家/同種造血幹細胞移植後長期生存小児患者における QOL に関する横断調査. 第 40 回日本造血細胞移植学会総会, 2018 年 2 月 1-3 日, 北海道札幌市.

早川晶, 佐藤伊織, 石田也寸志, 井上雅美, 佐藤篤, 塩原正明, 矢部普正, 小池和俊, 足立壮一, 熱田由子, 山下卓也, 神田善伸, 岡本真一郎. 小児期同種造血細胞移植後長期生存者の QOL の検討～慢性 GVHD の臓器別の影響および評価者による相違～. 第 41 回日本造血細胞移植学会, 2019 年 3 月 7-9 日, 大阪府大阪市.

石崎恵美, 鈴木寛代, 木村敬子, 佐藤伊織, 村山陵子. 小児科病棟における採尿バッグによる採尿の実態調査～失敗(漏れ)の要因と看護師による工夫～. 第 32 回日本小児ストーマ・排泄・創傷管理研究会, 2018 年 6 月 30 日, 東京都文京区.

温井めぐみ, 上久保毅, 河村淳史, 吉橋学, 上田敬太, 清谷千賀子, 佐藤伊織, 佐藤聡美, 西川亮, 原純一. 小児脳腫瘍治療後の神経心理学的合併症—全国脳腫瘍治療医へのアンケート調査—. 第 60 回日本小児神経学会学術集会, 2018 年 5 月 31 日-6 月 2 日, 千葉県千葉市.

高石宏和, 佐藤伊織, 滝田順子, 上別府圭子. 20 代小児がん経験者の経済負担に関する質的研究. 第 15 回日本小児がん看護学会学術集会, 2017 年 11 月 10-11 日, 愛媛県松山市.

キタ幸子, 戸部浩美, 上別府圭子. 妊娠中のパートナーからの暴力 (IPV) と産後の児童虐待との関連に影響を与える心理的要因の検証. 第 33 回日本助産学会学術集会, 2019 年 3 月 2-3 日, 福岡県福岡市.

副島堯史, 塩原正明, 石田也寸志, 井上雅美, 早川晶, 佐藤篤, 上別府圭子, 熱田由子, 山下卓也. 小児期に造血幹細胞移植を受けた長期生存者の生活状況および就学・就労状況. 第 40 回日本造血細胞移植学会総会, 2018 年 2 月 1-3 日, 北海道札幌市.

戸部浩美, 目麻里子, 上別府圭子. 感情調整に焦点を当てた育児中の親のレジリエンスを高めるプログラムの形成評価. 第 25 回日本家族看護学会学術集会, 2018 年 9 月 1-2 日, 高知県高知市.

戸部浩美, 上別府圭子, 江守陽子. アンガーマネジメントプログラムを受講した母親の経験—質的研究—. 日本家族研究・家族療法学会第 34 回つくば大会, 2017 年 8 月 18-20 日, 茨城県つくば市.

目麻里子, 上別府圭子. 介護役割を担う労働者の離職意思に関連する要因の検討. 第 25 回日本家族看護学会学術集会, 2018 年 9 月 1-2 日, 高知県高知市.

目麻里子, 佐藤伊織, 副島堯史, キタ幸子, 上別府圭子. 認知症の人を介護する就労中の家族介護者の心理的要因が介護保険サービスの利用内容の選択に与える影響. 日本家族看護学会第 24 回学術集会, 2017 年 9 月 2-3 日, 千葉県千葉市.

大渡優子, 江本駿, 村田翔, 竹内文香, 佐竹和代, 副島堯史, 佐藤伊織, 岩崎美和, 上別府圭子. 小児がん患者とその家族に対する復学準備項目リストの開発・検討. 第 15 回日本小児がん看護学会学術集会, 2017 年 11 月 10-11 日, 愛媛県松山市.

中嶋祥平, 井上雅美, 康勝好, 滝田順子, 徳山美香, 佐藤伊織, 上別府圭子. 小児造血幹細胞移植前における親の不安・抑うつとその関連要因: 多施設共同横断研究. 第 40 回日本造血細胞移植学会総会, 2018 年 2 月 1-3 日, 北海道札幌市.

中嶋祥平, 大城怜, 岩崎美和, 佐竹和代, 猪瀬亜沙子, 佐藤伊織, 樋渡光輝, 滝田順子, 上別府圭子. 小児造血幹細胞移植フォローアップ外来受診患者の Quality of Life: 前年度との比較 (第 2 報). 第 40 回日本造血細胞移植学会総会, 2018 年 2 月 1-3 日, 北海道札幌市.

中嶋祥平, 佐藤伊織, 上別府圭子. 造血幹細胞移植前の患児の健康関連 Quality of Life: 患児評価・父親評価・母親評価の三者間の検討. 第 24 回日本家族看護学会学術集会, 2017 年 9 月 2-3 日, 千葉県千葉市.

鈴木征吾, 中村真由美, 小林明日香, 岩崎美和, 関口ひろみ, 柘植美恵, 佐藤敦志, 平田陽一郎, キタ幸子, 佐藤伊織, 岡明, 上別府圭子. 成人移行期支援外来を初回受診した小児慢性疾患患者の傾向—疾患の理解と自己管理状況の年齢別比較—. 第 65 回日本小児保健協会学術集会, 2018 年 6 月 14-16 日, 鳥取県米子市.

中村真由美, 鈴木征吾, 小林明日香, 岩崎美和, 関口ひろみ, 柘植美恵, 佐藤敦志, 平田陽一

郎, キタ幸子, 佐藤伊織, 岡明, 上別府圭子. 小児慢性疾患患者の移行準備性を測定する「日本語版 Transition-Q」尺度の開発. 第 65 回日本小児保健協会学術集会, 2018 年 6 月 14-16 日, 鳥取県米子市.

中村真由美, 鈴木征吾, 小林明日香, 岩崎美和, 柘植美恵, 関口ひろみ, 平田陽一郎, 佐藤敦志, キタ幸子, 佐藤伊織, 上別府圭子, 岡明. 成人移行期支援に関する意識調査 小児系医師・小児系看護師・患者と家族の比較. 第 121 回日本小児科学会学術集会, 2018 年 4 月 20-22 日, 福岡県福岡市.

平田陽一郎, 佐藤敦志, 岩崎美和, 中村真由美, 鈴木征吾, 小林明日香, キタ幸子, 佐藤伊織, 渡邊美穂, 上別府圭子, 岡明. 当院における成人移行期支援外来の現状と課題. 第 64 回日本小児保健協会学術集会, 2017 年 6 月 29 日-7 月 1 日, 大阪府大阪市.

平田陽一郎, 佐藤敦志, 杉山正彦, 岩崎美和, 関口ひろみ, 大友英子, 中村真由美, 鈴木征吾, 上別府圭子, 岡明. 東大病院における移行期支援外来の現状と問題点. 第 120 回日本小児科学会学術集会, 2017 年 4 月 14-16 日, 東京都港区.

福井千絵, 目麻里子, 佐藤伊織, 上別府圭子. 認知症をもつ人の家族介護者と介護に関する意見の相違があった家族員の続柄と家族機能との関連. 第 24 回日本家族看護学会学術集会, 2017 年 9 月 2-3 日, 千葉県千葉市.

大城怜, 副島堯史, 多田敬一郎, 鈴木美穂, 大野真司, 湯舟邦子, 中村清吾, 福地本晴美, 竹井淳子, 山内英子, 上別府圭子. 乳がん患者の親が抱える精神的苦痛の現状. 第 3 回日本がんサポーターブケア学会学術集会, 2018 年 8 月 31 日-9 月 1 日, 福岡県福岡市.

佐藤篤, 石田也寸志, 大城怜, 中嶋祥平, 井上雅美, 早川晶, 塩原正明, 大島久美, 黒澤彩子, 熱田由子, 山下卓也, 神田善伸, 岡本真一郎. 小児期同種造血幹細胞移植後長期生存例における思春期以降 QOL の検討 ～成人 QOL 研究との比較～. 第 41 回日本造血細胞移植学会, 2019 年 3 月 7-9 日, 大阪府大阪市.

吉備智史, 副島堯史, 江本駿, 上別府圭子. 身体障がいをもつ子どもに対する児童の態度と交流・情報入手の関連. 第 25 回日本家族看護学会学術集会, 2018 年 9 月 1-2 日, 高知県高知市.

小林明日香, 中村真由美, 鈴木征吾, 岩崎美和, 関口ひろみ, 平田陽一郎, 佐藤敦志, キタ幸子, 佐藤伊織, 上別府圭子. 小児慢性疾患患者の成人移行に関する親の認識—患者への移行支援に伴う変容—. 第 25 回日本家族看護学会学術集会, 2018 年 9 月 1-2 日, 高知県高知市.

小林明日香, 鈴木征吾, 中村真由美, キタ幸子, 佐藤伊織, 上別府圭子, 東大病院成人移行期支援外来タスフォース. 円滑な移行期支援体制構築へ向けた検討—東大病院成人診療科・移行期支援窓口担当医師を対象とした意識調査—. 第 25 回東京小児医学研究会, 2018 年 3 月 18 日, 東京都文京区.

小林明日香, 佐藤伊織, 上別府圭子. 子どものがんの罹患に伴う親の就労状況への影響に関する文献検討. 第 24 回日本家族看護学会学術集会, 2017 年 9 月 2-3 日, 千葉県千葉市.

田崎牧子, 土屋雅子, 小林明日香, 青木正平, 水流添秀行, 藤田理沙子, 荒木夕宇子, 岸田徹, 齋藤正博, 富岡晶子, 丸光恵, 米本司, 高橋都. AYA 世代がん経験者支援 web サイト分析—日本における支援 web サイト開発に向けて—. 第 59 回日本小児血液・がん学会学術集会, 2017 年 11 月 9-11 日, 愛媛県松山市.

林真由, 上別府圭子, キタ幸子, 中村真由美. 非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究. 第 25 回日本家族看護学会学術集会, 2018 年 9 月 1-2 日, 高知県高知市.

講演・シンポジウムなど

Kamibeppu K. Opening session: Welcome speech & introduction of pediatric oncology nursing in Japan. The 50th Congress of the International Society of Paediatric Oncology (SIOP), 16-19 Nov 2018, Kyoto, Japan.

Kamibeppu K. Welcome session: Introduction of the nurses' roles in lifetime care for childhood cancer survivors in Japan. Seoul National University Children's Hospital からの小児がん長期フォローアップ (心理・社会・家族) に関する視察訪問. 2018 年 11 月 28 日, 東京都文京区.

Kamibeppu K. Closing speech. Seoul National University Children's Hospital からの小児がん長期フォローアップ (心理・社会・家族) に関する視察訪問. 2018 年 11 月 28 日, 東京都文京区.

Kamibeppu K. Special Lecture: Understanding the concept of resilience from clinical psychology perspective. International Summer Program for Skin Integrity in Japan 2018, 27-31 Aug 2018, Bunkyo-ku, Japan

Kamibeppu K. (Chair). Concurrent Session IX: Health Care Systems and Policy. 7th Hong Kong International Nursing Forum, 18-19 Dec 2017, Pok Fu Lam, Hong Kong.

Pernilla P, Kamibeppu K. Free papers session 7: Improvement in care delivery II. The 50th Congress of the International Society of Paediatric Oncology (SIOP), 16-19 Nov 2018, Kyoto, Japan.

Khalid N, Kamibeppu K. (Chair). Session 10: Competencies/POTT. AAFT. 4th Annual Conference Family Therapy: East and West, 1-4 Nov 2017, Tsukuba, Japan.

Pergert P, Kamibeppu K. (Chair). Nurses: Free papers session 7: Communication in paediatric oncology: Presentation Re:SIOP 2018 in Kyoto. 49th Congress of the International Society of Paediatric Oncology, 12-15 Oct 2017, Washington DC, USA.

Chan KL. Reporting and Measurement of Family Violence. 東京医学会第 2742 回集会, 2018 年 4 月 3 日, 東京都文京区.

Chan KL. Preventing family violence: Child and family poly-victimization. 第 2 回家族看護学研究セミナー. 2019 年 2 月 12 日, 東京都文京区.

Sato I. Development of the Japanese version of Pediatric Quality of Life Inventory (PedsQL) Brain Tumor Module. Seoul National University Children's Hospital からの小児がん長期フォローアップ (心理・社会・家族) に関する視察訪問. 2018 年 11 月 28 日, 東京都文京区.

Sato I. Employment status and termination among survivors of pediatric brain tumors: a cross-sectional survey. Seoul National University Children's Hospital からの小児がん長期フォローアップ (心理・社会・家族) に関する視察訪問. 2018 年 11 月 28 日, 東京都文京区.

Sato I, Punjwani R. (Chair). Poster discussion session 2. The 50th Congress of the International Society of Paediatric Oncology (SIOP 2018). 16-19 November 2018, Kyoto, Japan.

Kita S. Panel Discussion: Japanese strategies to prevent violence against women- focusing on intimate partner violence -. Academy on Violence and Abuse 2017 Global Health Summit, 7-8 Dec 2017, Hong Kong

Nakajima S. Long-term follow-up for patients who underwent hematopoietic stem cell transplantation in childhood. Seoul National University Children's Hospital からの小児がん長期フォローアップ (心理・社会・家族) に関する視察訪問. 2018 年 11 月 28 日, 東京都文京区.

Nakamura M. Transition among adolescent patients with childhood-onset chronic disease (CCD) and development of a Japanese version of the TRANSITION-Q. Seoul National University Children's

Hospital からの小児がん長期フォローアップ（心理・社会・家族）に関する視察訪問. 2018年11月28日, 東京都文京区.

Kobayashi A. Health-related quality of life in parents of hospitalized children with cancer focusing on changes in working conditions and parental beliefs: a cross-sectional study. Seoul National University Children's Hospital からの小児がん長期フォローアップ（心理・社会・家族）に関する視察訪問. 2018年11月28日, 東京都文京区.

上別府圭子（委員長）, 池田真理, 上野里絵, 小川純子, キタ幸子, グレッグ美鈴, 谷口初美, 深堀浩樹. 「Example of a National Research Model」 「スマートな国際学会発表を目指して2」. JANPU 国際交流推進委員会企画講演会, 2019年3月24日, 東京都新宿区.

上別府圭子（座長）, 池田真理, グレッグ美鈴. スマートな国際学会発表を目指して2. JANPU 国際交流推進委員会企画講演会, 2019年3月24日, 東京都新宿区.

上別府圭子, 池田真理（座長）. Example of a National Research Model（演者: Dr. Patricia Grady）. JANPU 国際交流推進委員会企画講演会, 2019年3月24日, 東京都新宿区.

上別府圭子（委員長）, 池田真理, 上野里絵, 小川純子, キタ幸子, グレッグ美鈴, 谷口初美, 深堀浩樹. スマートな国際学会発表を目指して2. JANPU 国際交流推進委員会企画講演会, 2019年3月24日, 東京都新宿区.

上別府圭子, 星順隆（演者）, 副島堯史, 吉備智史. 小児がんの啓発に関する高校生向け授業「がんについて知って欲しいこと」. 2019年2月27日, 千葉県茂原市.

上別府圭子, 小林明日香（ファシリテーター）. 「グループワーク1（長期フォローアップに向けて）」 「グループワーク2（長期フォローアップの準備・方法）」 「グループワーク3（長期フォローアップの実際）」 . 厚生労働省委託事業 第6回小児・AYA世代のがんの長期フォローアップに関する研修会, 2019年2月23-24日, 大阪府大阪市.

上別府圭子. 「事例から学ぶエジンバラ産後うつ病質問票の効果的な活用方法について」 . 平成30年度 清瀬市要支援家庭の早期発見・支援事業, 2019年2月18日, 東京都清瀬市.

上別府圭子. 「バイオサイコソーシャルモデル～新しい医療システム構築のための多職種啓発事業への活用～」 . 2018年度家族療法基礎講座, 2019年2月17日, 兵庫県神戸市.

上別府圭子（座長）．シンポジウム「多様な家族看護学研究の設計と実際」．第3回家族看護学研究セミナー, 2019年2月9日, 東京都中央区.

上別府圭子, 佐藤伊織, 副島堯史, 中嶋祥平, 小林明日香, 村田翔. 「QOL 研究センターからの報告」．平成30年第11回JCCG長期フォローアップ委員会, 2018年12月14日, 愛知県名古屋市.

上別府圭子, 小林明日香（ファシリテーター）．「グループワーク1（長期フォローアップに向けて）」「グループワーク2（長期フォローアップの準備・方法）」「グループワーク3（長期フォローアップの実際）」．厚生労働省委託事業 第5回小児・AYA世代のがんの長期フォローアップに関する研修会, 2018年12月1-2日, 東京都港区.

上別府圭子, 村田翔, 副島堯史, 鈴木征吾. 「入院中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連についての研究」．第23回公益財団法人がんの子どもを守る会公開シンポジウム, 2018年11月14-16日, 京都府京都市.

上別府圭子. ストレス・マネジメント概論「親密な人間関係の発達・発展～アタッチメントの発達および青年期のアタッチメントを中心に～」．東京大学教育学部, 2018年10月30日, 東京都文京区.

上別府圭子（座長）．「成人移行期支援の実際」．第9回成人移行期支援フォローアップ講座, 2018年10月14日, 東京都文京区.

上別府圭子（座長）．教育講演9「リスクを抱えた赤ちゃんと家族の出会いを支える一周産期精神保健の歩みとこれから」．第59回日本児童青年精神医学会総会, 2018年10月11-13日, 東京都文京区.

上別府圭子, 副島堯史, 小林明日香（ファシリテーター）．厚生労働省委託事業 第4回小児・AYA世代のがんの長期フォローアップに関する研修会, 2018年9月29日, 福岡県福岡市.

上別府圭子（講師）．「包括ケアシステムにおける虐待予防のための妊娠期からの多職種連携」．平成30年度青森県地域母子保健に関する意見交換会, 2018年9月20日, 青森県青森市.

上別府圭子（座長）, 渡辺俊之（講師）．特別講演I「学際的発展を導く家族療法と家族看護のコラボレーション」．第25回日本家族看護学会学術集, 2018年9月1-2日, 高知県高知市.

上別府圭子 (司会), 荒木暁子, 山崎あけみ, 池田真理, 上野里絵, 小林京子, 津村明美, キタ幸子. 研究促進委員会セミナー「家族看護研究における有用な質問紙の作り方」. 第 25 回日本家族看護学会学術集, 2018 年 9 月 1-2 日, 高知県高知市.

上別府圭子 (座長). 口演 4「小児がん看護 1」. 日本小児看護学会第 28 回学術集会, 2018 年 7 月 21-22 日, 愛知県名古屋市.

上別府圭子 (講師), 副島堯史, 小林明日香(ファシリテーター). 講義: 晩期合併症各論 3 (認知機能/心理/社会/家族の心理), グループワーク 1 (長期フォローアップに向けて), グループワーク 2 (長期フォローアップの準備・方法), グループワーク 3 (長期フォローアップの実際). 厚生労働省委託事業 第 3 回 小児・AYA 世代のがんの長期フォローアップに関する研修会, 2018 年 7 月 7-8 日, 愛知県日進市.

上別府圭子, 渡辺俊之 (講師). バイオサイコソーシャル. 家族研究・家族療法学会基礎講座, 2018 年 3 月 4 日, 東京都千代田区.

上別府圭子, 副島堯史, 小林明日香 (ファシリテーター). グループワーク 1: 長期フォローアップに向けて, グループワーク 2: 長期フォローアップの準備・方法, グループワーク 3: 長期フォローアップの実際. 第 2 回小児・AYA 世代のがんの長期フォローアップに関する研修会, 2018 年 2 月 24-25 日, 大阪府大阪市.

上別府圭子 (講師). 実践家族看護学. 神戸大学大学院家族支援看護 CNS コース講義, 2018 年 2 月 19 日, 兵庫県神戸市.

上別府圭子 (司会), Chan KL. 特別講演: 家族間の暴力の予防: 子どもと家族の多重被害. 第 2 回家族看護学研究セミナー, 2018 年 2 月 12 日, 東京都文京区.

上別府圭子, キタ幸子 (座長), 渡辺雅子, 西山さつき, 岸恵美子. シンポジウム: 児童虐待、パートナーからの暴力、高齢者虐待の現状と課題～必要な家族支援とは～. 第 2 回家族看護学研究セミナー, 2018 年 2 月 12 日, 東京都文京区.

上別府圭子. 看護教育講演 2 「入院時から復学支援をおこなうための患児家族・教員・医療者の関係づくり」. 第 40 回日本造血細胞移植学会総会, 2018 年 2 月 1-3 日, 北海道札幌市.

上別府圭子. 虐待予防のための支援・リスクの高い母親への関わり方のポイント. 平成 29 年度清瀬市母子保健事業関係者連絡会, 2018 年 1 月 17 日, 東京都清瀬市.

上別府圭子, 目麻里子. 家族を見つめ直すー家族ライフサイクル上、家族機能を支える資源ー. 東京大学教養学部 TODAI Liberal Arts Program, 2017年12月13日, 東京都目黒区.

上別府圭子 (講師), 佐藤伊織 (司会). 日本の小児がん臨床研究における QOL 研究のあゆみ. 臨床試験プロトコル治療における看護師の役割, 2017年12月2日, 東京都中央区.

上別府圭子 (座長). 看護教育講演「小児がん経験者の長期フォローアップにおいて看護師に期待する役割 (演者: 石田也寸志 愛媛県立中央病院小児医療センター)」. 第15回日本小児がん看護学会学術集会, 2017年11月10-11日, 愛媛県松山市.

上別府圭子 (企画). 日本小児血液・がん学会看護委員会 (委員長 上別府圭子). (座長) 福島啓太郎, 内田雅代. パネルディスカッション2「小児緩和ケアにおける医師と看護師の協働」. 第59回日本小児血液・がん学会学術集会, 2017年11月9-11日, 愛媛県松山市.

上別府圭子. ストレス・マネジメント概論「親密な人間関係の発達・発展～アタッチメントの発達及び青年期のアタッチメントを中心に～」. 東京大学教育学部, 2017年10月31日, 東京都文京区.

上別府圭子. 家族看護の理解を育む教え方ー学生の視点を広げる家族看護の講義法ー. 医学書院, 看護教員「実力養成」講座 2017, 2017年10月28日, 大阪府大阪市.

上別府圭子. 家族看護の理解を育む教え方ー学生の視点を広げる家族看護の講義法ー. 医学書院, 看護教員「実力養成」講座 2017, 2017年10月21日, 東京都千代田区.

上別府圭子 (講師). 晩期合併症各論 3: 認知機能/心理/家族の心理. 日本小児血液・がん学会 小児・AYA 世代のがんの長期フォローアップに関する研修会, 2017年9月23-24日, 東京都港区.

上別府圭子 (司会), 池田真理, 齋藤清二, 宇田川元一, 山本則子. シンポジウム「事例検討とナラティブ」. 日本家族看護学会第24回学術集会, 2017年9月2-3日, 千葉県千葉市.

上別府圭子, 渡辺俊之. ワークショップ「医療現場における家族の理解と支援」. 日本家族研究・家族療法学会第34回つくば大会, 2017年8月18-20日, 茨城県つくば市.

泊祐子, 上別府圭子, 上野里絵, 河原宣子, 茂本咲子, 中山美由紀, 野島敬祐, 深堀浩樹, 真継和子, 山口桂子, 伊藤隆子. 編集委員会企画セミナー「査読を活用してよい論文に仕上げ

ようⅡ」. 第25回日本家族看護学会学術集会, 2018年9月1-2日, 高知県高知市.

渡辺俊之, 上別府圭子, 児島達美. ワークショップ4「バイオサイコソーシャルアプローチ
ライフサイクルとチーム医療」. 日本家族療法学会第35回ぐんま大会, 2018年8月10-12日,
群馬県高崎市.

井上玲子, 上別府圭子, 小林京子, 前田留美, 柴田映子, 川勝和子. 交流集会21「小児がん看護
の専門性向上をめざした看護教育プログラム」. 第32回日本がん看護学会学術集会, 2018
年2月3-4日, 千葉県千葉市.

山本則子, 山花令子, 野口麻衣子, 池田真理, 辻村真由子, 柄澤清美, 吉田滋子, 上別府圭子.
交流会「家族看護実践の事例研究を考える(2):『日本の現場発看護学』の開発を目指す事例
研究ワークショップ」. 第24回日本家族看護学会学術集会, 2017年9月2-3日, 千葉県千葉
市.

泊祐子, 伊藤隆子, 上別府圭子, 上野里絵, 河原宣子, 茂本咲子, 中山美由紀, 野島敬祐, 深
堀浩樹, 真継和子, 山口桂子, 荒木暁子, 池田真理, キタ幸子, 小林京子, 津村明美, 山崎あ
けみ. 編集委員会・研究促進委員会共催セミナー「査読をうまく活用して、よい論文に仕上
げよう」. 日本家族看護学会第24回学術集会, 2017年9月2-3日, 千葉県千葉市.

佐藤伊織. きょうだいへの支援と研究～家族看護学の立場から～. ドナルド・マクドナル
ド・ハウス ボランティア交流会, 2018年12月8日, 東京都文京区.

河俣あゆみ, 佐藤伊織 (座長), 小原美江, 上別府圭子, 副島堯史 (委員). 学術検討委員会
セミナー「日常的なケアに活かす看護研究のエビデンス～中心静脈カテーテル管理につい
て～」. 第16回日本小児がん看護学会学術集会, 2018年11月14-16日, 京都府京都市.

佐藤伊織. きょうだいへの支援と研究と～家族看護学の立場から～. 駒場祭 2017 マイハウ
ス企画, 2017年11月25日, 東京都目黒区.

佐藤伊織, 川口めぐみ (座長). 長期フォローアップ1. 第15回日本小児がん看護学会学術
集会, 2017年11月10-11日, 愛媛県松山市.

佐藤伊織. 看護における倫理～実践・研究でのアプローチ～「実践現場における研究の倫理
～こどもと家族の観点から～」. 第7回東大看護研究シンポジウム, 2017年10月29日, 東
京都文京区.

小川純子, 佐藤伊織 (座長). 看護学術検討・国際交流セミナー「みんなで SIOP2018 に参加しよう! (演者: 佐藤伊織, 河上智香, 平田美佳, 小川純子)」。第 15 回日本小児がん看護学会学術集会, 2017 年 11 月 10-11 日, 愛媛県松山市。

キタ幸子. 妊娠中の母子への DV—発見と対応の基礎知識—。東京ウィメンズブラザ平成 30 年度職務関係者研修 (第 6 回), 2019 年 3 月 6 日, 東京都渋谷区。

キタ幸子 (演者). 講演家族内の暴力の多重性・連鎖性を研究する～1 人の家族員から 2 つの事象を評価する～。第 3 回家族看護学研究セミナー, 2019 年 2 月 9 日, 東京都中央区。

キタ幸子. (演者). 研究に有用な尺度の開発と評価。第 25 回日本家族看護学会学術集会, 2018 年 9 月 1-2 日, 高知県高知市。

キタ幸子. 産後の精神状態と EPDS (エジンバラ産後うつ病質問票) について。平成 29 年度三郷市母子保健研修会, 2018 年 1 月 29 日, 埼玉県三郷市。

キタ幸子. ドメスティック・バイオレンス (DV) 家庭にいた子どもの情緒・行動的発達と DV 加害者である父親との面会が及ぼす影響。東京都弁護士会第 10 回後期弁護士会研修講座, 2017 年 11 月 28 日, 東京都千代田区。

キタ幸子. DV・その後の生きにくさくシングルマザーと貧困>「ドメスティック・バイオレンス (DV) 家庭にいた子どもの情緒・行動的発達と DV 加害者である父親との面会が及ぼす影響」。第 20 回シェルターシンポジウム 2017, 2017 年 9 月 30-10 月 1 日, 東京都文京区。

キタ幸子. 暴力被害を受けた女性と子どもの理解と支援。日本赤十字九州国際看護大学主催国際フォーラム: フォレンジック看護とは, 2017 年 8 月 31 日, 福岡県宗像市。

キタ幸子. DV 被害を受けた母子の理解と支援～私たちに何ができるのか～。東京弁護士会: 性の平等に関する委員会勉強会, 2017 年 8 月 1 日, 東京都千代田区。

キタ幸子, Saint Arnault DM, 上別府圭子. DV 被害を受けた母子の理解と支援～私たちに何ができるのか～。文化と女性の健康プロジェクトセミナー: 米国に暮らす日本人女性の健康と支援, 2017 年 7 月 28 日, San Diego, USA。

副島堯史. 小児がんの病理と他職種連携。東京都立北特別支援学校病弱教育担当教員対象授業力向上研修, 2017 年 12 月 27 日, 東京都文京区。

副島堯史 (講師), 佐藤伊織 (司会) . ALL-B12 の実際の方法・手順について. 臨床試験プロトコル治療における看護師の役割, 2017年12月2日, 東京都中央区.

副島堯史, 小林明日香 (ファシリテーター) . グループワーク 1 (晩期合併症) , グループワーク 2 (治療サマリー、フォローアップ手帳の活用)、グループワーク 3 (事例のトランジションステップ) . 日本小児血液・がん学会 小児・AYA 世代のがんの長期フォローアップに関する研修会, 2017年9月23-24日, 東京都港区.

戸部浩美. イライラ・怒りを笑顔に変えるー感情の整え方・癒し方. 茨城県つくば市竹園乳幼児学級, 2018年9月21日, 28日, 茨城県つくば市.

戸部浩美. イライラ・怒りを笑顔に変えるー感情の整え方・癒し方. 学校法人ワタナベ学園 柏ひがし幼稚園講演会, 2018年9月14日, 千葉県柏市.

戸部浩美. イライラ・怒りを笑顔に変えるー感情の整え方・癒し方. 茨城県石岡市平成 30年度第1回さわやかハーモニーセミナー, 2018年8月25日, 茨城県石岡市.

戸部浩美. 怒りのマネジメントセミナー. 茨城県つくば市高崎幼稚園家庭教育学級, 2018年6月21日, 茨城県つくば市.

戸部浩美. イライラ・怒りと上手に付き合い、人生を主体的に生きるために. 「大好きいばらき地方応援事業」選定 茨城中学校第1・第2学年合同生徒・保護者研修会, 2018年2月17日, 茨城県水戸市.

戸部浩美. イライラ・怒りを笑顔に変えるー感情の整え方・癒し方. 茨城県知事公室女性少年課女性プラザ男女共同参画支援室主催平成 29年度第1回男女共同参画チャレンジ支援セミナー, 2017年7月7日, 茨城県水戸市.

目麻里子. 博士研究員と他大学の若手研究者の活動「院生から博士研究員へのトランジション」. 東京大学大学院医学系研究科附属グローバルナーシングリサーチセンター設立記念講演会, 2017年10月11日, 東京都千代田区.

鈴木征吾 (ファシリテーター) . 社会適応にむけた自立支援～長期的成人移行期支援を継続している事例から～. 第9回成人移行期支援フォローアップ講座, 2018年10月14日, 東京都文京区.

高田栄子, 鈴木征吾 (座長). シンポジウム「医療的ケア児の保育・療育・教育」. 第7回日本小児在宅医療支援研究会, 2017年10月28日, 埼玉県大宮市.

中村真由美 (事例発表), 小林明日香 (ファシリテーター). グループディスカッション「思春期患者への妊娠・出産・遺伝に関わる情報提供とフォローアップ」. 第9回成人移行期支援フォローアップ講座, 2018年10月14日, 東京都文京区.

平田陽一郎, 中村真由美, 佐藤敦志, 岩崎美和, 小林明日香, 鈴木征吾, キタ幸子, 佐藤伊織, 上別府圭子, 岡明. 「東大病院における移行支援の取り組み」. 第9回成人移行期支援フォローアップ講座, 2018年10月14日, 東京都文京区.

佐藤敦志, 岩崎美和, 関口ひろみ, 柘植美恵, 中村真由美, 小林明日香, 鈴木征吾, キタ幸子, 佐藤伊織, 上別府圭子, 平田陽一郎. 「小児病棟看護師への成人移行期支援の意識調査」. 第9回成人移行期支援フォローアップ講座, 2018年10月14日, 東京都文京区.

平田陽一郎, 佐藤敦志, 岩崎美和, 布間瞳美, 中村真由美, 鈴木征吾, 小林明日香, 「東大病院移行期支援外来の実際」(ロールプレイ). 第9回成人移行期支援フォローアップ講座, 2018年10月14日, 東京都文京区.

藤澤雄太 (講師), 青木望, 江田一重, 大河内由香里, 木村由佳莉, 田中靖弘, 成井花奈恵, 松倉なつみ, 村田翔 (ファシリテーター). 新人看護師の能力・やる気を引き出す効果的な支援法～若手指導者のための動機づけ面接の活用～. 国立看護大学校研修部 短期研修, 2018年3月5-6日, 東京都清瀬市.

一般雑誌・新聞その他

上別府圭子. 日本小児がん看護学会 理事長挨拶. 日本小児がん看護学会ホームページ 理事長挨拶. 2018年9月; <http://jspon.sakura.ne.jp/about/greetings/>

上別府圭子 (あとがき). きょうだいをめぐる心理社会的課題. 保健の科学, 2019 Feb; 61(2): 144.

上別府圭子 (あとがき). 子どもを育む遊びとおもちゃ. 保健の科学, 2018 May; 60(5): 360.

上別府圭子 (あとがき). 看護・介護領域におけるロボットとの協働. 保健の科学, 2017; 59(8): 576.

上別府圭子. 解剖 先端拠点. 東大グローバルナースングリサーチセンター AI やバイオ 看護に新風. 日経産業新聞, 2017年8月8日.

キタ幸子. 【DV 家庭 子供たちの心に深い傷】社会で適切な支援を. 毎日新聞, 2017年7月7日.

キタ幸子. 子の利益「慎重に判断を」. 東京新聞, 2017年5月29日.

キタ幸子. 【ニュースの深層】離婚後の父親が“復習鬼”? 子供との「面会交流」で殺害の悲劇が止まらない. 産経ニュース, 2017年5月23日.

キタ幸子. 「面会交流はらむ危険」. 産経新聞, 2017年5月5日.

戸部浩美. 【子育て中の親支援】講演会「イライラママからしなやかママへ」. 静岡新聞, 2018年3月6日.

受賞

Kamibeppu K. Excellence in Family Nursing Award. 2019 IFNA Awards. International Family Nursing Association. 15 March 2019.

Nakajima S. EBMT Nurses Group Award for Best Oral Presentation. 44th Annual Meeting of the European Society for Blood and Marrow Transplantation. The European Society for Blood and Marrow Transplantation. 21 March 2018.

中嶋祥平. 第39回日本造血細胞移植学会総会奨励賞. 日本造血細胞移植学会, 2018年2月2日.

鈴木征吾. 2015年一般公募「在宅医療研究への助成」勇美賞. 公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団, 2017年7月6日.

大野真美, 上別府圭子. 第4回日本家族看護学会研究奨励賞. 日本家族看護学会, 2018年9月1-2日.

1-2. 研究活動費

2018年度 公益財団法人がんの子どもを守る会治療研究助成「乳児急性リンパ性白血病臨床試験（JPLSG- MLL- 17）における乳児と家族のQOL」100千円

上別府圭子, 佐藤伊織, 副島堯史, 前田美穂, 石田也寸志, 早川晶, 宮村能子

2018年度 リレーフォーライフジャパン（RFLJ）プロジェクト未来「成人がん患者におけるSNS上の患者会参加状況が孤独に与える影響」400千円

上別府圭子, 大城怜, 小林明日香, 日麻里子, 西口洋平

老施協総研平成30年度調査研究助成事業「特別養護老人ホーム入居者への人生の最終段階における支援が遺された家族の複雑性悲嘆に与える影響」1,000千円

上別府圭子, 福井千絵

平成30年度ゴールドリボン研究助成金「小児がん患児の親における就労状況の変化が親のQOLに与える影響のメカニズム解明のための基盤研究：就労状況の変化に関するピリーフ評価尺度の開発」500千円

上別府圭子, 佐藤伊織, 副島堯史, 小林明日香

平成29年度ゴールドリボン研究助成金「入院中の小児がんの子どもを持つ父親と母親の就労状況の変化が、親の健康関連QOLに与える影響—子どもの看病に対する親の価値観に焦点を当てた横断観察研究—」500千円

上別府圭子, 佐藤伊織, 中嶋祥平, 小林明日香

2017年度 公益財団法人がんの子どもを守る会治療研究助成「入院中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連についての研究」600千円

上別府圭子, 滝田順子, 樋渡光輝, 関正史, 三谷友一, 日高もえ, 下左近寿美, 佐竹和代, 副島堯史, 鈴木征吾, 村田翔

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「在宅で障害児をケアする養育者に向けた家族エンパワメントプログラムの開発と効果検証」400千円.

涌水理恵, 松澤明美, 佐藤伊織, 藤岡寛, 西垣佳織.

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（若手A）「複数の家族員から得られた家族データと個別事例が示す「家族全体としての機能の向上」」12,350千円

佐藤伊織

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（挑戦的萌芽）「小児がん・脳腫瘍患児ときょうだいの関係に着目した家族支援プログラムの開発」3,380 千円

佐藤伊織

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（若手 B）「IPV 被害妊婦の健全な育児とメンタルヘルス改善に向けたプログラム開発と効果の検証」4,030 千円

キタ幸子

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（若手 B）「小児がん経験者の疾患認知に着目した就労支援プログラムの開発」3,770 千円

副島堯史

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（スタートアップ）「マインドフルペアレンティングプログラムの開発と効果検証：ランダム化比較試験」2,990 千円

戸部浩美

平成 29 年度生涯学習開発財団博士号取得支援事業「育児中の親のレジリエンスを高めるプログラムの効果－怒りの情動に焦点を当てて－：ランダム化比較試験」500 千円

戸部浩美

平成 30 年度公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金「造血幹細胞移植後フォローアップ外来を受診する患者と介護者の Quality of Life と情報ニーズ：多施設共同横断研究」1,000 千円

中嶋祥平

平成 30 年三菱財団助成 社会福祉分野「学校内での医療的ケアが児童生徒の健康関連 QOL に及ぼす影響についての縦断研究」1,700 千円

鈴木征吾

平成 29 年度公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金「在宅で医療的ケアを要する小児を対象としたレスパイトケアと健康関連 QOL に関する研究」1,000 千円

鈴木征吾

2018 年度ホスピス・緩和ケアに関する調査・研究「特別養護老人ホームに入居している認知症をもつ人の人生の最終段階における満足度を測定するツールの開発」1,000 千円

福井千絵、上別府圭子

平成 29 年度公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金「思春期小児慢性疾患患者の Disease Awareness Scale（疾患意識尺度）の開発と関連要因の検討」1,000 千円

中村真由美

平成 30 年度公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金「乳がん患者と子どものがんに関する親子コミュニケーション評価尺度の開発と Posttraumatic growth への関連要因の検討」1,000 千円

大城怜

平成 29 年度一般団法人小林製薬青い鳥財団研究助成（調査研究／個人）「通常学校に通う児童生徒の小児がん患者に対する肯定的態度を育むための小児がん教育の開発と評価」1,000 千円

吉備智史, 副島堯史, 上別府圭子

平成 29 年度政策医療振興財団研究助成金「入院中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連についての研究」600 千円

村田翔, 鈴木征吾, 副島堯史, 上別府圭子

平成 30 年度(公財)メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金「沖縄県の 10 代母親における産後の不安・抑うつに与える影響：祖母との関係に焦点をあてて」300 千円

上原奈々

1-3. 学内外の公的活動

上別府圭子

日本小児がん看護学会 理事長	(2017年1月～)
日本小児血液・がん学会 理事	(2016年6月～)
日本小児血液・がん学会 長期フォローアップ・移行期医療委員会委員	(2016年6月～)
日本小児血液・がん学会 看護委員会委員長/規約委員会委員長	(2016年6月～)
日本小児がん研究グループ JCCG 長期フォローアップ委員会委員	(2016年4月～)
がんの子どもを守る会 調査研究委員会委員	(2016年4月～)
日本小児看護学会 評議員	(2013年7月～)
日本小児保健協会 代議員	(2009年1月～)
日本家族看護学会 理事	(2010年4月～)
日本家族看護学会 研究促進委員会委員長	(2013年4月～)
日本家族看護学会 編集委員会委員	(2010年4月～)
日本家族研究・家族療法学会 副会長/評議員	(2013年6月～)
日本看護系大学協議会 理事	(2018年6月～)
日本看護系大学協議会 国際交流推進委員会委員長	(2018年6月～)
日本精神衛生学会 常任理事	(2003年6月～)
日本精神衛生会 理事	(2012年6月～)
日本乳幼児医学・心理学会 評議員	(2010年12月～)
「保健の科学」 編集委員	(2010年4月～)
関東子ども精神保健学会 理事	(2016年3月～)
神戸大学 非常勤講師	(～2018年3月)
筑波大学 非常勤講師	(～2018年3月)
International Family Nursing Association (IFNA), Nominating committee	(2016年4月～2018年3月)
Hong Kong International Nursing Forum, Organizing committee	(2018年7月～2018年12月)
International Society of Pediatric Oncology (SIOP) Kyoto 2018, Nursing Chair, Local Committee	(2017年12月～2019年11月)
East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Executive Committee	(2018年6月～)

佐藤伊織

- 日本小児がん看護学会 理事 (2017年1月～)
日本小児がん看護学会 学術検討委員長 (2017年1月～)
日本小児がん看護学会 編集委員 (2013年1月～)
日本家族看護学会 専任査読者 (2013年8月～)
日本看護科学学会 専任査読委員 (2015年10月～)
日本看護科学学会 統計担当専任査読委員 (2015年10月～)
日本小児看護学会 専任査読者 (2018年9月～)
日本小児がん研究グループ (JCCG) 研究審査委員 (2016年4月～)
日本小児がん研究グループ (JCCG) 脳腫瘍委員会神経心理小委員 (2016年4月～)

キタ幸子

- 日本家族看護学会 研究促進委員 (2016年4月～)
日本看護系大学協議会 国際交流推進委員会委員 (2018年4月～)
都立大塚病院 研修講師 (～2018年3月)

副島堯史

- 日本小児がん看護学会 学術検討委員 (2017年1月～)
日本小児保健学会 専任査読委員 (2017年6月～)
日本小児がん看護学会 専任査読委員 (2017年8月～)
都立大塚病院 研修講師 (2018年4月～)
Japan Journal of Nursing Science 専任査読委員 (2019年2月～)

1-4. 国際活動

平成 29 年度

海外からの研究者招聘

1. Denise M. Saint Arnault Ph.D. RN. FAAN, Professor

Vice Chair for Administration of the Professional Graduate Programs

Department of Health Behavior and Biological Sciences

University of Michigan School of Nursing



関心分野

Women's mental health/ Culture and mental health/ Immigrant women/
Gender specific mental health risks/ Transcultural psychiatry

招聘期間

2017 年 8 月 23 日 (水) ~8 月 29 日 (火)

特別講義

Overview of the Clinical Ethnographic Narrative Interview

日時 : 8 月 25 日 (金) 10:00~12:00

場所 : 医学 5 号館 107 号室

トレーニング

Training regarding the Clinical Ethnographic Narrative Interview

日時 : 8 月 25 日 (金) 13:00~15:00

8 月 28 日 (月) 10:00~12:00

8 月 25 日 (金) 13:00~15:00

場所 : 医学 5 号館 107 号室

2. Edward Chan Ko Ling Ph.D. RN. FAAN,
Professor and Associate Head
Department of Applied Social Sciences
The Hong Kong Polytechnic University



関心分野

Child Maltreatment, Intimate Partner Violence
Chinese Migration and Child Welfare
Child and Family Poly-victimization
Family Violence, Polyvictimization

招聘期間

2018年2月1日(木)～4月7日(土)

第2回家族看護学研究セミナー

Preventing family violence: Child and family poly-victimization.

日時：2018年2月12日(土) 13:00～16:10

場所：医学部研究棟鉄門記念講堂

HQOR セミナー

多職種協働研究・国際共同研究

第1回

Public health approach & interdisciplinary perspectives

日時：2018年2月8日(木) 14:00～16:00

場所：医学部3号館 S101 号室

第2回

Level of evidence, international interest and local impact

日時：2018年2月20日(火) 14:00～16:00

場所：医学部3号館 S101 号室

第3回

Examples of international research

日時：2018年2月27日（火）10:00~12:00

場所：医学部5号館103号室

第4回

Publication strategies

日時：2018年2月27日（火）14:00~16:00

場所：医学部5号館101号室

特別講義

Advanced Research Methodology

第1回

Meta-analysis (concepts)

日時：2018年2月9日（金）10:25~12:10

場所：医学部5号館101号室

第2回

Meta-analysis (statistics)

日時：2018年2月21日（水）10:25~12:10

場所：医学部5号館101号室

第3回

Reporting and measurement of family violence（東京医学会集会）

日時：4月3日（木）14:55~16:10

場所：医学部3号館S101号室

ランチセミナー

Family violence

第1回

Explaining family polyvictimization: The development of a nested ecological theory

日時：2018年2月14日（水）12:00~13:00

場所：医学部5号館201号室

Culture & violence prevention: Paternal involvement & grandparenting program

日時：2018年3月28日（水）12:00~13:00

場所：医学部5号館201号室

3. Pamela Hinds RN, PhD, FAAN

Director, The Children's Research Institute,
Children's National Health System



関心分野

Nursing care to improve health quality outcome of
pediatric cancer patients and their families

招聘期間

2018年3月9日（金）～3月16日（金）

HQOR セミナー

ヘルスアウトカムリサーチ：アウトカム・インジケータの作成・評価

第1回

構成概念・多項目尺度と指標：潜在概念、概念と指標の関係、項目・尺度作成のプロセス

日時：3月12日（月）10:00~15:00

場所：医学部3号館 N101号室

第2回

尺度作成のプロセス：項目作成と概念整理、教示文・説明文書等の作成、回答項目の考え方と作成

日時：3月13日（火）10:00~15:00

場所：医学部3号館 N101号室

第3回

尺度の評価（1）：実施可能性、内容・表面妥当性と評価方法、Cognitive interview の手法

日時：3月14日（水）10:00~15:00

場所：医学部3号館 N101号室

第4回

尺度の評価（2）：フィールド調査を用いた概念、妥当性・信頼性の評価、概念妥当性・信

頼性の分析

日時：3月15日（木）10:00～15:00

場所：医学部3号館 N101号室

日本小児がん看護学会との交流

国際交流委員会の企画で、上別府圭子教授と日本小児がん看護学会理事、国際交流委員会のメンバーと交流を行った。

海外訪問

海外セミナー開催および国際共同研究打ち合わせ

DV被害を受けた母子の理解と支援～私たちに何ができるのか～. 文化と女性の健康プロジェクトセミナー：米国に暮らす日本人女性の健康と支援

上別府圭子教授、キタ助教とミシガン大学の Denise Saint-Amault 教授が、米国に暮らす日本人女性の健康と支援に関して、セミナーを開催した。また、「Clinical Ethnographic Narrative Interview (CENI)を用いた、過去にパートナーからの暴力被害を経験した女性における心理・社会的プロセスの解明と CENI が及ぼす心身・社会的健康への効果検証」の対象者のリクルート、プロトコルの打ち合わせを行った。

日時：2017年7月28日（金）

場所：サンディエゴ，イリノイ州，アメリカ合衆国

Hong Kong International Nursing Form 2017 での招聘及び発表

Hong Kong International Nursing Form 2017 に上別府圭子教授が招聘され、目麻里子研究員が「The relationship between the use of long-term care insurance service (LT CI) and family-to-work conflict (FWC) among employed family caregivers of persons with dementia (PWD)」に関する研究発表をした。

日時：2017年12月18日（月）～19日（火）

場所：Pokfulam, 香港

International Sibling Research Summit への参加

がんを持つ子どものきょうだいのニーズやそのケア・国際共同研究をテーマにした国際サミットに上別府圭子教授が招聘され、討議に参加した。

日時：2018年3月22日（木）～2018年3月24日（土）

場所：シカゴ, アメリカ合衆国

海外視察

アジア大学視察 概要

平成30年3月6日～8日において上別府圭子教授がグローバルナーシングリサーチセンターのさらなる充実に向け、アジアの大学における若手研究者の育成、教育・研究の促進の取り組みについて視察した。

2018年3月6日	国立台湾大学
2018年3月7日	シンガポール国立大学
2018年3月8日	香港理工大学
2018年3月8日	香港中文大学

海外での受賞

中嶋祥平が 44th Annual Meeting of the European Society for Blood and Marrow Transplantation (EBMT)における EBMT Nurses Group Award for Best Oral Presentation を受賞

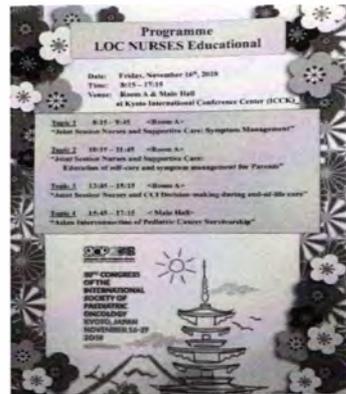
Shohei Nakajima. Predictors of parental psychological distress during the acute phase of pediatric hematopoietic stem cell transplantation in Japan: A multicenter prospective longitudinal study
EBMT Nurses Group Award for Best Oral Presentation. 44th Annual Meeting of the European Society for Blood and Marrow Transplantation (EBMT) 18-21 March 2018, Lisbon, Portugal



平成 30 年度

国際学会開催

上別府教授が、2018年11月16日～19日に京都にて開催された第50回国際小児がん学会 SIOP 2018 において、Committee member の一人として企画・運営に携わり、90か国から2,500人の参加を得て、成功裡に導くことに貢献した。開催直前に本庶佑先生のノーベル賞受賞が発表され、大隅良典先生と共に2人の受賞者の講演を含む、リッチなプログラム内容であった。多くの参加者から、日本ならではの「おもてなし」あふれる学会運営に、これまでで最も素晴らしい会の一つという高い評価を得ることができた。



上別府教授の、SIOP2018における具体的な貢献の内容について以下に挙げる。

1. 2016年10月19日～22日に、Dublin で開催された SIOP2016 において Nursing Steering Committee との打ち合わせを開始した。以降2年間にわたり、Web 会議に参加し、SIOP2018 の企画を行った。
2. 2017年10月12日～15日に Washington DC で開催された SIOP2017 において、Nursing Session の Closing Ceremony で SIOP2018 を紹介し、参加を呼び掛けた。同様に、全体の Closing Ceremony でも、招聘のスピーチを行った。
3. Local Organizing Committee : LOC の Nurse's Chair として、2018年11月16日に開催された LOC Nurses' Educational Day の企画・運営を中心に行った。
4. 本大会においては、11月17日に開催された Nurses' Opening Session で Welcome speech ならびに日本の小児がん看護の紹介を行ったほか、座長の選出やプログラム作成に関わった。さらに NPO 法人ハートリンクワーキングプロジェクトの寄付を得て、日本語のプログラムを特別に用意したり、通訳のサービスを入れたりするなど、日本の臨床看護師が参加しやすく、益を得られるようにするための配慮を行った。
5. 展示ブースにおいて日本小児がん看護学会 Japanese Society of Pediatric Oncology Nursing: JSPON のブースを設け、パンフレットも作成し、日本の小児がん看護について広く紹介した。



教室からは、佐藤講師が座長と口演者、小林明日香、村田翔が口演者、副島助教が共同演者、吉備智史がボランティアとして貢献した。

海外からの研究者招聘

1. Sek-Ying Chair, RN, PhD, FAAN

Director/ Professor

The Nethersole School of Nursing

The Chinese University of Hong Kong



関心分野

Cardiovascular nursing, Critical Care nursing

招聘期間

2018年12月20日（火）～12月22日（木）

特別講義

第1回

Nurture Momentum for Achievement

日時：12月17日（月）10:00～15:00

場所：医学部3号館 N101号室

第2回

Building Your Research Interest to Expertise I

日時：12月18日（火）15:30～17:30

場所：医学部3号館 S102号室

第3回

Building Your Research Interest to Expertise II

日時：12月19日（水）10:00～12:00

場所：医学部3号館 S102号室

ファカルティディベロップメント

Mutual Benefit: Coaching Post-graduate Student's Research Development

日時：12月18日（火）13:30～15:00

場所：医学部3号館 S102号室

ブラウンバッグセミナー

日時：12月19日（水）12:15～12:55

場所：医学部3号館 S101号室

2. Susan Bogels, Ph.D., CP

Professor of Developmental Psychopathology
& Mindfulness at the University of Amsterdam

関心分野

Mindfulness, Cognitive Behavior Therapy,
Anxiety disorders, Family Therapy

招聘期間

2019年1月9日（水）～1月12日（土）



特別講義

第1回

Mindfulness-Based Interventions: From Development to Evaluation I

日時：1月9日（水）13:00～16:00

場所：医学部3号館 S101号室

第2回

Mindfulness-Based Interventions: From Development to Evaluation II

日時：1月10日（木）10:00～12:00

場所：医学部3号館 S102号室

第3回

Mindfulness for Children with ADHD/ASD and Parents

日時：1月10日（木）16:50～18:20

場所：医学部3号館 N101号室

第4回

Putting Evidence into Practice Locally and Globally

日時：1月11日（金）13:00～15:00

場所：医学部3号館 S102号室

第5回

Mindfulness: What It Is and How It Helps Us

日時：1月11日（金）16:50～18:20

場所：医学部3号館 S102号室

ブラウンバッグセミナー

日時：1月10日（木）12:15～-12:55

場所：医学部3号館 S102号室

一般公開セミナー

Mindfulness for Families ～To Enhance Resilience among Children and Parents～

日時：1月12日（土）10:00～12:00

場所：医学部教育棟鉄門記念講堂

海外からの研究者訪問

1. Jung Yoon Choi, PhD

Seoul National University Children's
Hospital

日時・概要

2018年11月28日 14:00～16:00 医学5
号館107号室

韓国において、小児がんの長期フォローアップ外来を作るために、それに役立つ情報を収集するために当教室を訪問し、当教室の教員・院生の発表を聞き、情報・意見交換を行った。



海外訪問

国際共同研究の打ち合わせ

キタ幸子助教が、ミシガン大学の Denise Saint Arnault 教授と行っている国際共同研究、「Clinical Ethnographic Narrative Interview (CENI)を用いた過去にパートナーからの暴力被害を経験した女性における心理・社会的プロセスの解明と CENI が及ぼす心身・社会的健康への効果検証」の解析計画・打合せに参加した。

日時：2018年6月25日（月）～6月30日（土）

場所：ミシガン大学、アン・アーバー市、ミシガン州、アメリカ合衆国

国際共同研究の打ち合わせ

戸部浩美助教が、アムステルダム大学で開催された国際マインドフルネス学会のプレコンファレンス Mindfulness-based Childbirth and Parenting: MBCP のワークショップに参加し、MBCP 開発者であるカリフォルニア大学サンフランシスコ校のナンシー・バーデッキー氏と、MBCP の主要研究者であるウィスコンシン大学マディソン校のラリッサ・ダンカン氏と、今後の国際共同研究について打ち合わせを行った。

日程：2018年7月10日（火）

場所：アムステルダム大学、アムステルダム、オランダ

戸部浩美助教が、アムステルダム大学のスーザン・ボーゲルズ教授が開発した Mindful Parenting のアドバンスティーチャートレーニングに参加し、今後の国際共同研究、および、1月に予定の東京大学学部教育改革による招聘についての打ち合わせを行った。

日程：2018年11月6日（火）～11日（土）

場所：香港

海外視察

オーストラリア視察 概要

平成 31 年 3 月 12 日～14 日において上別府圭子教授がグローバルナースングリサーチセンターのさらなる充実に向け、オーストラリアの大学における若手研究者の育成、教育・研究の促進の取り組みについて視察した。

2019 年 3 月 12 日	ウェスタン・シドニー大学
2019 年 3 月 13 日	アデレード大学
2019 年 3 月 14 日	ディーキン大学

海外での受賞

上別府圭子教授が International Family Nursing Association における Excellence in Family Nursing Award を受賞

Kamibepu K. Excellence in Family Nursing Award. 2019 IFNA Awards. International Family Nursing Association. 15 March 2019.

<https://internationalfamilynursing.org/ifna-membership/international-family-nursing-association-awards/>



その他

International Family Nursing Association のホームページニュースにおける掲載

International Family Nursing Association:IFNA のホームページに第 3 回家族看護学研究セミナーのニュースが掲載された。



2. 学位論文（卒業論文・修士論文・博士論文）

平成 29 年度

卒業論文

高橋 梨沙：

患児の死を経験した看護師の思いと対処行動に関する質的研究

修士論文

吉備 智史：

Development of the Chedoke-McMaster attitudes towards children with handicaps scale:
Japanese Version

小林 明日香：

Health-related quality of life in parents with hospitalized children with cancer: Focus on
changes in working conditions and beliefs

林 真由：

非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究
－医療従事者・専門家に対するインタビュー調査－

村田 翔：

Relationship between fatigue and family functioning in children with cancer undergoing
treatment in the hospital: A cross-sectional study

博士論文

戸部 浩美：

育児中の親のレジリエンスを高めるプログラムの効果－怒りの情動に焦点を
当てて－：ランダム化比較試験

平成 30 年度

修士論文

上原 奈々 :

10 代母親における祖母との関係性が児とのボンディングに与える影響 : 横断的観察研究

松永 百恵 :

外国人妊産婦への産科看護ケアにおけるパートナーの重要性に対する認識 : 全国調査

博士論文

江本 駿 :

周期性嘔吐症候群患者が抱える不安と Quality of Life の関係およびその関連要因に関する研究

鈴木 征吾 :

医療依存度の高い小児におけるレスパイトケアが健康関連 QOL に与える影響

中嶋 祥平 :

同種造血幹細胞移植後 1 年半以内における長期フォローアップ外来を受診する患者と介護者の健康関連 Quality of Life と情報ニーズ : 多施設共同横断研究

中村 真由美 :

成人移行期支援外来における介入が思春期の小児慢性疾患患者の移行準備性に及ぼす効果 : ランダム化比較試験

3. 教室カンファレンス

平成 29 年度

4 月 11 日

中嶋 祥平 (Lecture)

家族看護学教室の歩み

鈴木 征吾 (Lecture)

看護研究とは

江本 駿 (研究発表)

HRQoL and related factors among Children and Adolescents with Cyclic Vomiting Syndrome;
An international cross-sectional study using patient registry

4 月 18 日

大城 怜 (Lecture)

論文の読み方

中村 真由美 (Lecture)

研究倫理

戸部 浩美 (研究発表)

Efficacy of resilience-enhancing program for parents focusing on emotion control of anger:
randomized-controlled trial

4 月 25 日

大城 怜 (Lecture)

質問紙づくりのポイント

福井 千絵 (Lecture)

インタビューガイドづくりのポイント

小林 明日香 (研究発表)

入院中の小児がんの子どもを持つ親の就労状況の変化が親の健康 QOL に与える影響：
親の価値観に着目した横断観察研究

5 月 2 日

小林 明日香 (論文抄読)

Salbador A, Crespo C, Martins AR, et al. Parents' perceptions about their child's illness in
pediatric cancer: Links with caregiving burden and quality of life. Journal of child and family
studies, 2015, 24(4): 1129-1140.

吉備 智史 (論文抄読)

de Laat S, Freriksen E & Vervloed MP. Attitudes of children and adolescents toward persons who are deaf, blind, paralyzed or intellectually disabled. *Research in developmental disabilities*, 2013, 34(2): 855-863.

村田 翔 (研究発表)

入院中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連についての研究

5月9日

福井 千絵 (研究発表)

Factors associated to family conflict and the patterns of leading family members' consensus on end-of-life care of people with advanced dementia in nursing homes

中村 真由美 (研究発表)

Development of Japanese version of Transition-Q and evaluation of transition outpatient clinic -randomized controlled trial-

林 真由 (研究発表)

非配偶者間人工授精を選択した家族の家族形成プロセスにおける医療従事者・支援者の認識に関する質的研究

5月16日

林 真由 (論文抄読)

Fisher JR, Hammarberg K, & Baker HG. Assisted conception is a risk factor for postnatal mood disturbance and early parenting difficulties. *Fertility and sterility*, 2005, 84(2): 426-430.

村田 翔 (論文抄読)

Wakimizu R, Hiraga N, Furuya K, et al. Depression and health-related quality of life after discharge and associated factors in childhood cancer patients in Japan. *Bioscience Trends*, 2011, 5(6): 264-272.

吉備 智史 (研究発表)

小学生用障害をもつ子どもに対する態度尺度(CAHTCH Scale)日本語版の開発

5月23日

中嶋 祥平 (研究発表)

Quality of Life and information needs of patients undergone hematopoietic stem cell transplantation and their family members visiting long-term follow up clinic after discharge in Japan: A multicenter prospective longitudinal study

鈴木 征吾 (研究発表)

Effects of respite care on health related QOL among children with continuous dependence on technology

戸部 浩美 (研究発表)

Efficacy of resilience-enhancing program for parents focusing on emotion control of anger: randomized-controlled trial

5月30日

小林 明日香 (論文抄読)

Okada H, Maru, M, Maeda R, et al. Impact of childhood cancer on maternal employment in Japan. *Cancer nursing*, 2015, 38(1): 23-30.

吉備 智史 (論文抄読)

Yi J, Kim MA, Hong JS, et al. Childhood cancer survivors' experiences in school re-entry in South Korea: Focusing on academic problems and peer victimization. *Children and Youth Services Review*, 2016, 67: 263-269.

江本 駿 (研究発表)

HRQoL and anxiety among Children and Adolescents with Cyclic Vomiting Syndrome; A Mixed Method Study

6月6日

林 真由 (研究発表)

非配偶者間人工授精を選択した家族の家族形成プロセスにおける医療従事者・支援者の認識に関する質的研究

中村 真由美 (研究発表)

Development of Japanese version of Transition-Q and evaluation of transition outpatient clinic: randomized controlled trial

6月13日

村田 翔 (論文抄読)

Nagai A, Zou N, Kubota M et al. Fatigue in survivors of childhood acute lymphoblastic and myeloid leukemia in Japan. *Pediatrics International*, 2012, 54(2), 272-276.

林 真由 (論文抄読)

Kovacs GT, Wise S, Finch S. Keeping a child's donor sperm conception secret is not linked to family and child functioning during middle childhood: An Australian comparative study.

Australian and New Zealand Journal of Obstetrics and Gynaecology, 2015, 55(4): 390-396.

吉備 智史 (研究発表)

小学生用障がいをもつ子どもに対する態度尺度日本語版の開発

6月20日

上原 奈々 (論文抄読)

Meltzer BS, Bledsoe MSE, Johnson N, et al. A prospective study of perinatal depression and trauma history in pregnant minority adolescents. American journal of obstetrics and gynecology, 2013, 208(3), 211-e1.

松永 百恵 (論文抄読)

Fellmeth G, Fazel M, Plugge E. Migration and perinatal mental health in women from low-and middle-income countries: a systematic review and meta-analysis. An International of Obstetrics and Gynaecology, 2017, 124(5): 742-752.

福井 千絵 (研究発表)

Family conflict on end-of-life care of people with advanced dementia in nursing homes

6月27日

上原 奈々 (研究発表)

望まない妊娠をした若年妊婦への支援

松永 百恵 (研究発表)

周産期における在日外国人とその家族への支援

鈴木 征吾 (研究発表)

Impact of respite care and disease self-management on health related QOL among children with artificial airway management

7月4日

母性看護助産学・家族看護学合同カンファ

浅井 百合絵 (研究発表)

産後1年までの女性における骨盤底機能・形態と骨盤底障害の関連: 縦断観察研究

大城 怜 (研究発表)

乳がん患者と家族における心理的健康状態の関係—PTGに着目して—

Psychological well-being in breast cancer patients and their family -Focus on Posttraumatic growth-

7月11日

上原 奈々 (論文抄読)

Phipps MG, Nunes, AP. Assessing pregnancy intention and associated risks in pregnant adolescents. Maternal and child health journal, 2012,16(9): 1820-1827.

松永 百恵 (論文抄読)

Stewart DE, Gagnon AJ, Merry L. A, et al. Risk factors and health profiles of recent migrant women who experienced violence associated with pregnancy. *Journal of Women's Health*, 2012, 21(10), 1100-1106.

中嶋 祥平 (研究発表)

Quality of Life and informational needs of patients undergone hematopoietic stem cell transplantation and their family members visiting long-term follow-up clinic at 6-month and 1-years post-HSCT in Japan: A multicenter prospective longitudinal study

7月18日

小林 明日香 (研究発表)

入院中の小児がんの子どもを持つ父親と母親の就労状況の変化が親の健康 QOL に与える影響

村田 翔 (研究発表)

入院中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連についての研究

9月5日

上原 奈々 (抄読発表)

Bartlett JD, Easterbrooks MA. The moderating effect of relationships on intergenerational risk for infant neglect by young mothers. *Child abuse & neglect*, 2015, 45, 21-34.

松永 百恵 (抄読発表)

Potvin LA., Brown HK, Cobigo V. Social support received by women with intellectual and developmental disabilities during pregnancy and childbirth: An exploratory qualitative study. *Midwifery*, 2016, 37, 57-64.

中村 真由美 (研究発表)

Development of Japanese version of Transition-Q and evaluation of transition outpatient clinic; randomized controlled trial

福井 千絵 (研究発表)

特別養護老人ホームに入居している認知症をもつ人の家族内の意見の相違と複雑性悲嘆との関連

9月12日

戸部 浩美 (研究発表)

Efficacy of resilience-enhancing program for parents focusing on emotion control of anger: randomized-controlled trial

中嶋 祥平 (研究発表)

Quality of Life and informational needs of patients undergone hematopoietic stem cell transplantation and their caregivers visiting long-term follow-up clinic: A multi-centered cross-sectional study

鈴木 征吾 (研究発表)

impact of respite care on health related QOL among children with technology dependency

9月19日 母性看護学・助産学教室合同カンファレンス

林 真由 (研究発表)

非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究
医療従事者・支援者に対するインタビュー調査

A qualitative study regarding family formation process among family who chose artificial insemination by donor –interviews for health care professionals and supporters

小林 明日香 (研究発表)

入院中の小児がん患児の親の就労状況の変化が親の健康関連 QOL に与える影響：
親のビリーフと家族機能に着目した横断観察研究

The impact of work change of parents who have children with cancer in the hospital on parental health-related QOL: A cross-sectional observational study focused on parental belief and family function

村田 翔 (研究発表)

入院中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連についての研究

Study on Relationship between Fatigue and Family Function in Children with Cancer in Hospital

井上 璃子 (研究発表)

産後1ヶ月の初産婦における出産に伴う心的外傷性ストレス症状と育児に対する自信との関連

細谷 絵美 (研究発表)

20～30歳代女性を対象としたスマートウォッチによる身体活動測定の妥当性・信頼性の検討

志賀 咲月 (研究発表)

乳児の顔の皮膚トラブルとスキンケアとの関連検討

9月26日

上原 奈々 (抄読発表)

Dubber S, Reck C, Müller M, et al. Postpartum bonding: the role of perinatal depression, anxiety and maternal-fetal bonding during pregnancy. Archives of women's mental health, 2015, 18(2), 187-195.

松永 百恵 (抄読発表)

Riggs E, Yelland J, Szwarc J, et al. Fatherhood in a new country: a qualitative study exploring the experiences of Afghan men and implications for health services. Birth, 2016, 43(1), 86-92.

吉備 智史 (研究発表)

小学生用「特別な支援が必要な子どもに対する態度尺度 (CATCH Scale)」日本語版の開発

Development of the Japanese ver. Of Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) scale.

江本 駿 (研究発表)

Patient and Public Involvement in research and registry research

研究への患者参加・参画の動向と、レポジストル研究 (Workshop-C, J-RARE の背景)

10月3日

中嶋 祥平 (研究発表)

小児造血幹細胞移植後フォローアップ外来 WG における臨床と連携について

鈴木 征吾 (研究発表)

Impact of respite care on health related QOL among children with technology dependency

10月10日

中村 真由美 (研究発表)

Development of Japanese version of Transition-Q and evaluation of transition outpatient clinic -randomized controlled trial-

福井 千絵 (研究発表)

特別養護老人ホームに入居している認知症をもつ人の人生の最終段階における家族内の意見の相違と家族資源が複雑性悲嘆に与える影響

10月24日

松永 百恵 (研究発表)

移民・在日外国人女性の周産期における健康問題とその要因

村田 翔 (研究発表)

治療を受けている入院中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連：横断的観察研究

Relationship between Fatigue and Family Function in Children with Cancer who were hospitalized: A Cross-sectional Study

吉備 智史 (研究発表)

日本語版“Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale”

—小学生用「身体障害児への態度尺度」—の開発

Development of Japanese Version of Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale, as the Attitudes Towards Children with Physical Disability Scale

10月31日

上原 奈々 (研究発表)

10代母親の健康問題と母親役割獲得に影響する要因

林 真由 (研究発表)

非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究
医療従事者・支援者に対するインタビュー調査

A qualitative study regarding family formation process among family who chose artificial insemination by donor –interviews for health care professionals and supporters

小林 明日香 (研究発表)

入院中の小児がん患児の親の就労状況の変化が親の健康関連 QOL に与える影響：
親のビリーフと家族機能に着目した横断観察研究

The impact of work change of parents who have children with cancer in the hospital on parental health-related QOL: A cross-sectional observational study focused on parental belief and family function

11月7日

村田 翔 (研究発表)

治療を受けている入院中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連：横断的観察研究

Relationship between Fatigue and Family Function in Children with Cancer who were hospitalized: A Cross-sectional Study.

吉備 智史 (研究発表)

日本語版”Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale”の開発

Development of Japanese Version of Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale.

11月28日

林 真由 (研究発表)

非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究
医療従事者・支援者に対するインタビュー調査

A qualitative study regarding family formation process among family who chose artificial insemination by donor –interviews for health care professionals and supporters

小林 明日香 (研究発表)

入院中の小児がん患児の親の就労状況の変化が親の健康関連 QOL に与える影響：
親のビリーフと家族機能に着目した横断観察研究

The impact of work-change of parents who have children with cancer in the hospital on parental health-related QOL: A cross-sectional observational study focused on parental belief and family functioning

12月5日

吉備 智史 (研究発表)

日本語版“Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale”の
開発

Development of Japanese Version of Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale.

小林 明日香 (研究発表)

入院中の小児がん患児の親の就労状況の変化が親の健康関連 QOL に与える影響：
横断観察研究

The impact of work change of parents who have children with cancer in the hospital on parental health-related QOL: A cross-sectional observational study

林 真由 (研究発表)

非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究
医療従事者・専門家に対するインタビュー調査

A qualitative study regarding family formation process among family who chose artificial insemination by donor –interviews for health care professionals and supporters

村田 翔 (研究発表)

入院治療中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連：横断的観察研究

Relationship between Fatigue and Family Functioning in Children with Cancer on Treatment in the Hospital: A Cross-sectional Study.

12月12日

吉備 智史 (研究発表)

日本語版“Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale”の
開発

Development of Japanese Version of Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale.

小林 明日香 (研究発表)

入院中の小児がん患児の親の就労状況の変化が親の健康関連 QOL に与える影響：

横断観察研究

The impact of work change of parents who have children with cancer in the hospital on parental health-related QOL: A cross-sectional observational study

林 真由 (研究発表)

非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究
医療従事者・専門家に対するインタビュー調査

A qualitative study regarding family formation process among family who chose artificial insemination by donor –interviews for health care professionals and supporters

村田 翔 (研究発表)

入院治療中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連：横断的観察研究

Relationship between Fatigue and Family Functioning in Children with Cancer on Treatment in the Hospital: A Cross-sectional Study.

12月26日

吉備 智史 (研究発表)

日本語版”Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale”の開発

Development of Japanese Version of Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale.

小林 明日香 (研究発表)

入院中の小児がん患児の親の就労状況の変化が親の健康関連 QOL に与える影響：
横断観察研究

The impact of work change of parents who have children with cancer in the hospital on parental health-related QOL: A cross-sectional observational study

林 真由 (研究発表)

非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究
医療従事者・専門家に対するインタビュー調査

A qualitative study regarding family formation process among family who chose artificial insemination by donor –interviews for health care professionals and supporters

村田 翔 (研究発表)

入院治療中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連：横断的観察研究

Relationship between Fatigue and Family Functioning in Children with Cancer on Treatment in the Hospital: A Cross-sectional Study.

1月5日

吉備 智史 (研究発表)

日本語版“Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale”の
開発

Development of Japanese Version of Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with
Handicaps (CATCH) Scale.

小林 明日香 (研究発表)

入院中の小児がん患児の親の就労状況の変化が親の健康関連 QOL に与える影響：
横断観察研究

The impact of work change of parents who have children with cancer in the hospital on parental
health-related QOL: A cross-sectional observational study

林 真由 (研究発表)

非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究
医療従事者・専門家に対するインタビュー調査

A qualitative study regarding family formation process among family who chose artificial
insemination by donor –interviews for health care professionals and supporters

村田 翔 (研究発表)

入院治療中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連：横断的観察研究

Relationship between Fatigue and Family Functioning in Children with Cancer on Treatment in
the Hospital: A Cross-sectional Study.

1 月 12 日

吉備 智史 (研究発表)

日本語版“Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale”の
開発

Development of Japanese Version of Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with
Handicaps (CATCH) Scale.

小林 明日香 (研究発表)

入院中の小児がん患児の親の就労状況の変化が親の健康関連 QOL に与える影響：
横断観察研究

The impact of work change of parents who have children with cancer in the hospital on parental
health-related QOL: A cross-sectional observational study

林 真由 (研究発表)

非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究
医療従事者・専門家に対するインタビュー調査

A qualitative study regarding family formation process among family who chose artificial
insemination by donor –interviews for health care professionals and supporters

村田 翔 (研究発表)

入院治療中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連：横断的観察研究
Relationship between Fatigue and Family Functioning in Children with Cancer on Treatment in
the Hospital: A Cross-sectional Study.

1月23日

村田 翔（研究発表）

入院治療中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連：横断的観察研究
Relationship between Fatigue and Family Functioning in Children with Cancer on Treatment in
the Hospital: A Cross-sectional Study.

小林 明日香（研究発表）

入院中の小児がん患児の親の就労状況の変化が親の健康関連 QOL に与える影響：
横断観察研究

The impact of work change of parents who have children with cancer in the hospital on parental
health-related QOL: A cross-sectional observational study

吉備 智史（研究発表）

日本語版”Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps (CATCH) Scale”の
開発

Development of Japanese Version of Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with
Handicaps (CATCH) Scale.

林 真由（研究発表）

非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究
医療従事者・専門家に対するインタビュー調査

A qualitative study regarding family formation process among family who chose artificial
insemination by donor –interviews for health care professionals and supporters

1月30日

高橋 梨沙（研究発表）

患児の死を経験した看護師の思いと対処行動に関する質的研究

中村 真由美（研究発表）

Development of Japanese version of Transition-Q and evaluation of transition outpatient clinic
-randomized controlled trial-

鈴木 征吾（研究発表）

Impact of respite care on health related QOL among children with technology dependency

2月13日 母性看護学・助産学教室合同カンファレンス

中西 愛美（研究発表）

Development of the grade table for the skin problems on infancy

瀬戸口 舞香 (研究発表)

Review of fear of child birth

松永 百恵 (研究発表)

Acculturation-resilience of foreign mothers in Japan: A cross-sectional study

菅原 千敬 (研究発表)

Risk factor of developing of breast abscess subsequently after infectious mastitis in Japan

比佐 加奈子 (研究発表)

Exploring the Risk Factors Associated with Anemia in Working Women

上原 奈々 (研究発表)

Factors between generations affecting bonding in Okinawa -Adolescent mother and their mother-

2月20日

大城 怜 (研究発表)

Posttraumatic growth among children of breast cancer survivors: Focusing on the communication between parents and children about parental cancer

中嶋 祥平 (研究発表)

Quality of Life and informational needs of patients undergone hematopoietic stem cell transplantation and their caregivers visiting long-term follow-up clinic within a year post-transplant: A multi-centered cross-sectional study

福井 千絵 (研究発表)

Effects of family conflicts and resources for people with dementia in end-of-life on complicated grief of family caregivers in nursing homes

3月20日

江本 駿 (研究発表)

HRQoL and related factors among Children and Adolescents with Cyclic Vomiting Syndrome; An international cross-sectional study using patient registry

上原 奈々 (研究発表)

10代母親における児へのボンディングに影響する実母要因の検討

Investigation of mother's factor affecting adolescent mothers' bonding to infant

松永 百恵 (研究発表)

産後1か月における在日外国人母親の文化変容とボンディングの関連調査: 横断調査
Acculturation & bonding of foreign mothers in japan at 1 month: A cross-sectional study

平成 30 年度

4 月 10 日

吉備 智史 (レクチャー)

Lecture1 東大家族看護学教室の研究の歩み

小林 明日香 (抄読)

Buehler C, O'Brien M. Mothers' part-time employment: Associations with mother and family well-being. *Journal of Family Psychology*, 2011, 25(6): 895-906.

江本 駿 (研究発表)

HRQoL and related factors among children and adolescents with cyclic vomiting syndrome: An international cross-sectional study using patient registry

中村 真由美 (研究発表)

小児慢性疾患患者における成人移行期支援外来の評価研究—ランダム化比較試験—

4 月 17 日

吉備 智史 (抄読)

Cross D, Waters S, Pearce N, et al. The Friendly Schools Friendly Families programme: Three-year bullying behaviour outcomes in primary school children. *International Journal of Educational Research*, 2012, 53: 394-406.

村田 翔 (レクチャー)

Lecture2 研究とは

中嶋 祥平 (研究発表)

Quality of life and informational needs of patients undergone hematopoietic stem cell transplantation and their caregivers visiting long-term follow-up clinic within a year post-transplant: A multi-centered cross-sectional study

鈴木 征吾 (研究発表)

Impact of health respite care on health related QOL among children with technology dependency

4 月 24 日

小林 明日香 (レクチャー)

Lecture3 論文の読み方

松永 百恵 (研究発表)

在日外国人妊婦とパートナーのメンタルヘルス～パートナーサポートに着目して～
: 横断的観察研究

福井 千絵 (研究発表)

Effects of family conflicts and resources for people with dementia in end-of-life on complicated grief of family caregivers in nursing homes

5月1日

吉備 智史 (レクチャー)

Lecture4 インタビューガイドづくりのポイント

村田 翔 (抄読)

Telehealth applied to physical activity during cancer treatment: a feasibility, acceptability, and randomized pilot study

上原 奈々 (研究発表)

10代母親における祖母との関係がボンディングに与える影響：横断的観察研究

5月8日

村田 翔 (レクチャー)

Lecture5 質問紙づくりのポイント

松永 百恵 (抄読)

Father involvement in immigrant and ethnically diverse families from the prenatal period to the second year: Prediction and mediating mechanisms

大城 怜 (研究発表)

Posttraumatic growth among children of breast cancer survivors: Focusing on the communication between parents and children about parental cancer

5月15日

小林 明日香 (レクチャー)

Lecture6 倫理について

上原 奈々 (抄読)

Grandmothers' familism values, adolescent mothers' parenting efficacy, and children's well-being

吉備 智史 (研究発表)

Development and evaluation of the disability awareness education aiming to change attitudes towards children with cancer

5月22日

松永 百恵 (研究発表)

日本における外国人妊婦の夫に対する家族看護の実態と関連要因の探索—横断観察研究—

小林 明日香 (研究発表)

小児がん患者の親への就労支援における看護のあり方：評価指標開発及びメカニズム
解明

5月29日

澤柳 匠 (抄読)

Factors influencing parental readiness to let their child with cancer die

村本 美由希 (抄読)

Lone parents, health, wellbeing and welfare to work: a systematic review of qualitative studies

上原 奈々 (研究発表)

10代母親における祖母との関係がボンディングに与える影響：横断的観察研究

6月5日

上原 奈々 (抄読)

Birditt KS, Tighe LA, Fingerman KL, et al. Intergenerational relationship quality across three generations. *The Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, 2012, 67(5): 627-638.

松永 百恵 (抄読)

Fabian H, Sarkadi A, Ahman A. Challenges and benefits of conducting parental classes in Sweden: Midwives' perspectives. *Sexual & Reproductive Healthcare*, 2015, 6: 236-242.

千 恵琳 (研究発表)

スマホンアプリ上の交流が AYA 世代がんサバイバーに与える影響

6月12日

母性看護助産学・家族看護学合同カンファレンス

福井 千絵 (研究発表)

長期介護施設に入院している認知症をもつ人の人生の最終段階における家族内の意見
の相違と家族資源が家族介護者の複雑性悲嘆に与える影響

中嶋 祥平 (研究発表)

長期フォローアップ外来を受診する造血幹細胞移植を受けた患者と介護者の Quality of
Life と情報ニーズ：多施設共同横断研究

中村 真由美 (研究発表)

小児慢性疾患患者の成人移行期支援外来における介入の効果：ランダム化比較試験

鈴木 征吾 (研究発表)

レスパイトケアが医療的ケアを要する小児の健康関連 QOL に与える影響

江本 駿 (研究発表)

HRQoL and related factors among children and adolescents with cyclic vomiting syndrome:
An international cross-sectional study using patient registry

臼井 百利子 (研究発表)

出産恐怖の実態とボンディングとの関連—縦断観察研究—

6月19日

澤柳 匠 (抄読)

Lyon ME, Jacobs S, Briggs L, et al. A longitudinal, randomized, controlled trial of advance care planning for teens with cancer: Anxiety, depression, quality of life, advance directives, spirituality. *Journal of Adolescent Health*, 2014, 54(6): 710-717.

村本 美由希 (抄読)

Letourneau N, Tryphonopoulos P, Giesbrecht G, et al. Narrative and meta-analytic review of interventions aiming to improve maternal-child attachment security. *Infant Mental Health Journal*, 2015, 36(4): 366-387.

村田 翔 (研究発表)

入院治療中の小児がん患者における疲労感軽減に関する研究

6月26日

大城 怜 (研究発表)

Posttraumatic growth among children of breast cancer survivors: Focusing on the communication between parents and children about parental cancer

上原 奈々 (研究発表)

10代母親における祖母との関係がボンディングに与える影響：横断的観察研究

松永 百恵 (研究発表)

周産期における外国人母親のパートナーに対する看護の実態とその関連要因の探索—国内横断観察研究—

7月3日

中嶋 祥平 (研究発表)

Quality of life and informational needs of patients undergone allogeneic hematopoietic stem cell transplantation and their caregivers visiting long-term follow-up clinic within a year post-transplant: A multi-centered cross-sectional study

中村 真由美 (研究発表)

小児慢性疾患患者における成人移行期支援外来の評価研究—ランダム化比較試験—

伊藤 美千代 (研究発表)

再燃を繰り返すクローン病患者の働く意欲(work motivation)からみた職業生活再建プロセス→クローン病のある自分の人生を肯定するプロセス

7月10日

江本 駿 (研究発表)

HRQoL and related factors among children and adolescents with cyclic vomiting syndrome;
An international cross-sectional study using patient registry

福井 千絵 (研究発表)

長期介護施設に入居している認知症をもつ人の人生の最終段階における家族内の意見
の相違と家族資源が家族介護者の複雑性悲嘆に与える影響

7月17日

澤柳 匠 (研究発表)

研究発表

村本 美由希 (研究発表)

特定妊婦の親と子の絆

鈴木 征吾 (研究発表)

レスパイトケア利用が医療的ケアを要する小児の健康関連 QOL に与える影響

9月4日

澤柳 匠 (抄読)

Hong P, Maguire E, Purcell M, et al. Decision-making quality in parents considering
adenotonsillectomy or tympanostomy tube insertion for their children. JAMA Otolaryngology-
Head & Neck Surgery, 2017, 143(3): 260-266.

村本 美由希 (抄読)

Stern JA, Fraley RC, Jones JD, et al. Developmental process across the first two years of
parenthood: Stability and change in adult attachment style. Developmental Psychology, 2018,
54(5): 975-988.

中村 真由美 (研究発表)

小児慢性疾患患者の成人移行期支援外来における介入の効果：ランダム化比較試験

鈴木 征吾 (研究発表)

レスパイトケアが医療的ケアを要する小児の健康関連 QOL に与える影響

9月11日

大城 怜 (研究発表)

Posttraumatic growth among children of breast cancer survivors: Focusing on the
communication between parents and children about parental cancer

吉備 智史 (研究発表)

研究発表

福井 千絵 (研究発表)

長期介護施設に入院している認知症をもつ人の人生の最終段階における家族内の意見の相違と家族資源が家族介護者の複雑性悲嘆に与える影響

中嶋 祥平 (研究発表)

長期フォローアップ外来を受診する造血幹細胞移植を受けた患者と介護者の Quality of Life と情報ニーズ：多施設共同横断研究

9月18日

母性看護助産学・家族看護学合同カンファレンス

中西 愛海 (研究発表)

乳児の皮膚アセスメントツールの開発

菅原 千敬 (研究発表)

乳腺炎・乳房腫瘍発症から外科的処置に至るリスク要因 (仮)

JMDC データベースを使用した後ろ向きコホート研究

松永 百恵 (研究発表)

産科看護職員による外国人妊婦とそのパートナーの捉え方：国内横断観察研究

瀬戸口 舞嘉 (研究発表)

出産体験が育児自己効力感に与える影響：前向き観察研究

比佐 加奈子 (研究発表)

生殖可能年齢 (15-49 歳) の日本女性の貧血の実態と関連要因：健康診断データを用いた二次分析

上原 奈々 (研究発表)

10 代母親における祖母との関係がボンディングに与える影響：横断的観察研究

9月25日

小林 明日香 (研究発表)

Impact of nurses' beliefs about parental role on quality of life in children with cancer

村田 翔 (研究発表)

研究発表

江本 駿 (研究発表)

周期性嘔吐症候群患者が抱える不安と Quality of Life と不安の関連および媒介要因の特定に関する研究

中村 真由美 (研究発表)

小児慢性疾患患者の成人移行期支援外来における介入の効果：ランダム化比較試験

10月2日

澤柳 匠 (抄読)

Wijnberg-Williams B, Van de Wiel HBM, Kamps W, et al. Effects of communication styles on marital satisfaction and distress of parents of pediatric cancer patients: a prospective longitudinal study. *Psycho-Oncology*, 2015, 24: 106-112.

村本 美由希 (抄読)

Moreira H, Carona C, Silva N, et al. Exploring the link between maternal attachment-related anxiety and avoidance and mindful parenting: The mediating role of self-compassion. *Psychology and psychotherapy: Theory, Research and Practice*, 2016, 89: 369-384.

鈴木 征吾 (研究発表)

レスパイトケアが医療的ケアを要する小児の健康関連 QOL に与える影響

福井 千絵 (研究発表)

長期介護施設に入居している認知症をもつ人の人生の最終段階における家族内の意見の相違と家族資源が家族介護者の複雑性悲嘆に与える影響

11月6日

澤柳 匠 (抄読)

Alderfer MA, Navsaria N. Family functioning and posttraumatic stress disorder in adolescent survivors of childhood cancer. *Journal of Family Psychology*, 2009, 23(5): 717-725.

村本 美由希 (抄読)

Machkintosh K, Power K, Schwannauer M, et al. The relationships between self-compassion, attachment and interpersonal problems in clinical patients with mixed anxiety and depression and emotional distress. *Mindfulness*, 2018, 9: 961-971.

中嶋 祥平 (研究発表)

同種造血幹細胞移植後 1 年半以内における長期フォローアップ外来を受診する患者と介護者の Quality of Life と情報ニーズ：多施設共同横断研究

江本 駿 (研究発表)

周期性嘔吐症候群患者が抱える不安と Quality of Life と不安の関連および媒介要因の特定に関する研究

11月20日

上原 奈々 (研究発表)

The impact of the relationship between adolescent mothers and grandmothers on adolescent mothers' maternal bonding: A cross-sectional observational study

10 代母親における祖母との関係が児とのボンディングに与える影響：横断的観察研究

松永 百恵 (研究発表)

Recognition of the importance of partners in obstetrics nursing care for foreign perinatal women

外国人妊産婦への産科看護ケアにおけるパートナーの重要性に対する認識

11月27日

大城 怜 (研究発表)

Posttraumatic growth among children of breast cancer survivors: Focusing on the communication in the family about parental cancer

吉備 智史 (研究発表)

The impact of classmates' attitudes towards children with cancer on the quality of life of children with cancer; the intervention program for classmates and the school-reentry experience of children with cancer

12月4日

小林 明日香 (研究発表)

Impact of parent-nurse alliance on quality of life in children with cancer

澤柳 匠 (研究発表)

研究発表

村本 美由希 (研究発表)

妊婦のアタッチメントスタイルと産後の育児困難感の関連：セルフ・コンパッションの媒介役割

12月11日

澤柳 匠 (抄読)

Phillips-Salimi CR, Robb SL, Monahan PO, et al. Perceptions of communication, family adaptability, and cohesion: A comparison of adolescents newly diagnosed with cancer and their parents. *International Journal of Adolescent Medicine and Health*, 2014, 26(1): 19-26.

村本 美由希 (抄読)

Mark-Ribiczey N, Miklosi M, Szabo M. Maternal self-efficacy and role satisfaction: The mediating effect of cognitive emotion regulation. *Journal of Child & Family Studies*, 2016, 25: 189-197.

村田 翔 (研究発表)

Development of intervention program to reduce fatigue in children with cancer undergoing treatment in hospital

12月18日

松永 百恵 (修論進捗報告)

Recognition of the importance of partners in obstetrics nursing care for foreign perinatal women: A nationwide survey

外国人妊産婦への産科看護ケアにおけるパートナーの重要性に対する認識：全国調査
上原 奈々 (修論進捗報告)

Impact of mother-grandmother relationship on mother-to-infant bonding among adolescent mothers: A cross-sectional study

10代母親における祖母との関係が児とのボンディングに与える影響：横断的観察研究

12月25日

松永 百恵 (修論進捗報告)

Recognition of the importance of partners in obstetrics nursing care for foreign perinatal women: A nationwide survey

外国人妊産婦への産科看護ケアにおけるパートナーの重要性に対する認識：全国調査
上原 奈々 (修論進捗報告)

Impact of mother-grandmother relationship on mother-to-infant bonding among adolescent mothers: A cross-sectional study

10代母親における祖母との関係が児とのボンディングに与える影響：横断的観察研究

1月4日

上原 奈々 (研究発表)

10代母親における祖母との関係がボンディングに与える影響：横断的観察研究

松永 百恵 (研究発表)

外国人妊産婦への産科看護ケアにおけるパートナーの重要性に対する認識：全国調査

1月8日

上原 奈々 (研究発表)

10代母親における祖母との関係がボンディングに与える影響：横断的観察研究

松永 百恵 (研究発表)

外国人妊産婦への産科看護ケアにおけるパートナーの重要性に対する認識：全国調査

1月15日

上原 奈々 (研究発表)

10代母親における祖母との関係がボンディングに与える影響：横断的観察研究

松永 百恵 (研究発表)

外国人妊産婦への産科看護ケアにおけるパートナーの重要性に対する認識：全国調査

1月22日

上原 奈々 (研究発表)

10代母親における祖母との関係がボンディングに与える影響：横断的観察研究

松永 百恵 (研究発表)

外国人妊産婦への産科看護ケアにおけるパートナーの重要性に対する認識：全国調査

1月29日

今井 紗緒 (研究発表)

QOL of the spouse's returnee from overseas

村田 翔 (研究発表)

Development of intervention program to reduce fatigue in children with cancer undergoing treatment in hospital

2月12日

母性看護助産学・家族看護学合同カンファレンス

村本 美由希 (研究発表)

産後1か月の母親のセルフ・コンパッションと育児困難感の関連

—母であることに関する認知的評価と対処方略の媒介役割—

横山 萌莉 (研究発表)

保湿方法と生後6ヶ月でのおむつ皮膚炎との関連検討—前向き観察研究—

西田 梨花子 (研究発表)

妊婦の労働生産性に関する実態調査—マイナートラブルとの関連—

瀬戸 菜月 (研究発表)

否定的な出産体験に関する妊娠期・分娩期・産後の要因とその関係性

田島 真里子 (研究発表)

妊娠中の至適体重増加のための目標設定

2月19日

吉備 智史 (研究発表)

Exploring the paths from school reentry supports towards “Quality of School Life” among childhood cancer survivors: a cross-sectional study

小林 明日香 (研究発表)

Impact of Family-Centered Care on balance between care and work in parents with hospitalized children with cancer

3月5日

伊藤 美千代 (研究発表)

産業看護学体系化 集団・組織を対象とした産業看護診断の開発

3月19日

大城 怜 (研究発表)

乳がんに罹患した女性の子どもが経験する Posttraumatic Growth と家族内でのがんに関するコミュニケーションとの関連

村本 美由希 (研究発表)

産後1か月の母親のセルフ・コンパッションと育児困難感の関連
—育児上の困難に関する認知的評価と対処方略の媒介役割—

4. 家族看護学教室研究会

4-1. 家族看護学研究会（講師敬称略）

第 78 回 2017 年 5 月 19 日

キタ 幸子

（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 助教）

「パートナーからの暴力被害を受けた母子の理解と支援－研究者として何ができるか－」

第 79 回 2017 年 7 月 21 日

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 教員・教室員

（東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野）

「各発達段階（周産期～高齢期）で利用可能な福祉・制度と具体例」

第 80 回 2017 年 10 月 27 日

近藤 和子

（マザーリング&ライフマネジメント研究所所長、みんなの MITORI 研究会代表）

「死をタブーにしないケアを求めて－死ぬ覚悟・看取る勇気の勧め 幸福な最期とは？
－」

第 81 回 2017 年 12 月 15 日

藤原 紀子

（東京大学医科学研究所附属病院緩和医療科特任研究員・がん看護専門看護師）

「臨床試験に関わる臨床看護師の役割－Clinical research nursing の国内外の動向」

第 82 回 2018 年 6 月 22 日

西口 洋平

（一般社団法人がんサポーターズ協会代表理事）

「35 歳のパパ、がんになる」

第 83 回 2018 年 7 月 13 日

康永 秀生

(東京大学大学院医学系研究科公共医学専攻臨床疫学・経済学 教授)

「大規模医療データベースを用いた臨床疫学研究～家族研究への示唆を含めて～」

第 84 回 2018 年 12 月 7 日

松本 和史

(東京医療保健大学東が丘・立川看護学部 准教授)

「清潔ケアを画像分析で評価する」

第 85 回 2019 年 2 月 22 日

村上 慶子

(東北大学東北メディカル・メガバンク機構三世代コホート室 助教)

「三世代コホート調査の概要と今後の展望」

4-2. 家族ケア症例研究会

第 61 回 2017 年 4 月 21 日

上原 奈々（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程）

虐待・DV が疑われた家族に対する周産期のケア
～家族関係のアセスメントと地域への働きかけ～

第 62 回 2017 年 6 月 23 日

大野 真実（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 客員研究員）

摂食障害の診断で入院した思春期女子における家族関係の改善を目指した看護

第 63 回 2017 年 9 月 15 日

岡部 花枝（コマツ健康増進センタ）

認知機能が低下した社員の就業継続支援
～就労継続に向けた本人と家族の不安を軽減するには～

第 64 回 2017 年 12 月 22 日

柳瀬 裕貴（文京区役所 保健サービスセンター）

精神疾患を抱える在宅生活者への支援
～地域でその人らしい生活を支えるには～

第 65 回 2018 年 2 月 16 日

大渡 優子（東京大学医学部附属病院）

神経疾患を抱えた中学生とその家族における在宅移行を目指したケア

第 66 回 2018 年 4 月 13 日

澤柳 匠（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程）

自宅で生活する短腸症候群を抱える児の家族ケア
～IVH 管理と生活環境改善を目指した家族への支援～

第 67 回 2018 年 5 月 18 日

村本 美由希（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程）

妊婦健診を受けていない未婚の母親へのケア
～子どもにとっての安全な養育環境の模索～

第 68 回 2018 年 9 月 21 日

ブラブマンー未（聖路加国際病院緩和ケア病棟 看護師）

終末期の壮年女性患者が穏やかな最期を迎えるための家族への看護ケア

第 69 回 2018 年 10 月 19 日

下平 和代（大阪大学医学部附属病院）

高度治療を希望して転院してきた患者とその家族へのケア
～期待した治療効果が得られなかった場合に、入院を肯定的に捉えるには～

第 70 回 2018 年 11 月 9 日

津村 明美（静岡県立静岡がんセンター）

外来フォローアップ中の AYA 世代がん患者における自立/自律を支える家族への
アプローチ～親元を離れた進学にむけての成人移行期支援～

5. 院生自主勉強会

平成 29 年度

M1 カンファレンス

【目的】

- (1) 互いの研究内容に対しクリティークを行うことで、研究の質を高める
- (2) 修士論文を作成するにあたって、研究方法についての知識を学ぶ

【内容】

- (1) 各自の研究計画について発表し、意見交換を行う
- (2) 研究方法についての知識や情報を共有する
- (3) 周産期の問題や研究について情報共有する

【参加者】

上原 奈々、松永 百恵

【日程】

第1回 2017年5月30日

松永 百恵（修士課程1年）
「周産期と家族看護について」

第2回 2017年6月27日

上原 奈々（修士課程1年）
「アタッチメントについて」

第3回 2017年8月23日

松永 百恵、上原 奈々（修士課程1年）
「CENI インタビューについて」

第4回 2017年9月19日

松永 百恵（修士課程1年）
「周産期とレジリエンスについて」

第5回 2017年9月28日

松永 百恵（修士課程1年）

「在日外国人の母子保健」

第6回 2017年10月19日

上原 奈々（修士課程1年）

「周産期とソーシャルサポートについて」

第7回 2017年10月21日

上原 奈々（修士課程1年）

「10代母親の動向、制度について」

第8回 2017年2月2日

上原 奈々、松永 百恵（修士課程1年）

「各研究について（上原 奈々：10代母親のボンディングについて、
松永 百恵：在日外国人母親の文化変容とレジリエンス）」

M2 カンファレンス

【目的】

- (1) 互いの研究内容に対しクリティークを行うことで、研究の質を高める
- (2) 修士論文を作成するにあたって、分析方法や発表内容を検討する

【内容】

- (1) 各自の研究計画について発表し、意見交換を行う
- (2) 互いに発表練習を行い、用意した想定質問に回答する

【参加者】

吉備 智史、小林 明日香、林 真由、村田 翔

【日程】

第1回 2017年4月25日

小林 明日香（修士課程2年）

「小児がん患者の親の就労状況の変化とビリーフについて」

第2回 2017年5月16日

吉備 智史（修士課程2年）

「障害をもつ子どもへの態度尺度の開発について」

第3回 2017年7月4日

小林 明日香（修士課程2年）

「尺度開発における概念整理と、インタビューの方法と実践」

第4回 2017年10月24日

村田 翔（修士課程2年）

「小児がん患者の疲労感と家族機能について」

第5回 2017年11月28日

林 真由（修士課程2年）

「非配偶者間人工授精を選択した家族の家族形成プロセスについて」

第6回 2018年1月24日

吉備 智史、小林 明日香、林 真由、村田 翔（修士課程2年）

「修士論文発表会の練習と、想定質問の検討」

平成 30 年度

M1 カンファレンス

【目的】

- (1) 互いの研究内容に関してクリティークを行うことで、研究の内容を深める
- (2) 修士論文を作成するにあたり、研究方法について知識を得る

【内容】

- (1) 各自の研究計画に関して発表し、意見交換を行う
- (2) 研究方法についての知識や情報を共有する

【参加者】

澤柳 匠, 村本 美由希

【日程】

第 1 回 2018 年 4 月 26 日

澤柳 匠、村本 美由希（修士課程 1 年）

「文献検索方法（医学部図書館による個別セミナー）」

第 2 回 2018 年 7 月 10 日

澤柳 匠、村本 美由希（修士課程 1 年）

「第 1 回研究計画発表について 初回」

第 3 回 2018 年 7 月 13 日

澤柳 匠、村本 美由希（修士課程 1 年）

「第 1 回研究計画発表について 修正版」

第 4 回 2018 年 11 月 30 日

澤柳 匠、村本 美由希（修士課程 1 年）

「第 2 回研究計画発表について」

M2 カンファレンス

【目的】

(1) 互いの研究内容についてクリティークや情報共有を行うことで、研究の質を高める

【内容】

- (1) 各自の研究計画・内容について発表し、意見交換を行う
- (2) 研究方法についての知識や情報を共有する
- (3) 周産期の問題や研究について情報共有する

【参加者】

上原 奈々、松永 百恵

【日程】

第1回 2018年4月22日

上原 奈々、松永 百恵（修士課程2年）
「研究計画書について」

第2回 2018年6月27日

上原 奈々、松永 百恵（修士課程2年）
「研究実施における倫理的配慮について」

第3回 2018年9月17日

上原 奈々、松永 百恵（修士課程2年）
「修論の初稿について意見交換」

第4回 2018年11月18日

上原 奈々、松永 百恵（修士課程2年）
「分析方法について意見交換」

第5回 2019年1月22日

上原 奈々、松永 百恵（修士課程2年）
「修論発表の質疑応答対策・演習」

M1 対象統計勉強会

【目的】

- (1) 論文を読む上で必要となる、統計学の基礎を学ぶ
- (2) 修士論文を作成するにあたり、必要な統計学の基礎を習得する

【内容】

- (1) 博士課程学生による、統計学の講義を受ける
- (2) 講義とワークシートの内容理解のために、質問やディスカッションを行う

【参加者】

吉備 智史（講師）、澤柳 匠、村本 美由希

【日程】

第1回 2018年4月11日

「質的変数、量的変数、度数分布表、ヒストグラム」

第2回 2018年4月24日

「代表値、散布度、標準偏差」

第3回 2018年5月2日

「母集団、標本、無作為抽出、正規分布、標準正規分布」

第4回 2018年5月9日

「尺度、質問紙、クロンバック係数」

第5回 2018年5月16日

「点推定、区間推定、信頼区間、確率、自由度」

第6回 2018年5月21日

「帰無仮説、対立仮説、第I種の誤り、第II種の誤り」

第7回 2018年6月21日

「t検定、 χ^2 検定、ロジスティック回帰分析、相関分析」

第8回 2018年6月27日

「回帰分析」

第9回 2018年11月21日

「t検定と回帰分析」

6. 教育活動（担当講義・実習）

平成 29 年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
看護学概論Ⅰ：生きる ことを支える科学	総合科目一般 D 人間・環境一般 教養課程選択	2	1・2	S	木	16：50～18：35
つくろう！大学生の 生活の質（QOL）向上 プログラム	初年次ゼミナール 理科	2	1・2	S	月	14：55～16：40
看護学概論Ⅱ：社会 で活躍する看護プロ フェッショナル	総合科目一般 D 人間・環境一般 教養課程選択	2	1・2	A	木	16：50～18：35
健康総合科学概論	必修	1	2	A1・A2	月	10：25～12：10
ヘルスコミュニケー ション学	看護科学専修必修	1	3	S1	水	8：30～10：15
家族と健康	看護科学専修必修	2	3	A1	月	8：30～12：10
小児看護学Ⅰ	看護科学専修必修	2	3	A2	月	13：00～16：40
小児看護学実習Ⅰ	看護科学専修必修	1	3	W	火～月	9：00～16：00
小児看護学Ⅱ	看護学コース必修	1	4	A1	月～木	9：00～16：10
小児看護学実習Ⅱ	看護学コース必修	2	4	A1	月～金	8：00～15：00

※ 開講時期

S1	4月5日	～	6月2日	8週
S2	6月5日	～	7月31日	8週
A1	9月25日	～	11月17日	8週
A2	11月20日	～	1月26日	8週
W	1月29日	～	3月7日	5週

【大学院】

家族看護学特論Ⅰ 4月～6月

トランスレーショナルリサーチ看護学入門 7月24日～7月28日（医学集中実習）

家族看護学特論Ⅱ 12月～1月

平成 30 年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
看護学概論Ⅰ：生きることを支える科学	総合科目一般 D 人間・環境一般 教養課程選択	2	1・2	S	木	16：50～18：35
キャンパス改革を提言しよう—大学生の生活の質（QOL）を高めるために—	初年次ゼミナール 理科	2	1・2	S	水	14：55～16：40
看護学概論Ⅱ：社会で活躍する看護プロフェSSIONナル	総合科目一般 D 人間・環境一般 教養課程選択	2	1・2	A	木	16：50～18：35
健康総合科学概論	必修	1	2	A1・A2	月	10：25～12：10
ヘルスコミュニケーション学	看護科学専修必修	1	3	S1	水	8：30～10：15
家族と健康	看護科学専修必修	2	3	A1	月	8：30～12：10
小児看護学Ⅰ	看護科学専修必修	2	3	A2	月	13：00～16：40
小児看護学実習Ⅰ	看護科学専修必修	1	3	W	火～月	9：00～16：00
小児看護学Ⅱ	看護科学専修必修	2	4	S2	木	13：00～16：40
小児看護学実習Ⅱ	看護科学専修必修	1	4	A1	月～金	8：00～15：00
統合実践実習	看護科学専修必修	1	4	A1	月～金	8：00～15：00

※ 開講時期

S1	4月5日	～	6月1日	8週
S2	6月4日	～	7月30日	8週
A1	9月25日	～	11月16日	8週
A2	11月19日	～	1月25日	8週
W	1月28日	～	3月7日	5週

【大学院】

家族看護学特論Ⅰ 4月～6月

トランスレーショナルリサーチ看護学入門 7月23日～7月27日（医学集中実習）

家族看護学特論Ⅱ 11月～2月

7. 教室の沿革

- 1992.04.10 東京大学医学部保健学科は、学科名称を健康科学・看護学科に改称し、東京大学医学部健康科学・看護学科家族看護学講座が新設される。
- 1992.10.01 杉下知子氏が本講座の教授として発令される。
- 1993.05 石垣和子氏が本講座の助教授として発令される。
- 1997.03.31 石垣和子助教授が退官。
- 2002.04.01 上別府圭子氏が本教室の助教授として発令される。
- 2003.03.31 杉下知子教授が退官。
- 2003.04.01 上別府圭子助教授が教室主任を務める。
- 2010.04.01 職名変更により上別府圭子助教授が准教授となる。
- 2011.04.01 上別府圭子准教授が健康総合科学科教育委員長（任期1年）として就任される
池田真理氏が本教室の助教として発令される。
- 2011.08.01 佐藤伊織氏が本教室の助教として発令される。
- 2012.04.01 上別府圭子准教授が健康総合科学科教育委員長（任期1年）として就任される
- 2012.04.12 上別府圭子准教授を代表としてQOL研究センターが開設される。
- 2012.12.01 上別府圭子准教授が本教室の教授として発令される。
- 2013.04.01 上別府圭子教授が健康科学・看護学専攻 専攻長（任期2年）として就任される。
福澤利江子氏が本教室の助教として発令される。
修士課程に5名が入学，2名が復学．博士課程に2名が進学。
- 2013.05.25 平成25年度家族看護学分野スタッフ会議を開催。
- 2014.03.24～25 学部卒論生1名が卒業，修士課程4名，博士課程2名が修了。
- 2014.03.31 池田真理助教が看護管理学分野に異動。
- 2014.04.01 修士課程に5名が入学，2名が復学．博士課程に3名が進学。
- 2014.06.27 平成26年度家族看護学分野スタッフ会議を開催。
- 2014.07.01 網谷レイチェル・マリー氏が本教室の助教として発令される。
- 2014.11.05 上別府圭子教授の再任が医学部代議員会で承認される。
- 2015.03.24 修士課程6名，博士課程2名が修了。
- 2015.03.31 福澤利江子助教が退任。
- 2015.04.01 キタ幸子氏が本教室の助教として発令される。
修士課程に1名（梅下かおり）が復学．博士課程に1名（戸部浩美）が入学，2名（江本駿，高梨志帆）が進学。
上別府圭子教授が東京大学学生相談ネットワーク本部企画室長（任期2年）

- として就任される
- 2015.06.22 平成 27 年度家族看護学分野スタッフ会議を開催.
- 2015.06.30 網谷レイチェル・マリー助教が退任.
- 2015.07.01 佐藤伊織助教が本教室の講師として発令される.
副島堯史氏が本教室の助教として発令される.
- 2016.03.24～25 学部卒論生 1 名（出口美咲）が卒業. 修士課程 6 名（今井紗緒, 小石澤素子, 鈴木征吾, 中嶋祥平, 中村真由美, 福井千絵）, 博士課程 2 名（末次美子, 瀬戸山有美）が修了.
- 2016.04.01 修士課程に 3 名（小林明日香, 林真由, 村田翔）が入学, 1 名（吉備智史）が復学. 博士課程に 5 名（今井紗緒, 鈴木征吾, 中嶋祥平, 中村真由美, 福井千絵）が進学.
- 2016.05.23 平成 28 年度家族看護学分野スタッフ会議を開催.
- 2017.03.23～24 学部卒論生 2 名（田尾洵菜, 高石宏和）が卒業. 修士課程 2 名（梅下かおり, 大城怜）, 博士課程 1 名（目麻里子）が修了.
- 2017.04.01 上別府圭子教授が健康科学・看護学専攻 専攻長（任期 2 年）として就任される.
修士課程に 2 名（上原奈々, 松永百恵）が入学. 博士課程に 1 名（大城怜）, が進学. 目麻里子博士研究員が着任.
- 2017.04.28 平成 29 年度家族看護学分野スタッフ会議を開催.
- 2018.03.22～23 学部卒論生 1 名（高橋梨沙）が卒業. 修士課程 4 名（吉備智史, 小林明日香, 林真由, 村田翔）, 博士課程 1 名（戸部浩美）が修了.
- 2018.04.01 修士課程に 2 名（澤柳匠, 村本美由希）が入学. 博士課程に 3 名（小林明日香, 村田翔, 吉備智史）が進学.
- 2018.05.01 目麻里子博士研究員が退任. 戸部浩美博士研究員が着任.
- 2018.04.27 平成 30 年度家族看護学分野スタッフ会議を開催.
- 2018.09.01 戸部浩美博士研究員が退任し、特任助教として着任.
- 2019.03.25～26 修士課程 2 名（上原奈々, 松永百恵）, 博士課程 5 名（江本駿, 鈴木征吾, 中嶋祥平, 中村真由美, 福井千絵）が修了.

資料（卒論・修論・博論）

卒業論文内容要旨

論文題目：患児の死を経験した看護師の思いと対処行動に関する質的研究

指導教員：上別府圭子教授 佐藤伊織講師

東京大学医学部健康総合科学科

平成 28 年度進学

氏名 高橋梨沙

緒言

患者の逝去後、看護師は一般的に役割不全感、自信喪失感、燃え尽きといった様々な思いを抱きやすいとされているが、特に子どもの死に直面することは大人の死に直面する以上に看護師にとってストレスになり得ることが先行研究で明らかになっている。そのストレスに対し周囲からのサポートも必要だが、それ以上に看護師が自分なりの対処行動をとることによって看護師としての成長につながられることが報告されている。患児の死がストレスになり得ること、そしてそのストレスに対して対処行動をとることの重要性は指摘されているものの、具体的な看護師の思いと対処行動双方に言及している先行研究は非常に少ない。本研究は患児の死を経験した看護師の思いと対処行動に関し、先行研究をまとめるとともに、新たな知見を得る目的で実施した。

方法

文献検討及びインタビュー調査を行った。文献検討は医学中央雑誌 Web 版を用いて文献検索を行い、対象となった文献に記述された「思い」と「対処行動」に関する内容の再カテゴリー化を行った。インタビューは患児の死を経験したことのある看護師を対象に半構造化面接を行った。「思い」に関しては分析対象と判断した語りを全てコード化し、類似するコードをまとめていくつかのグループを作成し、グループの関連を示す図を作成した(図 2)。「対処行動」、「求めるサポート」に関しては、語りから生成したコードをもとに、サブカテゴリーとカテゴリーを生成した。次に、作成した図をもとに「思い」のグループを系統別に分類してタイプとし、それぞれの「タイプ」に特徴的な対処行動を結びつけた。

結果

文献検討の結果、17 件の文献が分析の対象となった。「思い」に関しては 16 のカテゴリー、「対処行動」に関しては 9 のカテゴリーに分類された。さらに、先行研究では「思い」と「対処行動」の関連に関する記述がないこと、看護師の「求めるサポート」に関する記述が少ないことから、その 2 点に関し新たに知見を得ることを視野に入れてインタビューをおこなった。インタビューの研究対象者は 20 代または 30 代の男性 2 名、女性 4 名の計 6 名で、インタビューの平均時間は 69.6 分であった。「思い」に関しては、対象者の語りから 167 のコードが生成され、25 のグループに分類された。そのうちの 5 つのグループは特に特徴的なものとして中核グループと命名した。インタビューによって【ショックや悲しみはない】、【投げやりな気持ち】、【気持ちを抑えきれない】という新たに 3 つの「思い」の内容が得られた。「対処行動」に関しては 61 のコードから 9 のカテゴリーが生成され、【休む】、【泣く】、【趣味のことをする】の新しい対処行動の内容が得ら

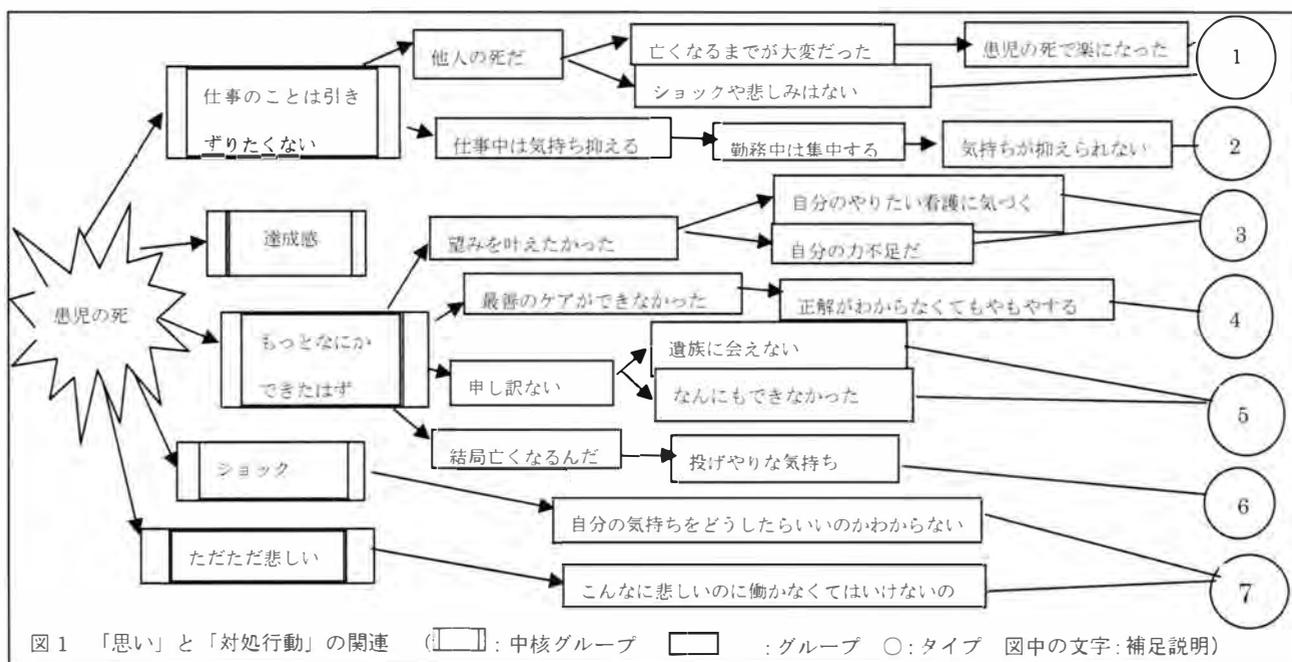
れた。「求めるサポート」に関しては16コードから3の категорияが生成された。さらに「思い」は7の「タイプ」に分類され、それぞれのタイプに特徴的な対処行動が存在することがわかった。

考察

看護師は患児の死を経験すると様々な「思い」を抱くが、その「思い」を実際に語れるかは、語る場にも影響されるため、看護師が素直に自分の思いを話せる場を設けるとともに、語られた「思い」の妥当性を考慮する必要がある。患児の死を経験した後の対処行動としては、「問題焦点型」の対処行動は実践可能性が低く、対象者の多くが【話す】といった「社会支援検索型」の対処行動をとっていた。また、文献検討では得られなかった【休む】、【趣味のことにする】などの「気晴らし型」に該当する語りがインタビューによって得られ、日頃から自分がどのようなことでストレスを感じているのかについて知っておくのもセルフケアの上で重要であることが示唆された。看護師の求めるサポートは、【話せる場】など「対処行動」で語られた内容と一致したため、個々の看護師が自ら対処行動をとるうえで必要なものであると考えられる。さらに「思い」と「対処行動」の関連に関して、一個人が一つのタイプに固定されるわけではなく、患児の死後に抱く思いによって異なり、またその思いはその時の経験年数や患児との関わりの深さなどの要因で変化しうる。タイプに合った適切な対処行動は看護師の精神的負担を軽減させるのに効果的である一方、異なるタイプに特徴的な対処行動をとった場合には逆効果となる可能性もある。また、【達成感】など、看護師の「思い」であると同時に、思うこと自体が一つの対処行動となっていると考えることができ、看護師が患児の死後にその人なりの達成感を感じられるようなサポートや教育も必要であると考えられる。

結論

患児の死を経験した看護師の思いと対処行動に関する先行研究をまとめ、さらにインタビューを実施することで新たな思いと具体的な対処行動の内容を提示することができた。また、抱いた思いと対処行動に関連がある可能性を見出し、7つのタイプに分類した。本研究によって、看護師が自分の思いのタイプに応じた適切な対処行動やサポートを得ることの必要性が示唆された。



Development of the Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps Scale: Japanese Version
日本語版 Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps scale の開発

41146007 Satoshi Kibi

吉備 智史

Tutor: Prof. K. Kamibeppu

指導教員: 上別府 圭子 教授

Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,

Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野

Admission in April, 2014

平成 26 年 4 月入学

Objective: This paper reports the development of the Japanese version of the Chedoke-McMaster Attitudes Towards Children with Handicaps scale (CATCH-J), and tests of psychometric properties including validity and reliability.

Methods: The initial version of CATCH-J, developed through translation and back-translation, had content validity and face validity as confirmed through interviews and pilot-testing. In the main study, 4th–6th grade children without physical disabilities completed CATCH-J (a higher score indicates a more positive attitude), the Rosenberg Self-Esteem Scale (RSES) and the demographic questions rating to their contact with children with physical disabilities (CPDs). **Results:** Data from 215 children were analyzed. First, factorial validity and structural validity were examined. Although a two-factor model was derived from exploratory factor analysis, the theoretical three-factor model showed better fit indices than the two-factor model. Thus the three-factor model was adopted for subsequent analyses. Known-groups validity analyses confirmed that, as predicted, CATCH-J score was higher in girls than boys, those who had contact with CPDs than those who did not, and those who had obtained information about CPDs from talking with someone than those who had not. CATCH-J score was significantly correlated to RSES score, therefore showing concurrent validity. The multitrait scaling analysis showed the moderate to high scaling success, indicating convergent and discriminant validity. Cronbach's α and the intraclass correlation coefficient of CATCH-J were relatively high, which indicates good internal consistency and test-retest reliability.

Conclusion: This study confirms the psychometric properties of CATCH-J, which can now be used to measure children's attitudes towards CPDs.

Key words: Attitudes, Children with Disabilities, Mainstream Education, Scale Development, Physical Handicaps

Health-related quality of life in parents with hospitalized children with cancer:
Focus on changes in working conditions and beliefs
入院中の小児がん患児の親における健康関連 quality of life:
就労状況の変化とビリーフに着目して

41166007 Asuka Kobayashi
小林 明日香

Tutor: Prof. K. Kamibeppu
指導教員: 上別府 圭子 教授

Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo
東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野

Admission in April, 2016
平成 28 年 4 月入学

Objectives: The study aimed to (1) describe health-related quality of life (HRQOL) of parents who have hospitalized children with cancer in terms of changes in working conditions (CWC) (employment status, working hours, and work contents) owing to children's cancer, at two to three months since children's admission and (2) clarify the relationship between HRQOL and beliefs related to CWC. **Method:** A cross-sectional study was employed from September through December 2017 at three hospitals. HRQOL was evaluated using by SF-36v2 standard version. The CWC were assessed in terms of the changes in employment status, working hours, and/or work contents. Beliefs were evaluated using the original items. The mean scores of each summary score of SF-36v2 were compared between four groups classified in terms of CWC. Linear mixed model analysis was performed to calculate the coefficients for each summary score by beliefs. **Results:** Data from 9 mothers and 6 fathers were analyzed. The "quit/leave" group had the lowest mean physical (PCS) and role/social component scores (RCS), whereas the "arranged" group had the lowest mental component scores (MCS). It was possible that the belief "I can prioritize my work over caring for my child if necessary" was positively related to MCS, but negatively related to RCS. **Conclusion:** CWC may lower HRQOL in parents who have hospitalized children with cancer. Encouragement for maintaining their working conditions would help to improve parental HRQOL. Beliefs were also related to parental HRQOL. Nurses should understand the complex combination of parental working conditions and their beliefs. **Key words:** Child, Neoplasms, Parents, Quality of Life, Work-Life Balance

非配偶者間人工授精を選択した家族における家族形成プロセスに関する質的研究
医療従事者・専門家に対するインタビュー調査

A qualitative study regarding family formation process among family who chose artificial insemination by donor
-interviews for health care professionals and supporters

41160018 林 真由
Mayu Hayashi

指導教員: 上別府 圭子 教授
Tutor: Prof. K. Kamibeppu

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野
Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

平成 28 年 4 月入学
Admission in April, 2016

目的: 本研究の目的は、非配偶者間人工授精(Artificial Insemination by Donor 以下 AID)に関する知識と経験を豊富に有する医療従事者及び専門家が認識する AID によって児が出生した家族における家族形成のプロセスを明らかにすることである。

方法: AID によって児が出生した家族の特徴や家族形成プロセスに関して、AID の専門的知識・経験を有する医療従事者または専門家に対して、平成 29 年 7 月～11 月に 50～60 分程度の半構造化面接を行った。分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた継続的比較分析を行った。

結果: 8 名の医療従事者及び専門家へのインタビューにより、48 の概念、24 のサブカテゴリー、4 のカテゴリー、1 のコアカテゴリーが生成された。AID によって児が出生した家族は【無精子症という事実から受ける衝撃】から始まり、AID 治療を経て妊娠をし、児が出生するプロセスにおいて【不安を抱えながらも待望の子どもへの喜びと希望】を抱く。【子どもの成長に伴って生じる喜びや迷い】を感じながら子育てを行い、出自の告知をめぐって【出自を知った子どもの心の叫びと受け止める親の覚悟】を有することが家族の形成プロセスの一端として明らかになった。このようなプロセスを通して見えてきたのは、{お互いの存在に向き合い、もがきながら成長する家族}の姿があった。

結論: 本研究により、AID によって児が出生した家族において、一方の親と遺伝的なつながりがない事実にも苦悩や迷いを抱えながらも、お互いの存在に向き合って成長する家族プロセスが明らかになった。

Key words: artificial insemination by donor, family formation, modified grounded theory approach, process, telling

Relationship between Fatigue and Family Functioning in Children with Cancer undergoing
Treatment in the Hospital: A Cross-Sectional Study
入院治療中の小児がん患者における疲労感と家族機能の関連:横断的観察研究

41166021 Sho Murata
村田 翔

Tutor: Prof. K. Kamibeppu
指導教員: 上別府 圭子 教授

Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo
東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野

Admission in April, 2016
平成 28 年 4 月入学

Objective: This study aimed to clarify the relationship between fatigue and family functioning among children with cancer undergoing treatment in hospitals. **Methods:** This cross-sectional study included children with cancer who were treated in hospitals and their families between September and December 2017. Data were collected from self-report questionnaires, medical records, and actigraphs. PedsQL Multidimensional Fatigue Scale (PedsQL-MFS) and Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at Kwansei Gakuin IV-16 (FACESKG) were used to evaluate fatigue and family functioning, respectively. Spearman's rank correlation coefficients between PedsQL-MFS total score, subscale scores, and FACESKG cohesion and adaptability scores were calculated. **Results:** Eleven children with cancer and their families completed the questionnaires. Mean patient age was 9.8 years, and the most common diagnosis was acute lymphoblastic leukemia ($n = 6, 55\%$). The most common type of cohesion was enmeshed ($n = 9, 82\%$), and the most common type of adaptability was flexible ($n = 9, 82\%$). Correlation coefficients between FACESKG cohesion and PedsQL-MFS total scores ($\rho = .38, p = .247$), FACESKG cohesion and general fatigue scores ($\rho = .38, p = .248$), FACESKG cohesion and cognitive fatigue scores ($\rho = .47, p = .144$), and FACESKG adaptability score and PedsQL-MFS sleep/rest fatigue score ($\rho = -.32, p = .339$) indicated moderate effect size. **Conclusion:** High family cohesion may reduce fatigue among children with cancer undergoing treatment in hospitals. Nurses should support these patients to enhance emotional bonds with their families.

Key words: adaptability, children with cancer, cohesion, family functioning, fatigue

論文の内容の要旨

論文題目 育児中の親のレジリエンスを高めるプログラムの効果

—怒りの情動に焦点を当てて—：ランダム化比較試験

氏名 戸部 浩美

1. 背景

<育児ストレスとネガティブなストレス情動>

日本における育児ストレス研究は、1970年代以来、「育児不安」を主題としてきたが、これには育児以外のストレス要因および様々なネガティブなストレス情動が含まれる。子どもの成長に伴って反抗的な行動が増えるにつれ、親は不安よりもイライラや怒りをより強く頻繁に感じる。イライラや怒りは暴言や体罰などの不適切な養育につながりやすく、身体的・精神的・社会的に長期的で深刻な悪影響を子どもに及ぼし、親自身にも害となることから、ストレスやネガティブなストレス情動に対してより適切に対処できるよう支援し、不適切な養育を防ぐことにより、母子、さらには家族のメンタルヘルスを予防・改善することは喫緊の課題である。

<レジリエンス>

近年、ストレスへの対処として、「非常にストレスフルな出来事を経験したり、困難な状況になっても精神的健康や社会的適応行動を維持する、あるいは回復する心理的特性」を意味するレジリエンスに注目が寄せられている。初期のレジリエンス研究では、虐待や戦争、災害など、深刻なライフイベントを経験した対象が主であったが、近年では、日常生活におけるレジリエンスが果たす役割について検討することも有意義であるといわれている。また、レジリエンスは一部の者が持つ特別な特性ではなく、多くの人にとって促進可能なものとされ、対象の必要に応じた様々な介入が行なわれている。

<育児中の親のレジリエンス>

育児中の親は、daily hassles（日常的な苛立ち事）を日々蓄積しており、その状況に適応し、精神的健康を維持するためのレジリエンスを養うことは、親子双方にとって重要である。親のレジリエンスに関する研究は今後重要な焦点であると言われており、子どもに障害や疾患がある場合など、より困難な育児状況にある親のレジリエンスに関する研究が増えている。しかし、育児そのものがストレスフルであり、簡便な介入によるポピュレーションアプローチが虐待予防の観

点からも重要であるといわれるが、日本において一般的な親を対象にしたレジリエンスを高める介入研究はまだ行なわれていない。

<認知行動療法をベースにした親のレジリエンスを高めるプログラム>

多くのレジリエンス介入が認知行動療法をベースにしている。本研究でも、ABC理論を応用して、出来事 (A:Activating Event) に対する認知・信念 (B:Belief) をより建設的・合理的なものに変えることで、結果 (C:Consequence) である感情や行動の変容を促すこととした。母親が、生活上で感じる様々なストレス要因に対する認知を変え、イライラや怒りなどのネガティブなストレス情動を軽減し、不適切な表出を避けられるよう、感情調整を強化することによりレジリエンスを高めるためのプログラムを開発した。また、母親にとって、子どもの反抗的態度に次いで高いストレス要因である父親との関係性やコミュニケーション不足に注目し、それらを改善するための内容をプログラムに取り入れ、母親が学んだことを父親と共有することも課題に組み入れた。

<研究目的>

本研究の目的は、3～6歳の子どもを育てる母親が、生活上感じるストレスや、イライラや怒りなどのネガティブなストレス情動により適切に対処するための、感情調整に焦点を当てたレジリエンスを高めるプログラムを受講することより、主要評価項目である介入2か月後の母親のレジリエンスが高まるかを、ランダム化比較試験によって検証することである。父親についても、母親からの間接的な影響による効果について母親と同様の項目で群間比較する。

2. 方法

<調査期間・対象・ランダム化>

調査は、2017年1月～10月に実施された。対象は、3～6歳の子どもを持つ母親と父親で、母親はプログラムあるいは茶話会に参加予定の者、父親は質問紙回答可能な者とした。日本語の会話と読み書きが困難な者および精神疾患の診断を受けている者を除外した。123組の対象者が、介入群(62組)と対照群(61組)に無作為に割り付けられた。

<介入>

介入群は、6～14名を1グループとして、120分のセッションを2週間おきに4回受講し、課題として家庭での実践に取り組み、次のセッションで報告した。ネガティブな情動の機序や対処法、特に、その受容や承認、および適切な表出法を学んだ。子どもの反抗的な態度や行動に対する否定的・非建設的な認知に気づき、合理的で肯定的な認知に変え、同じ状況にあっても、長期的・

客観的に判断してより適切な行動が取れるように訓練した。自身や子どもの強みに焦点を当て、適正に評価し、肯定的な言葉かけを増やすことにより互いの自尊心を高めた。

対照群へは、各地で実施されている茶話会を採用した。MCG (Mother Child Group) とも呼ばれ、自分の時間を持ち、他の母親と交流することが疎外感・孤立感の軽減につながるといわれている。

<調査時期と調査項目>

母親と父親に対して、介入前、介入直後、介入 2 か月後、インターネットアンケートサービスを利用し、電子メールにて自記式質問紙への回答を依頼した。主要評価項目は、介入後 2 か月後の母親のレジリエンスとした。副次評価項目は、介入後の母親のレジリエンス、介入直後および 2 か月後の、怒り特性、子どもおよび伴侶に対する怒り表出・抑制・制御、自尊心、家族機能、子どもの行動に対する認知、育児感情、夫婦コミュニケーション態度、問題焦点対処方略とした。父親についても母親と同様の項目について尋ねた。

<解析>

統計解析には IBM SPSS Statistics Version 22.0 for Windows を用い、有意水準は 0.05 とした。2 群比較に関して、属性および特性の比較には、 t 検定・Fisher 検定のいずれかを用い、介入後および介入 2 か月後のスコアの群間比較の際には、介入前のスコアを共変量とし、ANCOVA (Analysis of Covariance) で解析した。サブグループ解析および探索的解析を行った。

3. 結果

<プログラム評価>

介入群のプログラム参加について、参加継続者 54 名中、全 4 回参加した者は 9 割であった。介入満足度について、全員が「とてもよかった」「よかった」と回答した。8 割が市町村で希望者に提供するとよいと回答していた。約半数が内容の半分以上を父親と共有していた。

<各アウトカムにおける介入効果>

主要評価項目である介入 2 か月後の母親のレジリエンスにおいて、介入群は対照群と比較して有意に高くなっていた。母親において、副次評価項目である、介入直後のレジリエンス、介入直後および 2 か月後の、自尊心、子どもおよび伴侶に対する怒り制御、家族機能、子どもの行動に対する肯定的認知、問題焦点対処方略が有意に高くなり、介入 2 か月後の子どもの行動に対する被害的認知、および否定的認知が有意に低くなっていた。父親については、いずれの時点のいずれの項目においても群間差がみられなかった。

4. 考察

本研究の介入は、主要評価項目および副次評価項目において、母親に対して一定の効果がみられた。その考察として、第一に、適切な養育行動を学ぶと共に、母親にとって対処困難なネガティブな感情の機序や対処法を学び、訓練したことにより、感情調整が強化され、レジリエンスが高まったと考えられる。第二に、自身や子どもの強みに目を向けて適切に評価することで、現在の状況に一喜一憂せず長期的・客観的な視点で肯定的にとらえられるようになったと考えられる。第三に、保育サービスや育児相談などによる一時的なストレス軽減ではなく、ストレス要因に対する認知に積極的・根本的に働きかけ、母親の主體的な認知変容を促した点が効果をもたらした可能性がある。限界として、介入内容と効果の因果関係が明らかでない点、プログラムを提供したファシリテーターが一人であった点、2か月という短期の持続効果の検証にとどまった点が挙げられる。今後は、受講者の意見を質的に検討し、効果に寄与した点や改善点を明らかにした上で、マニュアルを作成し、より多くのファシリテーターが、統一されたプログラムを提供できるよう訓練し、より長期の効果を検証する必要がある。

5. 結論

育児中の親のレジリエンスを高めるプログラムは、母親において、主要評価項目である介入2か月後のレジリエンス、副次評価項目である、介入直後のレジリエンス、介入直後および2か月後の自尊心、子どもおよび伴侶に対する怒り制御、家族機能、子どもの行動に対する肯定的認知、問題焦点対処方略、介入2か月後の子どもの行動に対する被害的および否定的認知に一定の介入効果をもたらした。父親については、いずれの項目においても群間差はみられなかった。

本研究は、親の認知面に働きかけ、親が主體的にストレス要因やネガティブ情動に対処できるように訓練する、新しい形の子育て支援の実践を検証したことに意義がある。簡便なプログラムにより、母親の認知や行動の変容に一定の効果が示されたことは、今後の地域における育児支援策を検討する上で意義深い示唆を与えたといえる。

10代母親における祖母との関係性が児とのボンディングに与える影響：横断的観察研究
Impact of mother-grandmother relationship on mother-to-infant bonding among adolescent mothers: A cross-sectional study

41176004 上原 奈々

Nana Uehara

指導教員：上別府 圭子 教授

Supervisor: Prof. K. Kamibeppu

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野
Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

平成 29 年 4 月入学

Admission in April, 2017

目的：10代母親と祖母が認識する双方の関係性が児とのボンディング障害に与える影響を明らかにする。**方法**：2018年8月から11月に産後1か月健診に受診した10代母親と児の祖母を対象に、自記式質問紙を用いた横断的観察研究を行った。10代母親から児とのボンディング障害は赤ちゃんへの気持ち質問票（Mother to Infant Bonding Scale: MIBS-J）を使用し、10代母親と祖母の関係性については、10代母親には親-青年関係尺度、祖母には祖母-娘尺度を用いた。10代母親と祖母の関係性とボンディング障害の関連を検討するため、MIBS-J<怒りと拒絶>得点、親-青年関係尺度 <親への親和志向の因子><親からの客観的独立志向の因子>得点、祖母-娘尺度<娘との親密感・満足感><娘との直接接触とサポート>得点における相関分析、日本版エジンバラ産後うつ病自己評価票得点（Edinburgh Postnatal Depression Scale）を調整変数とした偏相関分析を行なった。**結果**：10代母親23名と祖母19名のデータを分析した。MIBS-J<怒りと拒絶>は平均1.7点（SD 1.5）であった。10代母親の<親への親和志向の因子>はMIBS-J<怒りと拒絶>と有意な関連を示した（相関分析 $r = .53, p = .02$; 偏相関分析 $r = .55; p = .02$ ）。**結論**：10代母親と祖母との関係性において、祖母への親和志向が高い10代母親では、児に対する怒りの感情や拒絶の感情が高まる可能性が示唆された。10代母親の親和志向の項目が祖母に対して従順的・依存的であることを示していた可能性があり、母親として主体的に児と関わるのが難しく、母子関係を築くことに困難を感じているかもしれない。この結果より、10代母親の児とのボンディング障害を予防するために、祖母との適度な距離を保てるような関係性を促し、祖母だけでなく専門職やピアサポートを含めたサポート体制を構築する必要性が示唆された。

Key words: Adolescent mother, Mother-grandmother relationship, Mother-to-infant bonding, Perinatal

外国人妊産婦への産科看護ケアにおけるパートナーの重要性に対する認識：全国調査
Recognition of the importance of partners in obstetrics nursing care for foreign perinatal women:
A nationwide survey

41176022 松永 百恵
Momoe Matsunaga

指導教員：上別府 圭子 教授
Supervisor: Prof. K. Kamibeppu

東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野
Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

平成 29 年 4 月入学
Admission in April, 2017

目的：外国人妊産婦への産科看護ケアにおけるパートナーの重要性に対する認識の実態を把握することとした。**方法：**層別無作為抽出された分娩施設を有する医療機関 125 施設における産科看護管理者と産科看護職員を対象に、無記名自記式質問紙による横断研究を行った。施設の属性、産科看護職員の属性、日本語版家族看護態度調査票 (Japanese version of Families Importance in Nursing Care-Nurses' Attitudes: JFINC-NA) を改変したものをを用いて日本人・外国人妊産婦に対する認識を各々調査した。外国人妊産婦のケア経験者を対象に、日本人・外国人妊産婦の JFINC-NA の合計得点と下位尺度の得点を比較した。次に、施設・職員属性別に、日本人・外国人妊産婦の JFINC-NA の合計得点を比較した。**結果：**24 施設 432 名 (回収率 71.6%) から回答が得られ、外国人妊産婦のケア経験者のうち 360 名 (有効回答率 61.3%) を分析対象とした。外国人妊産婦の JFINC-NA 合計得点は、日本人妊産婦の JFINC-NA 合計得点に比べ、合計得点 (効果量 $d=0.50$)、各下位尺度得点 Fam-RNC ($d=0.44$)、Fam-CP ($d=0.40$)、Fam-B ($d=0.28$)、Fam-OR ($d=0.41$) とともに有意に高かった。准看護師群と職歴 1 年目群は、日本人妊産婦と外国人妊産婦 JFINC-NA の合計得点に有意な差はなかった。**結論：**産科看護職員は、外国人妊産婦への産科看護ケアにおいてパートナーの重要性をより高く認識していた。外国人妊産婦とパートナーを含めた産科看護ケアの充実には、職種と産科看護経験年数の違いを考慮し、卒後継続教育で家族看護等の教育を提供することが必要である。

Key Words : cross-sectional studies, domestic partners, family nursing, foreigners, pregnant women

論文の内容の要旨

論文題目 周期性嘔吐症候群患者が抱える不安と Quality of Life の関係
およびその関連要因に関する研究

氏名 江本 駿

背景

周期性嘔吐症候群は、反復性の自然軽快する嘔吐エピソード・定期的な発作の発症・発作のない時期の正常状態の3つを特徴とする希少・難治性の機能的消化器疾患である。患者は嘔吐症状などが起こる発作期と、正常な間欠期の2つの期間を長期に渡って繰り返し経験するが、原因は特定されておらず、治療も対処療法が中心となる。間欠期では次の発作を誘発するトリガーの存在が指摘されており、心理的なストレスは発作のトリガーとして最も大きなものである。中でも、発作に対する不安はそれ自体がストレスとなって次の発作を誘引する可能性が示唆されている。また、先行研究では児童期・思春期の周期性嘔吐症候群の患者は、同年代の健康な児や他の機能的消化器疾患の児と比べて HRQOL

(Health Related Quality of Life) の低いことが指摘されているほか、不安の強さが HRQOL の低下に大きく寄与している可能性が示唆されている。不安は次の発作のトリガーになると考えられることから不安軽減に向けたケアも重要である一方、根治療法のない中では次の発作が起こる可能性が高いことから不安の解消も困難であると考えられるため、不安があっても HRQOL に与える影響を緩衝するような方策が必要である。本研究では、不安の内容と不安が増悪する時期を同定し、不安と HRQOL に関連する要因を探索することで、適切な時期に効果的な支援ができるよう示唆を得ることを目指す。

目的と意義

本論文の目的は、①周期性嘔吐症候群患者が1エピソード中に感じる発作に関する不安の内容・程度・時期による変遷を記述すること、②児童期・思春期の周期性嘔吐症候群患者の HRQOL の実態を明らかにすること、および③不安と HRQOL に関連する要因を同定し、その要因がどのように影響するか明らかにすることの3点とした。①に対して研究1、②③に対して研究2を実施し、①から③を明らかにすることによって周期性嘔吐症患者の HRQOL を維持・向上させるための具体的な示唆を得ることができるほか、間欠期において最も不安が増強している時期に合わせた適切な支援について示唆を得ることができる考えた。

研究 1

研究 1 は、周期性嘔吐症候群患者の周期内での経験を記述することで、患者が抱く不安の内容・程度・時期による変遷、および不安と HRQOL に関連しうる要因を推定することを目的に実施した。8 歳以上の周期性嘔吐症候群・類縁疾患と診断されている患者または寛解している患者とその保護者を対象として、周期性嘔吐症候群の患者会および機縁法にて参加者を募り、半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。発症時からの症状や治療の経験、典型的な発作の 1 エピソード中の不安の内容、時期による程度の変化、不安軽減の方法を尋ねた。インタビューは録音し、逐語録を作成したあと、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。

13 名の参加者（男性 5 名、女性 8 名）にインタビューを実施した。インタビューの結果、患者は発作自体に恐怖感情を持っており、中でも特に嘔吐症状、腹痛・偏頭痛による痛み
の症状、嗜眠症状に恐怖を感じていた。この、恐怖対象である発作発生の予期と、発作による日常生活への影響を案じて不安が惹起していた。発作の時期・内容について、過去の経験からある程度の予測枠組みを形成し、発作開始の確率を計算することで対処しようとする中で、不安は「患者が過去の経験からそろそろ次の発作が来ると予想している時期」として定義した発作予想期に高まっていた。また、医療者に言われていたり、自身で認識している発作のトリガーを回避する、発作予想期内での予定を調整するといった対処行動により不安を軽減していたことから、高いコーピング能力が不安の HRQOL への影響を緩衝すると考えられた。また、小児の患者の場合は家族がトリガーの回避や療養環境の整備、突発的な発作時の対応などのサポートを行っていることが語られたため、良好な家族機能が不安の HRQOL への影響を緩衝すると考えられた。さらに、患者が神経症傾向にある場合には、発作のトリガーや予兆症状に過敏に反応し、日常生活において行動制限をする様子が語られており、患者の神経症傾向が強い場合には不安の HRQOL への影響が増大する可能性が示唆された。

研究 2

研究 2 では、児童・思春期の周期性嘔吐症候群患者の HRQOL の実態を明らかにすること、および先行研究と研究 1 の結果を受けて患者のコーピング能力、家族機能、および患者の神経症傾向の、発作予想期内における不安および HRQOL への影響を明らかにすることを目的に質問紙調査を実施した。対象者は 8 歳から 18 歳までの周期性嘔吐症候群・類縁疾患の患者と保護者とし、日本およびアメリカの患者会または機縁法で郵送法または WEB 調

査法により回答を求めた。患者が認識している発作予想期の時点で、患者に HRQOL

(PedsQL Generic Core Scales)、不安 (STAI-C)、コーピング能力 (A-COPE)、家族機能 (Family APGAR)、神経症傾向 (NEO-FFI Neuroticism)、発作時の痛み (NRS) を尋ね、保護者に子どもの HRQOL (PedsQL Generic Core Scales) の代理評価、および患者と保護者の基本属性を尋ねた。分析では各項目の記述統計量を算出したのち、日米の HRQOL の開発尺度得点との比較と親子間の得点の比較を行った。HRQOL との関連を明らかにするために、患者が評価した PedsQL 合計点数を従属変数とし、不安とコーピング能力・家族機能・神経質傾向それぞれの交互作用項を含めた階層的重回帰分析を実施した。

結果、日米合わせて 54 組が質問紙に回答した。平均年齢は全体で 12.8 歳、発症時平均 4.7 歳、診断時平均 6.6 歳であった。年あたり平均 10.6 回の発作があり、1 回の発作は平均 2.5 日であった。PedsQL 合計得点は平均 72.4 点、STAI-C 状況不安得点は平均 42.2 点であった。PedsQL 得点の開発論文データとの比較の結果、患者本人評価では合計得点・下位尺度得点すべてで本調査が有意に下回っており、特に学校での QOL 得点では大きな差の効果量が見られた。親子間の比較では、社会的 QOL 得点で有意に保護者が子どもの得点を低く評価した。階層的重回帰分析の結果、不安の強さは HRQOL の低下に有意に寄与し、コーピング能力の高さは HRQOL の増加に有意に寄与した。また、不安と家族機能の交互作用は有意に HRQOL の増加に関連し、不安と神経質傾向の交互作用は有意に HRQOL の低下に関連した。一方、不安とコーピングの交互作用に有意な関連はなかった。

考察

HRQOL 得点は一般集団より総じて低かったが、特に学校での QOL 得点は大きく下回った。ゆらぎのある発作周期に合わせて学校を休んで療養しなければならない周期性嘔吐症候群の患者では、患者の学校生活の質に大きな影響を与えている可能性がある。状況不安得点は、調査時期を限定しなかった先行研究よりも得点が高く、発作予想期内に患者の不安が特に高いことが本調査により示された。

HRQOL に関連する要因として、不安とコーピング能力が示された。周期性嘔吐症候群の患者では、発作予想期においては日毎に次の発作の予測が短期的になり、日常生活への心配も具体的になると考えられ、不安の強さが HRQOL の低下に影響したと考えられる。周期性嘔吐症候群の患者では、長年の発作への試行錯誤により医療者の助言や文献による対処法略を超えた、自身のトリガーや症状・状況に合ったコーピングが実践できている可能性があると考えられたほか、保護者を通じて療養生活上の情報を取り入れ戦略的なコー

ピングができていた可能性があり、高いコーピング能力は HRQOL の上昇に寄与したと考えられる。また、良好な家族機能は不安が HRQOL に与える影響を緩衝した。家族機能が高い場合には保護者が適切な情報を得て、間欠期の体調管理や発作期の子どものニーズに沿って、症状に適切に対処できていた可能性がある。一方で、家族機能が低い場合には発作の回数や不安に影響し、患者の HRQOL も低下する可能性が示唆された。最後に、患者の神経症傾向の強さが、不安の HRQOL に与える影響を増大させた。神経症傾向の強さは、身体の違和感や痛みの過大評価、不安への敏感さ、外部からのストレスに対処の困難につながると言われている。周期性嘔吐症候群の患者では、発作予想期において神経症傾向の患者は常に症状の到来に選択的に集中し、反芻的に繰り返すことにより次の発作の到来をより不安に捉えたり、身体の不調に敏感になって不安が増悪した結果、HRQOL が低下したものと考えられる。

臨床への示唆として、発作の軽減に加え、いつ起こるかわからない発作に備えた環境整備が重要である。また、発作予想期の存在と発作予想期に不安が高まることを医療者や学校の教諭および家族に伝える必要がある。その上で、医療者は患者・家族に予測枠組みを尋ね、不安の時期をアセスメントすることで、より効果的な治療や不安を軽減するケアが提供できる可能性がある。また、学校への疾患の説明や対応の協議・連携を促すことが重要であると考えられる。トリガーを認知し、そのトリガーへの対処や日常のストレスへの適切な対処を身につけることは HRQOL を向上させる上で有効と考えられるほか、家族が子どもの不安やニーズに寄り添えるよう促すことや家族への適切な情報提供も HRQOL 上昇に寄与すると考えられる。神経症傾向は不安の HRQOL に与える影響を増悪させることから、患者のパーソナリティを把握し、適切な助言やケアを提供すべきである。

日米の文化差の考慮が十分でないことや患者会からの対象者リクルートが大半であったこと、調査期間が短かったこと、横断調査であることなど限界はあるものの、患者数が少なく研究体制の確立が追いついていない希少・難治性疾患である周期性嘔吐症候群において、患者・家族の実態や社会心理学的なデータを収集したことは意義のあることだと考える。今後は研究体制の確立と同時に因果関係をより明確にできる研究デザインを組むことが必要と考えられる。

論文の内容の要旨

論文題目 同種造血幹細胞移植後 1 年半以内における長期フォローアップ外来を受診する患者と介護者の健康関連 Quality of Life と情報ニーズ：多施設共同横断研究

氏名 中嶋 祥平

【背景と目的】

同種造血幹細胞移植 (allogeneic-hematopoietic stem cell transplantation, allo-HSCT) を受けた患者は、治療技術の進歩により生存期間が延長している一方、全身に様々な障害を引き起こすとともに、Quality of Life (QOL) に影響を及ぼす。退院後の生活において、退院後から allo-HSCT 後 1 年程度の患者の健康関連 QOL (health-related QOL, HRQOL) は低く、各施設において長期フォローアップ (long-term follow-up, LTFU) 外来を設立し、患者に対し副作用や合併症の早期発見や日常生活への指導・情報提供を行っている。

本研究は、allo-HSCT を受けた患者の HRQOL の改善を目指すため、退院後の生活において重要な存在である LTFU 外来における情報提供と介護者に着目した。介護者も患者と同様に、身体的・精神的・社会的な問題を来しており、介護者への支援も考慮しなければならない。また、allo-HSCT を受けた患者とその介護者にまつわる広範な情報ニーズを鑑みると、介護者の情報ニーズにも着目し、患者・介護者の情報ニーズを充たすことでそれぞれの HRQOL を高めることができると考えられる。さらに、患者・介護者それぞれの情報ニーズと HRQOL は、相互依存的に関連する可能性があるため、Actor-Partner Interdependence Model (APIM) を用い、患者と介護者それぞれの情報ニーズと HRQOL との関連を検討した。

本研究の目的は、allo-HSCT を受け退院してから、allo-HSCT 後 1 年半以内において LTFU 外来を受診した、

1. 患者と介護者の HRQOL の実態を明らかにする
2. 患者と介護者の情報ニーズの内容とその重要度・充足度を明らかにする
3. 患者と介護者の情報ニーズの充足度が、患者と介護者それぞれの HRQOL にどのように影響するか明らかにする

の 3 点である。

【方法】

1. デザイン・対象施設・調査期間

自記式質問紙調査と診療録調査を併用した横断観察研究を、首都圏の LTFU 外来を有する 2 つの大学病院で行った。2018 年 2 月から 2018 年 12 月まで調査を行った。

2. 対象者

HSCT を受けた患者とその介護者（各患者に対し 1 名）とした。患者は、allo-HSCT を受け、LTFU 外来を少なくとも 1 回受診している 20 歳以上の患者を対象とした。介護者は、同居や続柄を問わない、最も患者の介護の役割を担う 20 歳以上の家族や友人を対象とした。入院中・再発が認められる患者や、患者の主治医もしくは LTFU 担当看護師が、患者介護者の病状や精神状態を考慮し、不適と判断した場合は除外した。

3. 調査項目

質問紙調査において、患者の HRQOL は、Functional Assessment of Cancer Therapy-Bone Marrow Transplant (FACT-BMT)、介護者の HRQOL は Caregiver Quality of Life Index-Cancer (CQOLC) と MOS 12-item Short-Form Health Survey (SF-12v2) を使用した。情報ニーズは、先行研究から項目を整理し、半構造的面接調査により質問項目の表面妥当性と内容妥当性を確認した 6 つのカテゴリー「HSCT 全般の情報」「退院後の治療」「HSCT の副作用や合併症」「セルフケア」「精神的・社会的問題への対応」「社会資源の提示」からなる 52 項目を使用し、患者と介護者それぞれに重要度と充足度を尋ねた。その他に、患者と介護者の基本的属性を尋ねた。診療録調査において、各施設の診療録より、疾患・HSCT、GVHD などに関する項目を収集した。

4. 調査手順

患者の担当医もしくは LTFU 外来担当の看護師が、基準を満たす外来通院中の患者と介護者を選定した。その後、研究担当者が、説明文書を用いて口頭で説明し、同意書へ署名し同意を得た。介護者が来院せず、口頭で説明できない場合、後日説明を行うか、同席した患者から説明するように依頼した。研究担当者より研究用 ID を付した質問紙を配布・郵送し、質問紙への回答を依頼した。質問紙の返送をもって、研究担当者が診療録調査を実施した。

5. 分析

各変数の統計を算出したのち、患者と介護者それぞれの HRQOL の得点を吟味するため、先行研究と 1 標本の t 検定を行い Cohen の効果量を算出した。仮説モデルを検証するために、小さいサンプルサイズで APIM を検討できる Pooled Regression APIM Approach を用い分析した。R ver.3.5.1 を用い、有意水準は両側 5% とした。

6. 倫理的配慮

東京大学大学院医学系研究科・医学部倫理委員会と、研究協力施設の倫理委員会への承認を受け実施した。研究参加者に対し、不参加や同意を撤回した場合でも治療や看護などいかなる不利益が生じないことなどを説明した。また、お互いの回答が見られないよう、別の返送用封筒に入れ返送するようにした。

【結果】

16組（患者：n=16、介護者：n=14）の参加者を分析対象とした（回収率：患者89%、介護者78%）。HSCの輸注日から質問紙を回答するまでの期間は約6か月だった。

患者は、男性が12名（75%）であり、平均年齢は約48.9歳だった。疾患は、急性骨髄性白血病が5名（32%）と最も多かった。最後に受けたallo-HSCTに関して、幹細胞ソースは、骨髄血が6名（38%）、末梢血幹細胞が7名（44%）、臍帯血が3名（18%）だった。ドナーは非血縁が9名（57%）と多く、血縁の続柄は、7名全員が兄弟姉妹だった。骨髄非破壊的前処置が9名（57%）と多く、day0から生着までの平均期間は、約19.9日だった。介護者は、女性が12名（86%）であり、平均年齢は、約56.7歳、続柄は、配偶者／パートナーが9名（64%）と最も多く、介護者全員が家族と同居していた。LTFU外来へ毎回同席している介護者は6名（43%）、ときどき同席している介護者は3名（21%）だった。

患者のHRQOLにおいて、FACT-BMTの総得点は、 91.0 ± 15.6 （平均 ± 標準偏差）だった。先行研究のHSCT前と比較したところ、社会面（SWB）は有意に低く（ $t(15) = -2.79, P = .010$ ）、中程度から大きな効果量がみられた。同様に、先行研究の無菌室退室後と比較したところ、機能面（FWB）は有意に高く（ $t(15) = 3.94, P = .001$ ）、大きな効果量がみられた。

介護者のHRQOLにおいて、CQOLCの総得点は、 88.2 ± 13.0 だった。在宅で介護を要する進行がん患者の家族介護者の得点と比較したところ、総得点（ $t(13) = 4.72, P < .001$ ）と、下位尺度の介護肯定感（ $t(13) = 6.71, P < .001$ ）、経済的負担感（ $t(13) = 2.53, P = .025$ ）、介護による生活の支障（ $t(13) = 4.85, P < .001$ ）において有意に高く、効果量も中程度から大きいことが分かった。また、SF-12v2の3つのサマリースコアは、身体面（PCS）が 59.1 ± 5.9 、精神面（MCS）が 51.8 ± 6.9 、役割／社会面（RCS）が 39.5 ± 11.8 だった。国民標準値と比較したところ、PCSは有意に高く（ $t(12) = 5.53, P < .001$ ）、役割／社会面（RCS）は有意に低く（ $t(12) = -3.19, P = .008$ ）、非常に大きな効果量がみられた。

患者・介護者の情報ニーズに関しては、「HSCTの概要」、「セルフケア」や「HSCTの副作用や合併症」など、身体面に関する情報が重要であると評価し、「精神的・社会的な問題への対応」、「社会資源の提示」など、精神・社会面に関する情報が充たされていないと評価していた。患者と比較し、介護者は、これらのHSCTに関する情報が重要であると評価しており、充足度は同様と回答する傾向がみられた。

Pooled Regression APIM Approachを用い、患者・介護者それぞれの情報ニーズの充足度の平均点と、患者のHRQOL（FACT-BMT総得点）、介護者のHRQOL（CQOLC総得点）との関連を検討した。説明変数を、情報ニーズの充足度の「全52項目」の平均点とした場合のActor効果は、 0.64 （ $t(15) = 4.98, P < .001$ ）、「HSCTの副作用や合併症」の平均点とした場合のActor効果は、 0.55 （ $t(16) = 4.88, P < .001$ ）、また、「セルフケア」の平均点とした場合のActor効果は、 0.73 （ $t(13) = 5.02, P < .001$ ）であり、有意であることが示された。一方、説明変数を、情報ニーズの「精神的・社会的な問題への対応」の平均点とした場合のPartner効果は、 0.35 （ $t(13) = 2.90, P = .012$ ）であり、有意となることが示された。

【考察】

患者の HRQOL は、患者の周囲における家族・社会との関わりが変化したことにより社会面の HRQOL が低くなったと考えられ、退院後の患者に対する社会面を中心とした支援の重要性を示した。また、介護者の HRQOL は、日常の仕事や家事の変化に加え、患者の身体的・精神的な支援を行わなければならないという責任を感じるとともに、家族関係や社会構造が変化することにより、役割／社会面の HRQOL が低くなったと考えられ、退院後の介護者においても、役割／社会的な影響を踏まえた支援が必要であると考えられる。

患者への情報ニーズの支援として、医療者は、患者が治療や副作用・合併症などの身体面に関する情報を重要と評価していることを理解する必要がある。患者が受けてきた治療や現在起きている副作用や合併症の状況を踏まえて、詳細の項目ごとの情報提供を行うとともに、患者の反応を確認する必要があると考える。

また、介護者への情報ニーズの支援として、医療者は、患者より介護者の方が身体面を中心とした allo-HSCT に関する情報を重要と評価していることを理解する必要がある。加えて、LTFU 外来などに同席できない介護者に対しては、定期的に患者の精神面・社会面にまつわる情報ニーズをアセスメントし、満たされていない情報ニーズを支援することにより、介護者の HRQOL を相互的に高める可能性があると考えられる。

【結論】

allo-HSCT を受け 1 年半以内において、退院後 LTFU 外来を受診した患者と介護者それぞれの情報ニーズと HRQOL について、以下の 4 点を明らかにした。

1. 先行研究における無菌室退室後の患者の HRQOL と比較すると、本研究の患者は機能面が高く、先行研究における allo-HSCT 前の患者の HRQOL と比較すると、社会面が低いことを明らかにした。
2. 一般集団の HRQOL と比較すると、本研究の介護者は役割／社会面が有意に低いことを明らかにした。
3. 患者・介護者ともに、身体面に関する情報が重要であると評価し、心理・社会面に関する情報ニーズが満たされていないことを明らかにした。また、介護者の情報ニーズの平均点は、患者と比較して重要度が高く、充足度は同等であったため、退院後における介護者の情報ニーズを充たす支援も必要であることが示唆された。
4. Pooled Regression APIM Approach を用い、患者・介護者のそれぞれの情報ニーズの充足度の平均点と、それぞれの HRQOL の関連を検討したところ、「全項目」「HSCT の副作用や合併症」「セルフケア」に関する情報ニーズを充たすことは自身の HRQOL を、「精神的・社会的問題への対応」に関する情報ニーズを充たすことは相互的な HRQOL をそれぞれ高める可能性があることを示した。

論文の内容の要旨

論文題目 医療依存度の高い小児におけるレスパイトケアが健康関連 QOL に与える影響

氏名 鈴木 征吾

序文

近年の新生児医療、小児救急医療の発展に伴って、小児の救命率が改善した一方で、救命蘇生後に重い後遺症を残す例や、重度の先天性障害を持った状態で長期的に生存する例が増加しており、日常的に何らかの医療デバイスや医療処置を必要としながら地域で暮らす小児が急増している。在宅で暮らす医療依存度の高い小児は、身体的な不自由さだけでなく、日常的に医療的ケアを必要とするために、親から継続的な見守りを受けることによる心理的な負担や、社会面の影響として友人との交流や学習の機会に制限が生じる。医療依存度の高い小児は、小児慢性疾患患者の中でも身体的、精神的、社会的健康度が悪化するリスクが高く、医療面および福祉面で支援が必要な集団である。

家族介護者に一時的な休息を提供するレスパイトケアは、医療依存度の高い小児の親にとって欠かせないサービスとして認識されている。一方で、ケアの視点から捉えると、レスパイトケアによって親子が物理的に離れることで、親の健康状態だけでなく、小児の健康状態にも影響を及ぼすと考えられる。基本的に常時見守りが必要な医療依存度の高い小児にとって、レスパイトケアは親の負担軽減だけでなく親子分離の機会となり、小児本人にとっても生活上の制約を軽減する支援となり得る。在宅療養の長期化や成長発達などを考慮すると、医療依存度の高い小児への今後の医療および看護介入を改善していく上では、小児の視点に立った評価が今後さらに重要になると考えられ、医療依存度の高い小児の健康関連 Quality of Life (HRQOL) の実態と HRQOL に影響を与えている要因を明らかにする必要がある。しかし、医療福祉および教育に関する公的サービスにおいて、看護師等が医療処置を行うことで提供されるレスパイトケアと医療依存度の高い小児の HRQOL との関連は明らかになっていない。

目的

本研究は、医療依存度の高い小児の HRQOL の実態と、レスパイトケアが小児の HRQOL に及ぼす影響を明らかにするために、第一に、レスパイトケアが小児の HRQOL の各側面に影響を与えている実態を明らかにすること、第二に、明らかになったレスパイトケアと小児の HRQOL との関連を媒介する要因として、親の HRQOL が媒介効果を持つことを明らかにすることを目的とした。

方法

1. 研究デザイン：ウェブ上での質問紙調査による横断的観察研究
2. 研究期間：2018年2月～3月
3. 調査施設：全国の都道府県立特別支援学校のうち、肢体不自由児教育部門または病弱

教育部門を設置する 237 校

4. 研究対象者：在宅で暮らす医療依存度の高い 8~18 歳の小児の主介護者である親。医療依存度の高い小児とは、重症児の判定基準をもとに、人工呼吸器の使用、気管切開、エアウェイ、酸素吸入、薬液吸入、吸引、経管栄養、腹膜透析、導尿、人工肛門管理のいずれかを必要とする小児とした。

5. 調査実施方法：

- 1) 学校長が研究協力に同意した学校において、包含基準を満たす親は、子が在籍する特別支援学校の教職員から研究内容を記載した説明文書を受け取った。
- 2) 回答者はそれぞれパソコンやスマートフォンを使って専用サイトにアクセスし、受け取った説明文書に記載された個別の調査用 ID 番号を入力したうえで無記名の調査票に回答した。

6. 調査項目：

- 1) 医療依存度の高い小児の HRQOL：KIDSCREEN-27 代理評価版。Physical well-being、Psychological well-being、Autonomy & Parent relation、Peers & Social support、School environment の 5 つの下位尺度得点と全般的 HRQOL 得点を用いた。
- 2) 親の HRQOL：A 12-Item Short-Form Health Survey version 2 (SF-12)。身体的、精神的、社会的健康度を表す 3 つの下位概念に基づくサマリースコア (PCS、MCS、RCS) を用いた。
- 3) レスパイトケア：過去 1 か月間に小児が利用した医療福祉サービスの種類と学校教育に関して尋ねた。居宅、通所、宿泊サービスにおける各合計利用時間、および合計利用時間のうち親子が実際にレスパイトケアとして利用できた時間を尋ねた。学校教育については在校時間とそのうち親が付き添わずに過ごせた時間を尋ねた。
- 4) 医療依存度の高い小児の属性：年齢、性別、診断名、必要な医療的ケア、運動機能、言語反応
- 5) 親の属性：年齢、続柄、婚姻状況、教育歴、雇用形態、経済的暮らし向き、親の介護負担感 (Zarit Burden Interview)

7. 統計解析方法

- 1) KIDSCREEN および SF-12 に欠損のある回答を除外した後に、小児と親の属性、および親子それぞれの HRQOL について記述統計量を算出した。有効回答者と無効・無回答者との間で小児の属性に関する変数を比較した。
- 2) KIDSCREEN を結果変数、レスパイトケア時間を説明変数、KIDSCREEN と有意な相関があった小児の属性に関する変数を共変量としてパス解析を行った。レスパイトケア時間をサービスの種類で 4 つに分けたパス図、さらに KIDSCREEN を 5 つの下位尺度に分けたパス図を順に作成し、それぞれパス解析を行った。
- 3) 2) で作成したパス図に、媒介変数として SF-12 を追加したモデルを作成してパス解析

を行った。KIDSCREEN に対して有意な直接効果がみられた説明変数ごとに媒介分析を行った。

- 倫理的配慮：東京大学大学院医学系研究科・医学部倫理委員会の承認を得て実施した。学校を通じて親に研究協力依頼を行ったが、個別の参加状況や回答内容を学校関係者に伝えないことを事前に説明した。

結果

有効回答数は 618 名であった。

1. 対象の概要

- 小児の属性：平均年齢は 11.8 歳で、移動全般に介助が必要な小児は 512 名 (82.8%) であった。脳炎脳症後遺症や脳性麻痺などの脳神経系の障害および疾患が 407 名 (65.9%) であった。非侵襲的陽圧換気を含めた人工呼吸器の使用者は 162 名 (26.2%) であった。有効回答者と無効・無回答者との間で小児の属性に関する有意差はなかった。
- 主介護者である親の属性：平均年齢は 43.7 歳で、続柄は母親が 597 名 (96.6%) であり、427 名 (69.1%) が未就労であった。
- レスパイトケア：サービスの種類別では、学校、通所、宿泊、居宅サービスの順にレスパイトケア時間が長かった。学校でのレスパイトケア時間 (月平均 70.2 時間) は、医療福祉サービスにおける合計レスパイトケア時間 (月平均 36.6 時間) よりも長かった。
- 小児の HRQOL：全般的な HRQOL 得点の平均は 37.1 点 (SD = 10.3) で、5 つの下位尺度得点は普通学校に通う児童生徒を対象とした得点と比較していずれも有意に低かった。

2. レスパイトケアが小児の HRQOL に与える影響

仮説に沿って作成したパス図はいずれも良い適合度を示した。結果は以下であった。

- 通所サービスでのレスパイトケアは、小児の Physical well-being、Psychological well-being、Peers & Social support の上昇と関連した
- 学校でのレスパイトケアは、小児の Physical well-being、Psychological well-being、Peers & Social support、School environment の上昇と関連した
- 学校でのレスパイトケアによる小児の Physical well-being および Psychological well-being の上昇は、親の HRQOL によって部分的に媒介された。

考察

本研究では、小児の年齢、発症時期、言語理解、運動機能、医療依存度を共変量として調整した上で、通所サービスと学校におけるレスパイトケアが医療依存度の高い小児の HRQOL を上昇させていることを明らかにした。また、学校におけるレスパイトケアが親の HRQOL を上昇させ、それに伴って小児の身体面と精神面の HRQOL の一部が上昇す

ることを明らかにした。

小児の HRQOL の向上に及ぼす効果は、学校でのレスパイトケアで最も高く、次いで通所サービスでのレスパイトケアであったことは、レスパイトケアの時間の長さや目的の違いが影響したと考えられる。通所サービスまたは学校におけるレスパイトケア時間は、居宅または宿泊サービスでのレスパイトケア時間よりもそれぞれ長く、小児にとって日常生活上の大きな要素になっていた。また、健常児と同様の経験ができるように、教育や福祉を目的とした通所サービスや学校教育の中で、医療福祉専門職がケアを行うことによって親子分離を実現することが小児の QOL 向上に影響したと考えられる。

結論

医療依存度の高い小児において、通所サービスと学校でのレスパイトケアはそれぞれ、小児の HRQOL の側面である Physical well-being、Psychological well-being、Peers & Social support の上昇とそれぞれ有意に関連した。学校でのレスパイトケアは、School environment の上昇にも影響した。公的なサービスにおけるレスパイトケアは、医療依存度の高い小児の HRQOL に対して直接的な効果があり、福祉や教育を目的としたサービスにおけるレスパイトケアを利用しやすい環境をさらに整備していくことが必要と考えられた。

論文の内容の要旨

論文題目 成人移行期支援外来における介入が思春期の小児慢性疾患患者の移行準備性に及ぼす効果：ランダム化比較試験

氏名 森崎（中村） 真由美

研究の背景

1. 小児慢性疾患患者の現状と課題

医療の進歩によって小児慢性疾患患者の生命予後が飛躍的に伸び、約90%の患者が成人を迎える。また、毎年約1,000名の患者が成人を迎えると推定されており、今後も増加する見込みである。患者は長期にわたって治療が必要な者、手術や治療後の成人期になって合併症が生じやすい者など多岐にわたり、定期的なフォローアップが必要とされる。しかしながら、小児医療では成人特有の疾患への対応や妊娠・出産の管理が困難である、成人患者が小児病棟へ入院できないなどの理由から、患者の成人後も小児医療の枠内で診療を継続することは困難である。そのため、年齢や発達に合わせた適切な時期に小児医療から成人医療へ移行することが望ましい。

このような背景から、小児慢性疾患患者に対する成人移行期支援が注目されている。成人移行期支援とは、単に成人医療への転科のための支援のみを指すのではなく、成人医療へ移行するために必要な自己管理能力の獲得や、意思決定への参加を促すための自立支援を含み、思春期早期より開始することが推奨されている。

2. 欧米と日本の移行期支援に関する比較

成人移行期支援における重要な概念として、疾患理解や受診行動の自立などの、移行へ向けた準備状況を示す「移行準備性」が着目されている。欧米では、移行準備性をアウトカムとした移行期支援プログラムに関するランダム化比較試験が行われ、医療者との面接やインターネットを介した知識の提供、医療者とのコミュニケーションに関する教育的介入が患者の移行準備性や疾患理解を高め、移行を促進する事が明らかになっている。

日本においても欧米のガイドラインや先行研究を参考にした、移行期支援外来の開設や移行チェックリストの使用などの取り組みが行われているものの、実践の有効性を検討した研究は見当たらず、エビデンスの構築には至っていない。さらに、欧米における支援モデルを導入する際には、日本の小児慢性疾患患者の特徴、医療制度、社会的背景を考慮したプログラムへ改変し、新たに有効性を検討する必要がある。

3. 日本における移行期支援プログラムの検討

成人医療への移行を妨げる要因として、患者から親への依存的な傾向、親による患者の自己管理や自立能力に対する過小評価が指摘されている。日本では、親から子どもへの保護的態度が欧米と比較して特に顕著であり、患者が成長してもなお、自己管理や意思決定の主体が親であり続ける傾向がある。

また、欧米では先天性心疾患、糖尿病などの個別の疾患の患者に対する疾患教育を主とした介入が行われてきた。しかしながら、このような介入は介入者の疾患に対する深い知識を必要とするため汎用が難しく、移行期の医療が疾患領域として確立していない日本においては、人的資源の問題から支援の維持・継続が困難である。

このような特徴をふまえ、日本においては、疾患横断的に適用でき、患者の自立に向けた動機付けと準備を目的とした移行期支援プログラムが適切であると考えた。

4. 研究目的

本研究では、疾患横断的に使用できるツールを用い、自立へ向けた動機付けと準備を目的とした移行期支援外来における介入が、思春期の小児慢性疾患患者の移行準備性に与える効果について、ランダム化比較試験を用いて検討した。

方法

1. 調査期間・対象者

2017年7月から2018年1月の間に、大学病院1施設の小児科・小児外科外来にてリクルートを行った。対象者は先天性、または小児期発症の慢性疾患を有する12から18歳の患者で、日本語のアンケートへ回答が可能な者とした。

2. 介入内容

同意取得後に患者をランダムに2群に割り付けた。

介入群の患者は、主治医の外来受診に加えて、2回の移行期支援外来を受診した。移行期支援外来は患者の単独受診とし、疾患理解や自己管理状況、将来展望などについて質問する問診ガイド、および医療情報をまとめるマイヘルスパスポートを使用した。移行期支援外来を通じて患者が疾患理解や自己管理状況を振り返り、将来を想起することで自立の必要性を認識すること、またわからない部分を主治医や保護者へ尋ねたり、自分で調べるといった行動が移行準備性の向上につながると考えた。

対照群の患者は主治医の外来受診のみとし、希望した患者は研究参加終了後に移行期支援外来を受診した。

両群に共通して、移行期支援外来に関する概要を記したリーフレットを配布した。

3. データ収集

患者の属性と医療的背景の情報に加え、介入前の1時点目、介入直後の2時点目、介入3ヶ月後の3時点目、介入6ヶ月後の4時点目に下記の内容について郵送によるアンケート調査、もしくはウェブアンケート調査を用いてデータを収集した。

1) 移行準備性、2) 自尊感情、3) 首尾一貫感覚、4) 独立意識、5) 受診態度

4. 統計解析

統計ソフトはIBM SPSS 25.0.0 for windows およびR version 3.4.1を用い、プロトコルからの逸脱があった患者のデータを含めたIntention to Treat (ITT) 解析を実施した。参加者の医学的背景と患者特性、各尺度得点について記述統計を算出した。連続変数については平均値と標準偏差を、離散変数については頻度と割合を算出し、Welchの t 検定、

χ^2 検定、Fisher の正確確率検定を用いて群間比較を行った。各尺度得点の群間比較には、1 時点目の得点を共変量とした共分散分析を用いた。

結果

1. 研究参加者

137 名の適格者のうち、80 名（応諾率 58.4%）が研究の参加に同意し、介入群 39 名、対照群 41 名に割り付けられた。

2. 介入プログラムの検討

介入群 39 名のうち、全 2 回の移行期支援外来に参加した患者は 31 名であり、1 回のみ参加した患者は 2 名、1 回も参加しなかった患者は 6 名であった。移行期支援外来に対する患者の評価として、90%が「移行期支援外来で自分の考えをととてもよく話せた/まあまあ話せた」を選択した。また、96.7%が「移行期支援外来を受診してとてもよかった/まあまあよかった」を選択した。

3. 各アウトカムにおける介入効果

主要評価項目である 2 時点目の移行準備性において、介入群 (54.52 ± 14.33) は対照群 (48.20 ± 15.10) と比較して有意に高かった ($\eta^2_p = 0.11, F = 8.45, p = .005$)。移行準備性の下位尺度であるコミュニケーションと自己管理においても、介入群 (12.74 ± 3.26) は対照群 (10.80 ± 3.86) より有意に高かったが ($\eta^2_p = 0.12, F = 9.07, p = .004$)、受診行動においては両群で有意差が見られなかった。3 時点目、4 時点目においても同様に、合計得点と、コミュニケーションと自己管理において介入群が対照群よりも有意に高かったものの、受診行動では両群で有意差が見られなかった。

自尊感情では、2 時点目において介入群 (26.34 ± 5.49) が対照群 (25.37 ± 5.36) と比較して有意に高かったが ($\eta^2_p = 0.07, F = 4.54, p = .037$)、3、6 ヶ月後では有意差がみられなかった。

首尾一貫感覚では、全ての時点で有意差がみられず、独立意識では下位尺度の親への依存性において 4 時点目のみ介入群 (16.05 ± 4.84) が対照群 (18.48 ± 3.56) より有意に低下していた ($\eta^2_p = 0.10, F = 5.18, p = .027$)。

考察

本研究は先行研究と比較して応諾率が低く、脱落率が高い結果であった。この理由として、介入が患者の学校の欠席に影響するデザインであったことが原因と考えられ、介入の臨床応用においては、長期休暇期間の利用などの工夫を要する。

本研究における移行期支援プログラムは、主要評価項目である移行準備性について介入効果が見られた。その考察として第 1 に、移行期支援外来で用いた問診ガイド、およびマイヘルスパスポートが、移行準備性を向上させるツールとしての妥当性を有したことが考えられる。患者は、問診ガイドに沿った医療者からの質問に答え、自分でマイヘルスパスポートを作成することによって、疾患理解や自己管理状況を振り返り、さらに就職や結婚、妊娠、出産など将来を想起することで、新たに生じた疑問に向き合うプロセスを経験

した。この経験が患者の疾患についての情報収集や、主治医への自発的な質問などの行動変化につながり、移行準備性の向上に影響したと考えられる。

第2に、患者が親と離れて一人で受診したという経験が、移行準備性の向上に効果的であったことが考えられる。長期間親が担ってきた役割を子どもが経験する機会を持つことで移行準備性が高まると言われているように、主治医とのコミュニケーションにおいて親に頼る傾向があった患者にとって、単独での受診は自立のきっかけとなり、移行準備性の向上に影響したと考えられる。また、親がいない状況で医療者に自分の考えを伝えるという経験は、患者の、親からの自立心を後押しし、4時点目の親への依存性の低下につながった可能性がある。

自尊感情については、介入直後の2時点目で介入群が有意に高く、それ以降有意差はみられなかったものの一貫して介入群の得点が高かった。介入によって患者が長期的な合併症のリスクや将来の就職、妊娠や出産への疾患の影響に目を向けることは、患者の不安を増大させ、自尊感情が低下する可能性も考えられた。しかしながら、移行期支援外来では同時に、不足している知識をどのようにして補えばよいか、悩んだときに誰に相談すればよいかを医療者とともに考えたことによって、患者はプログラムを肯定的に捉え、自尊感情の向上につながったと考えられる。

結論

自立へ向けた動機付けと準備を目的とし、疾患横断的ツールを用いた移行期支援外来における介入は、小児慢性疾患患者の移行準備性の向上に有効であることが確認され、自尊感情の向上と親への依存性の低下に有効である可能性が示唆された。今後の普及へ向けて詳細な移行期支援外来実施マニュアルの作成や、介入効果の長期的変化についての検討が必要である。

家族看護学教室 教室員（平成 29 年度～平成 30 年度）

教授	上別府圭子
非常勤講師	小林 京子
	涌水 理恵
	石田 也寸志
	渡辺 俊之
	前田 浩利
	池田 真理
講師	佐藤 伊織
助教	キタ 幸子
	副島 堯史

グローバルナースングリサーチセンター

研究員	目 麻里子（平成 29 年 4 月～平成 30 年 4 月）
研究員	戸部 浩美（平成 30 年 5 月～平成 30 年 8 月）
特任助教	戸部 浩美（平成 30 年 9 月～）
教室事務	浅野 万里子
	大場 史枝
	柏木いずみ（～平成 30 年 3 月）
	康 明淑（平成 30 年 4 月～）

教育でお世話になった先生方（五十音順，敬称略）

岩崎 美和
岡 明
小笹 由香
小林 康司
木村 敬子
小見山智恵子
佐竹 和代
清水 啓道
相馬 光代
長村 文孝
藤代 準
堀 成美
本田 京子
松本 和史

大学院生 博士

江本 駿 (平成 27 年 4 月～平成 31 年 3 月)
戸部 浩美 (平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月)
今井 紗緒 (平成 28 年 4 月～)
中嶋 祥平 (平成 28 年 4 月～平成 31 年 3 月)
鈴木 征吾 (平成 28 年 4 月～平成 31 年 3 月)
中村真由美 (平成 28 年 4 月～平成 31 年 3 月)
福井 千絵 (平成 28 年 4 月～平成 31 年 3 月)
大城 怜 (平成 29 年 4 月～)
吉備 智史 (平成 30 年 4 月～)
村田 翔 (平成 30 年 4 月～)
小林明日香 (平成 30 年 4 月～)

修士

林 真由 (平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月)
吉備 智史 (平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月)
村田 翔 (平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月)
小林明日香 (平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月)
上原 奈々 (平成 29 年 4 月～平成 31 年 3 月)
松永 百恵 (平成 29 年 4 月～平成 31 年 3 月)
澤柳 匠 (平成 30 年 4 月～)
村本美由希 (平成 30 年 4 月～)

卒論生

高橋 梨沙 (平成 29 年度)

研究生

千 恵琳 (平成 28 年 9 月～平成 30 年 8 月)

客員研究員

内藤 直子 (平成 10 年 4 月～)
渡邊 久美 (平成 15 年 4 月～)
松本 和史 (平成 16 年 4 月～)
栗原佳代子 (平成 20 年 4 月～)
樋口 明子 (平成 20 年 4 月～平成 30 年 3 月)
上野 里絵 (平成 21 年 4 月～)
津村 明美 (平成 21 年 4 月～)
三條真紀子 (平成 21 年 10 月～)
東樹 京子 (平成 22 年 4 月～平成 30 年 3 月)
山本 弘江 (平成 22 年 9 月～)
杉下 佳文 (平成 23 年 5 月～)

村山 志保 (平成 23 年 11 月～)
西垣 佳織 (平成 24 年 1 月～)
小町美由紀 (平成 24 年 4 月～)
陳 俊霞 (平成 24 年 4 月～)
當山 紀子 (平成 24 年 4 月～)
大野 真実 (平成 24 年 4 月～)
ブラブマン (田中) 一未 (平成 25 年 4 月～平成 30 年 3 月)
藤岡 寛 (平成 26 年 4 月～)
岡部 花枝 (平成 26 年 4 月～)
伊藤美千代 (平成 26 年 4 月～)
藤田 彩子 (平成 27 年 4 月～)
高梨 志帆 (平成 27 年 4 月～)
川原 美紀 (平成 27 年 4 月～)
末次 美子 (平成 27 年 12 月～)
桐谷 麻美 (平成 28 年 4 月～)
小石澤素子 (平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月)
大塚 寛子 (平成 28 年 9 月～)
菊池 良太 (平成 28 年 10 月～)
梅下かおり (平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月)
橋本 興人 (平成 29 年 6 月～)
林 真由 (平成 30 年 4 月～)
渡辺 雅子 (平成 30 年 6 月～)

特別研究生 丸山 暁子 (平成 27 年 4 月～)
中鉢 貴行 (平成 27 年 10 月～)

家族看護学教室年報 第 13 号

発行年月 平成 31 年 3 月 31 日

発行責任者 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野
東京大学医学部健康総合科学科家族看護学教室

Tel : 03 - 5841 - 3556 / Fax : 03 - 3818 - 2950